明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

May 20th 1910.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 219

大日本蠶絲會報

第貳百拾九號目要

▲皇孫殿下東京蠶業講習所御觀覽▼

●桑赤蹠病の話　農學士　堀正太郎

▲九州蠶界の微人　湯地恆雄君▼

●夏秋蠶に關する世の迷妄を排す　農學士　十時雄次郎

●繭質の統一に就て　學藝委員　八田達也

●波斯の蠶業と高岡製絲場　農學士　廣瀨次郎

●關西製絲場　農學士　加藤知正

●農業經濟上より見たる養蠶業奬勵の方針　農學士　櫻田丑雄

●實價の得らるべき蠶業政策　農學士　重富三男

●印度に於ける養蠶　農學士　須田金助

●米國絹業談　農學士　紫藤章

●予は何を製絲家に謀らんとするか　丹羽敬太郎

●本邦製絲界の悲境を救濟するの一策　技師　安東潛

●産業組合　松代製絲改良組　大里忠一郎

●佛國に於ける本邦産羽二重と新關稅　在佛國實業練習生　三田長太郎

▲菊水の商標　純水館理事長　武州蠶界の先覺者　故大畠喜三治君▼

▲小山久左衛門君▼

TOKYO.
The Association ;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

中原式乾燥器

歐米機業の進歩及び我國蠶業改善の結果乾繭器の充實は製絲家諸氏今日の重要なる急務と存候

中原式乾燥器今日の聲望は諸氏が多大の御賛助による賜と毎に深謝罷在候就ては此際乾繭器の賣價を改正して諸氏が斯の急務を解決せらるゝに御便利を謀るは各位從來の御厚誼に酬ゆる道なるを思ひ六石入乾燥器に限り別記の通り賣價の直下げを斷行仕候

當春は特に乾燥器充實が良好の結果を表示致居候やに考へられ候間此機を逸せず益々御愛顧御用命願上候　謹言

火熱式六石入　舊賣價金四百五拾圓　改正價金參百八拾圓
石綿、寒暖計、調帶、同　金五　圓　同　金　五　圓
蒸汽式六石入上部　同　金貳百六拾五圓　同　金貳百參拾五圓

東京市本所區德右衛門町三四

特許中原式合資會社

（電話浅花二、二二六番（電略ナカ）
（振替貯金口座一六五〇四番）

謹て弔意を表す

一千九百十年五月七日我親善の同盟國たる大英國皇帝エドワード第七世陛下崩御ささせ給ひ本日を以て大葬を行はせらる痛恨安ぞ堪へん惟ふに　陛下は世界平和の建設者として赫々たる偉功を樹立し給ひ世界の各國亦　陛下に期待し奉るところ多かりしに今や晏駕の報傳りて天日爲に光りなきを覺ゆ此の如きは是世界の最大不幸なり同盟國たる我日本の最大損失なり豈啻に大英帝國の不幸損失とのみいはんや畏くも我　聖上皇后兩陛下には日英博覽會名譽總裁として目下御渡英中の本會總裁　伏見宮殿下を御名代として本日の大葬に列せしめ給ひ以て限りなき哀傷の御意をつくさせらる本會は茲に全會員諸君と共に謹て弔意を表し奉る

明治四十三年五月二十日

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報　第貳百拾九號

目次

口繪

●大日本蠶絲會福岡支會發會式當日の光景
●九州蠶界の偉人湯地恬雄君
●信州小諸町純水館と館長小山久左衛門君

●皇孫殿下東京蠶業講習所御觀覽 …… 一—二

論叢

●桑赤澁病の話 …… 理學士 堀正太郎 …… 三—一六
●夏秋蠶に關する世の迷妄を排す …… 農學士 時雄次郎 …… 一六—二六
●繭質の統一に就て …… 學藝委員 八田達也

集芳

●波斯の蠶業 …… 農學士 廣瀨次郎 …… 二六—二九
●關西製絲場と高岡製絲場 …… 本會編輯主任 加藤知正
●農業經濟上より見たる養蠶業奬勵の方針 …… 農學士 櫻田壮雄
●實價の得らるべき蠶業政策 …… 重富三男

調査

●印度に於ける養蠶 …… 農學士 須田金之助 …… 二九—四一

叩門

●米國絹業談 …… 農學士 紫藤章
●予は何を製絲家に謀らんとするか …… 宮城縣技師 丹羽敬太郎
●本邦製絲界の悲境を救濟するの一策 …… 三重縣技師 安東濟
●蠶業試驗場の新計畫 …… 農學士 大里忠一郎
●松代製絲改良組

心影

●九州蠶界の偉人 …… 湯地恬雄君
●純水の商標 …… 純水館主人
●武州蠶界の先覺 …… 故大卓嘗三治君

寄稿者

蹠響 …… 海外實業視察生 三田長太郎 …… 四八—五〇

關稅 …… 學藝委員 吉池慶正

實務 …… 愛媛縣農業技師 池田榮太郎
本會事務囑託 馬場由信 …… 五〇—五六

年中行事 …… 編者

編輯者

●屑物整理

絲況

●横濱市場 …… 紐育市場 …… 里昂市場 …… 廣東市場 …… 五六—六一

資料

●全國蠶種貯藏穴調査概要 …… 六一—六二

問答

●清海道及其他の件に就き質問答 ●鄙青器及蠶病の件に就き質問答 ●桑葉樣に就き質問答 ●鄙青器に就き質問答 ●春蠶飼人工越冬法に就き質問答 ●軟化病に就き質問答 ●紅色卵に就き質問答 ●パーレ粉基に就き質問答 …… 六三—六四

會務錄事 …… 六五—七〇

●福岡支會發會式 ●九州沖縄大會 ●三重支會第九回總會 ●支會職員の囑託 ●地方委員部職員の囑託 ●特別會員の推薦 ●日常講演會へ本邦蠶絲の出品 ●本會職員の出張 ●屑調整理講習會

蠶桑雜觀 …… 七〇—八〇

●東京傳所の顯微鏡 ●生絲問題調査會 ●絶出生絲の化學試驗 ●原富國製絲所の新計畫 ●桑赤澁病の發生 ●本年の蠶況 ●西ヶ原蠶友會の運動會 ●生絲檢査所檢査成績 ●宮城縣岩手山町の蠶業團結(二六) ●紫葡萄軍の滅亡 ●文藝 ●詩海消滅 ●人事彙報 ●新刊紹介 ●實驗風穴種の飼方(二八) ●蠶編桑樹栽培法(四一) ●蠶兒體病の病原(四八) ●通俗養蠶問答(五〇) ●養花物語(五六)

Scène de l'inauguration de notre succursale de Fukuoka.

大日本蠶絲會福岡支會發會式當日の光景

式後講話會場の光景

晩餐會の光景

品評會廣告

一會　期　從明治四十三年十月十六日至同　年同月二十日　五日間

一開設地　宮城縣遠田郡涌谷町

一出品物　蘭（一名稱二付五合以上）　蠶種（極製五十六繭壹枚以上　普通製壹枚以上）

桑苗（一名稱二付二十本以上）　生絲（一絕又ハ十匁以上）

眞綿（一束二付二十枚以上）　蠶具（一個又ハ一組）

一出品期日　從本年九月一日至同　十月五日

大日本蠶絲會　宮城支會

Monsieur T. Yuchi, éminent sériciculteur de Kyushu.

九州蠶界の偉人湯地恒雄君

La "Junsaikwan" de Komuro Shinobu, et son Président Monsieur K. Koyama.

信州小諸町純水館と館長小山久左衛門君

小山久左衛門君

純水館工場の光景

小山氏邸宅と純水館事務所

純水館御蔵場（組合再繰場）

純水館御蔵場（組合再繰場）内部の光景

大日本蠶絲會報 第貳百拾九號

重要記事

皇孫殿下東京蠶業講習所御觀覽

英明に渡らせ賜ふ皇孫迪宮、淳宮兩殿下には本月九日御見學の爲丸尾御養育主任、松平御用掛侍醫一名を隨へ西ケ原なる東京蠶業講習所へ行啓遊ばされたり、此日兩皇孫殿下には閑院宮春仁王久邇宮邦久王兩殿下を初め、學習院初等科二三學年生八十二名を御隨伴せさせ賜ふ御豫定なりしを以て、午前七時御出門、御馬車にて道灌山に成らせられ、茲に石井教授外三名の教授、付添ひ四ッ谷驛より電車にて田端に向はせられたる、兩若宮殿下、其他八十餘名と落合せ賜ひ、暫し道灌山にて御散策の後、兩皇孫殿下には提ぐくも御徒歩にて麥畠中の小徑をいと御元氣好く、中途學院生徒の奉迎を受させ賜ひ九時半頃蠶業講習所に御着遊されたるを以て、本多所長下岡農務局長、芳賀蠶絲課長、奉迎し、本多所長の御案内にて、貴賓室に休憩されたり。

斯くて御少憩の後一行五組に分れ、兩皇孫並に兩若宮殿下には本多所長、下岡局長御案内申上げ、他四組は中村、肥後、の二技師及松下、畠瀬の二技手夫れ〳〵案内せられたり。同所々員一同は同所玄關前に下岡局長御案内申上げ、他四組は中村、肥後、の二技師及松下、畠瀬の二技手夫れ〳〵案内せられたり。

御注意深き御觀察

本多所長の御案内をうけさせられたる四殿下には先づ階上の陳列室に入らせられ、第一に早中晩桑樹の生育程度の比較及柘桑を御覽ぜられ、第二に山繭の幼蟲、桑葉蟲、金毛蟲、枝尺蠖の飼養箱中におのかじし、或は靜止し或は蠢ひ、或は喰ひを御覽ぜられ賜ひしが殊に、枝尺蠖、靜止せるには、いと御意を留めさせ賜ひて蓋を開き御手を觸れて暫らく御熟視遊されたるには、御研究の緻密なるに感歎せざるはなかりき、次て桑樹害蟲及絹絲蟲等の標本に就て、一々御説明を聞取らせ賜ひ蟻蠶及一齡より四齡迄の蠶兒を御覽あらせられては、直ちに種類は何かと御質問あらせられ、蠶兒解剖模型及繭、蔟（結繭しあるもの）より消毒器、病蠶、内外各國產繭及絲質絲長等の比較に就ては一々熱心に本多所長よりの説明を聞き取らせ給ひて審さに御觀覽あらせ賜ひたり、次で一疋の蠶は二千餘尺の繭絲を吐くを以て、六疋の蠶兒が吐出

桑赤澁病の話

學士農學士　堀　正太郎

緒言

近來桑葉、三蚕、高知、愛媛郡縣下の桑樹に赤澁病が流行して就中高知縣の如きは被害区別が一千町歩餘にも及ぶといふことである、本年も亦季節になつたら此等の郡縣下に發病を見る様に相違ないが、三蚕縣では既に飯南郡内の桑園二百町歩に發病したといふ報告が四月(二十三日主務省に達した、斯く赤澁病が年々蔓延するのは種々の理由があるのであるが、其一番大切なる事は、外の地方に発病する事あらうと思ふ、又一旦發病した地方は、完全に病區域を增すのであるから、今丁度發病の大體の話を掲げて栽桑家並に當局者の參考に供しようと思ふ。

歴史

時珍の本草綱目第三十六卷桑の條に桑生黄衣、謂之金桑、其木必病、蟲蚀葉、とある、其金桑といふのが即ち赤澁病被害桑のことである、之が多分記録に載つて居る一番古いのであらうと思ふ、併し桑赤澁病の性質に就て初めて學術的に説明をしたものは印度の「バークレイ」氏である、氏は我明治十八年十一月に印度西ヒマラヤの「シムラ」地方に於て桑の赤澁病を發見し、病原菌に「ウレドウ、モウリイ」Uredo (Caooma) Mori といふ種名を附けて「ベンガル」亞細亞協會の報告書に其解説を載せたのである。

明治二十三年四月故田中延二郎氏は東京駒場農科大學の桑園で本病を發見し、續て安藤喜一郎氏は山形地方で發見して其標本を田中氏に送られた、田中氏は病原菌の種類を研究して「バークレイ」氏の命名した「ウレドウ、モウリイ」菌と同一種であると鑑定して本病菌發見の來歴を此歳十月發兌の植物學雜誌に掲載された、日本に桑赤澁病のものと同じであるといふことを鑑定し又日本にも印度と同様に桑に赤澁病があるといふことを初めて報告したのは田中氏である、此

する繭糸を綿き合すれば富士山の高さに達すと云ふ、又三度除もあらんかと思はるゝ彩畫の北斎圖に歌うを御蔵明申上げし折は非常の興味を以て御聽問あらせられ、次に人造絹糸及び其織物、他方には生絲を以て製造せる物品は大小となく陳列して御看覧に供し、最後に綿織一反の織出さるゝ所に至る迄の、原料の前身を順次に表はせる實物標本に熱心らせられ、終つて養蠶部一年の剪桑實習及蠶室地下貯桑室、二年蠶室及試驗室、並に三年の桑小屋蠶室を御覧あらせられて製絲部に移らせ賜ひ、回轉式乾燥器の廻るを見るなはち賜ひては何故廻るかとの御質疑あり、次れより巡視し、乾燥、貯繭實習、各種製絲器械及天蠶、作蠶、製絲、及桑、色等御覧の後、貯水池、呼鐘室に入らせられ給ひしが、汽機及ポンプの運轉には殊に御注意あらせられ、熱風殺ひ來る室をも厭はせ賜はず、永く御注視あらせられ、次て真綿紬絲、玉絲、繰糸、(以上男子生)より機械製絲、(女子生)等製絲部(生徒實習の模様を御覧の後陛下は生絲整理室に入らせられ、蚕に生繭の肉眼及機械檢査より猛造の上輸出せらるゝ迄の順序を仔細に御聞き取あらせられたる後、休憩室に入らせられ御携帯の御行厨を賜はり、御休憩中雨殿下よりは御學友一同御宛を賜はり、御學友を伴ひ農事試驗場に成らせられたるを以て、所員一同は玄關前に来迎し、長は同所迄御案内申上げたり

長は同所迄御案内申上げたり

大正十年三月

の標本等御覧せられたる後、東側の農場に於る禾穀類の培養試驗を御覧せられしが、鎮毒地と同質なる土質に植え穀類生育の模様を御覧せられ、種々の試驗の生育を留めさせられ、種々の試驗しき場に御目を留めさせられ、又一同と一緒に御覧せられ、蚕に電氣の實驗等御覧の後、裏手の農場に出でさせられ、同場に於て試驗、製茶の順序等御聽取の後、廣野にて御學友一同と一緒に時間許り婦々として御遊歩遊ばされ、午後二時五十分雨の皇孫殿下は雨若宮殿下其他一同は徒歩王子停車場に向ひ歸途に就きたり

鶯呼鉉に筆を滋へんも長き時は長きに行啓在らず今又皇孫殿下の御見學の爲めとは云へ、行啓あらせられ、御幼年の御身を以て長き時間に亙り常に御觀覧在らせられ、本多所長の詳しき御説明以外に種々の御質問を發せられ賜ふ、吾人は永く感泣の外なきも茲に其概略を記し奉り其喜びを會員諸君に頒たんとす、

重ね(東京蠶業講習所の講師なる名譽なると共に又、吾人蠶絲業者の名譽にして蠶絲が國家重要輸出品に属すれば之期かる名譽を賜はなれ、同業者たるものの御幼少なる皇孫殿下の御心に對し奉りても勉めてやあるべき今や時季節なり各自其途にいそしまれむことを。

歳八月我邦に於て知入北村藤一氏別邸内の桑樹に發見した、又玉利喜三氏は信州にて目撃されたといふことが日本蠶業新誌第十二號に載つて居る。

此歳六月一日「バークレイ」氏は「ベンガル」亞細亞協會に於て「シムラ」蓬桑試園の追加と題する講演中に斯ういふことを報告された、前年「シムラ」地方に於て採集した、無花果の一種（Ficus palmata）に寄生して居た赤蟻病菌は嘗に「ウレドウ、ケオマ、モウリイ」の種名を附けて解說して置いた、桑の赤蟻病菌と同一種であつて尚ほ頗微細で能く調べて見ると明に護膜があるから學名を「エーシヂウム、モウリイ」と變更したと此講演は、翌二十四年發行第六十卷第二部第三號紙上にて發表された（我邦出版の二三の書籍に「エーシヂウム、モウリイ」なる種名の命名者を「ヘンシング」氏としたり、或は「ヂイデル」氏としたものを散見するが之は間違である、若し此等二氏が命名したことがあるならば、其れは「バークレイ」氏のものである訂正報告を見なかつたのであるから、同種異名となるのである）此歳我蠶は日光產の桑赤蟻病菌を鏡檢したところが、明に護膜があるので「バークレイ」氏は本菌を「ウレドウ」屬の者として報告されたけれども護膜がある以上は「エーシヂウム」屬に屬するものであるから「エーシヂウム、モウリイ」と訂正するが至當であるといふことを東京植物學會で講演をした、不ら考へて見ると數年以前に我邦と同一度とに於て殆んど同時に別々ずつして本病菌の種類に就て研究をしたのは誠に奇調といふべきである。

明治二十六年には岐阜縣下に發生したのを見た又明治二十九年には東京西ケ原蠶業講習所の桑園の道路の兩側に植えてある、七桑に劇しく發病したのを見た、又北海道の立桑には其害が劇しいといふことを聞いた此頃迄は本病は單に立桑に往々見るところの一小病害と誤り思つて居たが、近年になつては、數百千町歩の大桑園に發病した大害を見る樣になつたのは其だ意外である、之は桑樹の種類、栽培法、肥料等が養蠶の進歩發達に伴つて變化して來たからである。

明治四十年に「ジドク」氏及「ブットラー」氏は協同署名で印度蓬園類誌と園藝學會雜誌第五卷第六號に發表されたが其中に「バークレイ」氏は無花果の一種、Ficus palmata の赤蟻病菌と桑赤蟻病菌とは同一種であると報告されたけれども、之は間違である、無花果の赤蟻病菌は「ウレドウフイチイ」Uredo Fici (Cast. であるといふことが記載されてある。（未完）

夏秋蠶に對する世の迷妄を排す

學務委員
農學士　十時雄次郎

本編は十時學士が本會報二百十六號、臨時號に掲載せられた夏秋蠶と農村といふ講演の續きである紙數に限り止あつた爲に全部を載せ得なかつたのは其だ遺憾とする處であつた故に茲に夏秋蠶に關する世の迷妄

を排すと題して更に題名を附して讀者諸君に提示することにしたのである讀者諸君は其御含みで御賞あれ。（編者）

夏秋蠶繭は製絲家喜ばず

本會報第二百十六號に述べた如く夏秋蠶は農村の副業として最も良好なる、又一面年々隆盛なるに拘はらず製絲家中には之れを購入することを喜ばぬものが往々あると云ふことである、熊本縣に於ては、某製絲家は絕體に購入を拒絕し山口縣に於ては、某製絲家は又其の購入を拒絕したのを見た、故に養蠶家は殆んど於賞に極めて安價を以て販賣し、敢去相償はざりしことを目撃した、又或は遂に販賣することをせず座繰にて自ら製絲せるものを見たのである、余輩は製絲に關しては全く無識なるの故を以て、製絲家として購入するに足らざるものなるや否を知らず、併し此の如き製絲家の言ふ處を聞くに、夏秋蠶はエキストラ絲を製するの原料たる能はずと、若しエキストラの原料たる能はずと云ふので、加之其の製絲家が、エキストラ絲をのみ產するの意果して眞なりとせば、吾人も亦に其の製絲家の意に贊同するものである、併し此種の觀念をのみ有して、製絲に從事せるもの幾人ありや。

製絲家の喜ばざるは商略に非ざるか

聞く處によれば製絲家は常に上繭のみを購入すること能はずして中下繭をも購入すると、而して此の如く上下の繭を用ゐて製絲せんか、上繭よりは上絲、中繭以下よりは下絲を得んこと明なれども、寧ろ此等を混合して製絲するの利極めて大なるを以て、一々區別するの不利を爲さずと、製絲業も營利的業務なり利益の小ならんよりは、大なる方法に出づべきは覩易き所である、此の如き製絲家の數多からんことは疑ふの餘地なかない、して見れば前者の目實とする處、必ずしも眞なりと云ふことは出來ない、寧ろ可成的安價に購入せんとするの商略にあらざるなきやと思はれる、吾人の實驗によるも、春蠶の上繭と秋蠶の上繭とより製絲したるものとなり五六貫販賣したことあるに、反て秋蠶絲は遙かに高く約五六貫販賣したことがある、斯くして見れば春蠶も其の上級中の天候及び取扱法の如何に依り、必しも優良絲の原料たり得べきことゝ斷定することは出來ないではあるまいか之れに反して夏秋蠶絲必しも劣惡なりと云ふことも斷定することは出來なからうと思はれる、併し斯く云ふ吾人も夏秋蠶絲は春蠶絲より優良なり或は同一なりと云ふのではない、如何はしい製絲家の云ふ如く夏秋蠶絲が惡いと云ふ程ではないと云ふのに止るのである。

夏秋蠶絲必ずしも劣惡ならず

夏秋蠶絲に關して製絲試驗をして公表せられたるものを知らないが、横濱生絲檢査所に於ける、品位檢査の成績を通覽するに夏秋蠶絲と春蠶絲との間に、强、力及び伸度に於ては著しき徑庭を見出さず、若し伸度强、力を以て製絲の良否を判ずるとせんか決して夏秋蠶絲の春蠶絲に及ばざると云ふに

ことが出來ないではあるまいか、故に往々夏秋蠶絲を以て、春蠶絲に比べ遜色なしとして愛々と賞讃する樣である、佛し生絲の良否は、此の二點を以てするではない類節の多少、再繰の場合、切斷數の多少等を以て考慮せなければならない、切斷數と類節は三十五年以來四十一年に至る七箇年の成績に依り、春蠶絲より夏秋蠶絲は多少劣ると云ふことは出來ぬ、故に春蠶絲より夏秋蠶絲は多少劣ると云ふことは外はないが、佛し昔日夏秋蠶の排斥せられし時代と比較せば、其の廟に於て著しく進歩し、絲に於ても進歩したることは疑ふ餘地がない。

製絲家も一顧せよ

今後の研究に依りては、今日に於けるより必ずや數等優良のものたり得べきやや信ぜざるを得ない、而して將來は云はずとするも、今日に於ても製絲法に於て多少注意する所があらんか、より善良なる生絲を製し得べきやや必ずやである、之れを以て余輩は世人の稱ふる如く夏秋蠶絲は必ずしも劣惡なりと云ふことに贊同することは出來ない、横濱に於て夏秋蠶絲がエキストラ格を以て販賣せられたることは聞くことが出來ない、上一番格を以て販賣せられたることは事實である、養蠶家も一と奮發を要するが、寧ろ此の點に於ては製絲家の一番奮勵して優良なる生絲を產するに務められんことを希望するものである、徒らに夏秋蠶繭は、エキストラ絲の原料とならず等と稱して一顧ざるが如きは、之れ醫君子の閑寂を好むと同樣ではあるまいか淑を嘗むものは枯木死灰と同樣だと思ふ、人に先んぜんことを希ふは、又吾人大志の意よる所にあらざるも、枯木死灰だらんことは、これざるべからざる所である、實に之れは、製絲家の一顧を煩はし度いと思ふ處である。

夏秋蠶の發達は集約的農業と同一なり

養蠶家の内には右の如き製絲家の口實に恐れを抱くものもあらん、佛も是れは決して意ずるに足るまい、製絲家果して喜ばざるや、假りに之れを喜ばずとするも、尚ほ充分善良なる繭を產するに注意せば製絲家と雖ども之れを拒絶することはなかろう、製絲家も利のある所に向ふに相違なく、故に養蠶家は充分善良なる繭を產すべく注意することが必要である、而して夏秋蠶の發達は、農業組織の集約なるに同一の効果を呈するのである、則ち集約ならんには、資金を充分投入することが第一の要件である、然るに夏秋蠶の發達は多くの資金を投ずると同一般である、何となれば、從來養蠶と云へば春蠶の如く考へて居たが、春蠶は勿論夏秋蠶に至るのであるが、故に同一の器具、同定資本一を一回使用せず昔日に比し、二回、乃至三回、使用するに至れば二倍乃至三倍の資本を投ずしと同一理になるではないか、舊り器具の如き類のみならず、風穴、種の發見以來同一育時期の如きも隨意（多少商業あれど）變じて二三回に飼育することが出來る、

殊に其しきは九月より十月に亘りて飼育する晚秋蠶の如きもある、此等は又秋陰なる蠶室にて足ることを示すものであつて、蠶室に於ても亦經濟的と云ふことが出來る。

夏秋蠶の性質は之を飼育せざるを得ざらしむ

將來の農村に於ける農業組織は、集約的に趨り、即ち多くの資本と多くの勞力を投じ、以て同一面積の田畑より多大の收入を得ることにあるは、既に述べたるが如くである、佛し勞力は年々缺乏しつゝあり資金は豐富ならざる現在の農村に於て、此目的に最も能く適合するは、實に夏秋蠶なること前段述べた所により知ることが出來る、して見れば此夏秋蠶飼育は、農村を富裕ならしめんと欲するものゝ富さるを得ないことゝ思ふのである、或は夏秋蠶は極めて安價なりと云ふものがあろう、夏秋蠶繭の春蠶繭に比し、安價なることは事實にして止むを得ない、春蠶繭の五圓五十錢せし場合に、秋蠶繭の二圓五六十錢と稱せし如き例は、昨年に於ても由日地方に見た所である、又此に驚歎たる例は、九州に於ても見た處である、然らば之に反せし如き例はないかと云へば、全く無いことはない、伊豆地方に於て秋蠶繭を四圓五十錢乃至五圓にて昨年賣買が行はれたのである、而して價格に於て、夏秋蠶繭は、春蠶繭に比し、安價なることは事實なれど左程案ずるに足らない、又安價にして、少量の桑葉を以て、夏秋蠶繭は農閑の時に於て、短日月に於て、少量の桑葉を以て、炭火を用ゐ補溫する如き面倒の手段を要せずして得たるものであるではないか、小養本に依り得たる夏秋蠶繭が、多大の資本の下に飼育せられて得たる春蠶繭より高價なることは望まなくとも宜しいのである、之を望むは一攫千金の利を得んとする商人根性と云ふ可きである、此の如き根性は、寧ろ農民より驅逐せざる得ない、佛し各人の丹精に依り、上繭を得、春蠶繭以上に高價なるを得は、之れ天の恵みとして、難有御受するが宜しい。

夏秋蠶利益の點

右は農村の現狀に對して、夏秋蠶の能く適合することを說いたのである、吾人は右の理由の下に、夏秋蠶の發達を希望するものである、而して其の他夏秋の利益とする點は又決して甚なくない、例へば蠶蛆の害かない事である、凍害の桑葉を利用することが出來ることか云へ樣のもので、數へて見たならば深きあだらう、佛し吾人は少利を捨てる譯ではないが、此の如き些細に利益の點を數へ擧げて夏秋蠶の奬勵をなさんとするものではない、讀者も余輩と感を同ふせらるゝもののあらば發達せざる夏秋蠶地方に向ふ、此種の理由の下に推奬せられんことを希望して止まない次第である、宜しく農家にして、未だ夏秋蠶の飼育をなさる諸君は、此の方面、換言すれば將來の農業組織或は農村の事業たる考の下に着手せられんことを希望するのである。

春蠶を排せよと云ふに非らず

此の如く夏秋蠶は、幾多の利益あると共に將來農村の副業として、最も適當なるものたるや明鏡に對する如き感ありとするも、又決して獨り夏秋蠶を隆盛ならしめ、春蠶を疎外せよと云ふのではない、春蠶も充分發達せしむることは無論必用である、現今に於けるより幾百步進步するところあるも、決して一步も半步たりとも退步せしむべきではないが夏秋蠶は今後大に發達せしめなければならぬ、之れ夏秋蠶は實に農家に福を與ふるものなるが故である、從來蠶業の隆盛なる地方に於ては、飼育量の多きを以て、一種の傲とせる處があつた、故に春蠶に於ても十枚掃立てるとか、二十枚掃立てるとか稱して、性も知れぬ、出稼日雇を使役して、氣候の最も蠶兒の發育に適する春季にだてすら失敗を招いて居つたのである、此の如き養蠶は、投機的の性質を帶びて決して感心すべきてない、宜しく其の家相應の、或は監督の充分屆く範圍に於て飼育するが良い、換言すれは、此の如き地方にありては、養蠶が專業的に化して、反て利益を少くして居たのである、斯る際は全く打破らねばならぬ、則ち春蠶も其家相應に、夏蠶も秋蠶も其家相應に、農家の副業らしく從事して貰ひたい、玆に於て吾人は言ふ、春蠶に於て極端に力を盡せぬ農家は、春蠶に於て八分の力を盡し、夏蠶秋蠶に於て五六分の力を用ゐるに至らんことを希ふのにあると更に言はん、養蠶は副業なり決して專業とす可きでない故に養蠶をするにも、副業らしく、農家らしく、行る事が必要であると。

夏秋蠶をして春蠶より多からしむる勿れ

夏秋蠶は、縷々右に述べたる如く、實に有利なる業務である、而して、地方に於ても、其利を知り、年々盛大に趨くのである、然るに、實際の狀況を見るに、或は春蠶の如く多量に、或は春蠶を凌駕せんとして居る地方がある、此等は絕對に排斥す可き事と云ふのではないが、餘り贊成することは出來ない、小理窟を並べ立る迄もあるまいが、吾人は夏秋蠶の飼育量を、春蠶の飼育量の、五六分位に止めたいと思ふのである、勿論遠き將來を云ふのではない、現今の夏秋蠶に關する、學理、技術、等の發達の狀況より考へて云ふのである、凡て技術と學理の進步が、夏秋蠶繇をして春蠶繇以上又は少なくも同等なるに至らしむることが出來るに至らば、大に盛に行るが宜しからう則ち其時期の到來迄は餘り極端の事をして貰ひたくないと云ふに過ぎぬ。

迷動的に陥る勿れ

一般に養蠶家（普通農業家に對して）は、迷動的に陥り易き弊を有する樣に吾人は見て居る、賞讚的に評せば進步思想に富んで居るといはふか、寧ろ富み過ぎて居ると云はねばなるまい、例へば、十數年前、人工養蠶法の發見せらるゝや、人々は其法に注意し、又實行せんとするものが增加した、處が數年ならずして、此法は其影をすら失してしまつた、夫れから天日蠶と云ふものが起つた、之れも全然失敗に終つた、次に全葉飼、全芽飼、或は櫓飼等、其流技を擧げたら、之も澤山あるだろうが、今殘つて居るのは、全芽飼と櫓飼とてある、此等方法の良否は云はないが、大勢は既に定つて居る樣である、現に角飼育法に於ても、一つの流技が起ると、忽ち蠶界は靄然となる、徒らに靄然たるのみならず、實行する、實行して失敗すると云ふのである、此等も進步的と云へば、確かに進步的思想より起るのであるが、吾人は之を迷動的と云ふのである、此の如く其技術上に於て迷動的に陥るのみならず、思想界に於ても迷動的に陥ることが澤山ある事は、讀者も觀破せられて居ることと思ふ、併し自己の缺點は自ら觀破することは甚だ容易でない、假令觀破する處あるも、之れを悛改することは甚だ困難てある、故に遂に其際に陥るのである、夏秋蠶も農家の副業としては、唯一の有利なる業務であるが、有利なる丈け、迷動に陥り易いと思ふ、即ち春蠶を淩駕せんとする如き勢を呈せんとせる地方は、確かに此迷動的に陥れるものと云ふことが出來るだろう、迷動的事業は其人を眞に利するものでない、眞に發達するものでない、其基礎安固たることが出來ない、而して反面に於ては、常に禍を榮りつゝあるのである、退步の萠芽を生じつゝあるのである、其基礎は蠶食せられつゝあるものである、迷動的業務は雲間の電光の如き、風前の燈火の如きものであることを考へて貰ひたい、斯く云へばとて決して保守的なれと云ふにあらず、保守的の中に進步的の思想を有し、進步的の中に保守的の思想を有して、所謂動中靜あり、靜中動ありの思想を以て、其業務に從事せられん事を希望するのである、之れ夏秋蠶が有利なる故に、大に其發達を企圖し大に奬勵せんことを欲するが故に、敢て此說をなすのである、決して夏秋蠶の、急劇の進步を徒らに排斥するの意ではない、唯冷靜なる考慮の下に夏秋蠶飼育に從事せられんことを希望するのである。

夏秋蠶の主要なる利は又實に玆にあり

農村問題を說くもの、多くは勤勞云々と云ふのである、勤勞は事業の何たるを問はず、之れ則ち成功の基てある、故に誰れでも勤勞を欲せざるものはあるまい、併し閑あれば遊怠に耽る、之れ人情の常てはあるまいか、遊怠に耽ると云ふも更に害毒を流す程の事もなければ宜しいが、現今は農村に向て、種々の惡魔は侵入しつゝある樣である、殊に從來蠶業の盛なる地方に於て、著しく此現象を見るのである、而して此恐るべき强敵に對しては何等の防禦策を講ぜられて居らな

い、寧ろ之れ大勢の然らしむる所と袖手傍觀の嫌がある、之れ吾人の最も患とする所である、此防禦策に對しても、一々説述し度いが、今は其時を得ないので略するが、夏秋蠶の發達は、確に此防禦策の一たり得べきを信ずるのである、何となれば農家をして其最も閑なる時に當りて之れを爲さしむるが故に、遂に閑なからしむることが出來る、閑なければ又遊惰に耽る期がない、惡魔來るも亦之に接觸するの期がない惡魔は遂に豫定の退却をなさゞるを得ない事になる、斯くすれば農村に向て惡魔の來らんとすることすらなくなるのである、惡魔の來否は農村の健否に大關係を有するので、惡魔の防禦策たり得べき此夏秋蠶の農村に對する利益は之れ物質的にあらざるが故、直接感ずること少からんも、物質的の利益に優る、幾百倍なるや計り知ることが出來ない、夏秋蠶の利益は寧ろ玆にありと云ふべきである。

夏秋蠶部を紹介す

要するに夏秋蠶は農村に於ける副業として最も適當なるを認め、將來益々隆盛に趣かんことを希望するに過ぎない、併し夏秋蠶に關する學理の進歩は甚だ幼稚である、技術も亦從て幼稚と云はねばならぬ、此事に關して御紹介をし度のは、東京蠶業講習所夏秋蠶部であります、此の如く夏秋蠶は幼稚なるが故に、昨年三月を以て東京蠶業講習所は擴張せられて、夏秋蠶に關し研究す可き夏秋蠶部を設け、長野縣松本市に建設せられた、而して直に昨年度より種々夏秋蠶に關する試驗は開始せられたが、其結果は不遠發表せらるゝことゝ思ふ、斯くして年々此種の試驗は發表せらるゝことになり當業者諸君の參考になることは、從來東西兩講習所の蠶業界に貢せしと同一であると思ふ、然るに未だ夏秋蠶部の新設を知らない方も多い様に見受ける、吾人の最も遺憾とせしは某縣當局者すら御承知なかつたことである、此の如きことより想像すれば多數の蠶業家諸君の內御承知ない方のあるは已むを得ない、併し此新設は蠶業界の一大發展である、此發展と然かも、蠶業家諸君と密接の關係ある夏秋蠶部の設立せられし事は、是非御承知を願ひたいと願ふのみならず、養蠶家自身より、連絡を通ぜられん事を希望するのであります、夏秋蠶部は能ふ限り夏秋蠶の爲め盡さんとを期して居のであります

繭質の統一に就て（承前）

學藝委員　八田達也

ナマ噛りで甚だ恐入る

次第だが種の交配に關するメンデリスムの法則に依れば一度交配させたからと云ふて、常に其性質の兩者が其子に傳はるものでなくして、或る一部には兩者が表はれ、或る一部には兩者の內一方のみが表はれて他のものは劣性として表はれぬと聞いて居る。そこで兩者を混合したものを分離し若しくは混合の性質を其儘一種に固むるとは困難であるが、淘汰反復を重ぬるならば、或る時期に於て品種を固定し得べく又、一方劣性となつて表はれなんだものゝみを交配せしむるならば一の品種は固定し得る様にも聞いて居る、果して然りとせば好し玆に數十種又は數百種の異るものが在るとしても、此の中から相似のものを抽出して淘汰するならば、或時代を期して稍完全に近く其品種を固定し得らるゝだらうと思ふ、之に就て選定を行ひ現在の飼育狀態に適合する理想的のものを選出し、反覆淘汰したならば一定の目的に一歩一歩近くてはあるまいか。

現に實行しつゝある教訓

が吾々を欺かぬ、鳥取、島根に於ての實績は既に繭質統一の可否を云ふべき時代でないことを事實に示して居るてはないか、鳥取島根に於る其良好の成績を見て之に倣はんとした府縣もあつて、而も之に及ぶ成績を舉げ得ず、第三に之が實行を試みんとせるものを躊躇せしめたものは種類統一、其者が不成績を表はるせてなくして、交通其他の關係が繭質統一に依つて收利し得らるべき利益を其實行府縣に停めずして他に搬出せられ、爲に其地方に止まるべき成繭が比較的多く他に搬出せられて、其地方製絲家が從來よりも一層他に出張して購繭せねばならぬ弱者の地位に立つた、之れと同時に不健全なる種屋は從來よりも誤魔化しが利かなくなつた、之等が寄貨措くべからずと咆哮して効能がない様に喚きたつて、漸次統一に其足を踏みかけた府縣も、其實行當局者も二の足を踏む狀態になつたので、之等と雖も大日本の上より見れば利益あつて害なき問題ながらも、近さより遠さに及すが順序、殊に自治體に於ては金をかけて其收益を他府縣に持つて行かれる様ではとの目先勘定の爲に、當路者も躊躇に躊躇を重ぬる様になつたが其躊躇は躊躇にあらずして、玆に二三年其聲が潜んだのは沈思の時代であつた、其沈思より醒めて俄然表はれ來つたのは全國統一問題である、之れ即ち渦線を辿り多大なる聲を以て過去の問題が其實行を促し來つたので、世の中の趣味とは即ち之を云ふのであるが。

全國統一問題ダカラと云ふて

千島の端も臺灣迄も同一のものに統一せねばならぬと云ふ主旨ではない、多少氣候や風土の關係も斟酌せねばならぬのは勿論であるが、左ればとて論者が云ふ如くツー四角張つて氣候風土を八釜しく云ふには及ぶまい、兎もすれば昨年は關東以北を凶作に、關以西を豐作せしめたに依て見ても統一の不可能なるを知るべしなど、素人厭しのコヂ付を並べる人もあるが、蠶は他の農作物とは其趣を異にして、氣候が異ふからと云ふても、暑い寒いと鳴くと謂るとの異ひであるが有難いことには火と云ふものがあつて、御隨意に之等は加減し得らるゝ此の節、氣候風土の異るなぞを小嬶の奥歯へ小石を入れた様に八釜しく云はずとも、今時自然の氣候のみで蠶を飼ふ人は稀であるから大丈夫だと思はれる、米やなぞは水が冷いからと云ふて火で暖める譯にも參らず、保護のしてやり様がないから雲の關係で豐凶定まりないのは致し方ないが蠶を之に引きつけて種類統一が不可也、繭質統一が不可能なりなどゝ躊躇なく横に車を挽くなんどは恐入る次第だが、併し

し養蠶者に取つては氣候に遲速の別はあるとしても、寒暖とふことに就ては差違あるとも思はれない。普其裏暖の度合に於る温、湿の關係が甲乙處を異にして同一でないのは明のことであるが、養蠶家の多くは今日では温氣を如何に加減するか位のことは概略知つて居るからして、人爲で略同一の結果に在らしむることは理論上、不可能であるとしても實際には出來得る、併し或る適當の地區を限り其區間を統一するを認めないから之等は深く茲に論及するも愛を認め。

第五假りに原料が統一したとしても

だ疑はしいとの議論も見る。工場が異つて親品が整一するや否や……其業の見る處は、若し其工場が營利を目的とする場であるが我女の思ふが儘に操かせるならばいざ知らず、恐らく營利を度ならば、必ず統一すると答ふるに躊躇せぬ、營利を離れて工外に於て製絲を經營するものは一人もあるまい、然らば其製絲は大多數統一し得らるゝイヤソー隊間許り見ずに、マアノ〳〵あつても見給へさ。

現在の統一せぬ原料でさへもエキストラを挽て居るのでは ない、此の驗て統一した原料がエキストラが挽り得由 は見出せぬ、蛹に工女を督勵し工女を勤勉ならしむる上から も得策ではないか、例へば不統一の原料から中なり十四中 なりの絲を挽けと强るよりも、統一したものて之に依つて 規程の絲を挽けと云ふ方が注文が、無理でなくつて工女自 然勵む樣になる、一寸の蟲にも五分の魂で、人間の寄合は勝手

工場が異り又は同一工場で親品が整一するや否や……其 の見る處は、若し其工場が營利を目的とする場であるが我 女の思ふが儘に操かせるならばいざ知らず、恐らく營利を度 ならば、必ず統一すると答ふるに躊躇せぬ、營利を離れて工 外に於て製絲を經營するものは一人もあるまい、然らば其製 絲は大多數統一し得らるゝイヤソー隊間許り見ずに、マア

の熱を吐くものだ、コンナゴタ〳〵の繭てデニールが揃ふも の、かと云ふ問題は、繭を一ツ宛に第一に工女の胸に浮ぶ夫 れから少しも分配されぬ時に第一に工女の胸に浮ぶ夫 れから少しも厳重に監督するか、小言でも言へば、反撥心 を誘起して其結果は粗暴に流れ、工場主も、工女も損をする と云ふ問題は、二三人工女を集めて絲を挽かしたもの丶霉めた手傷敷 は、十四中を挽き一方は十中の細絲で、若し工場が異つて ヒ 繭で優等が挽けなくつてドースル、必つと優等を挽て見せると 少くとも一等は受合だとか、直ぐに自慢して來る、或る度合 迄工女のヌメボレは必要だ、其處てウント注意し監督するな 繭質の統一に就て

餘りの樂觀主義……に

らば、成品の統一はイト易い話しで、若し工場が異つて ヒ 繭 は十四中を挽き一方は十中の細絲で、若し工場が異つて ヒ 繭 には、其成品を異にする方は十中の細絲でやると云ふ兩者の場合 たならば、原料が混亂紊雜の折の太は太く細は細くなる 繭 ものを得らるゝことは確かである。思ふより產が易いとは 此の邊の消息を歌ふものてあるまいか、斯く云ふならば

鄭く人もあらうが之を樂觀せずに世の中に何をか樂觀すべ きと云ひたい位だ。

第六　繰絲法を改良し機械を改良すると、種類を統一する と何れが先決問題だらう、トの議論も見る。きさ、今の程度の 繭 絲に關する世人學者の智慧の度合では、種類の統一が い 繭 の一番に實行せねばならぬ先決問題になつて居る、今の繰絲 法が悪いの、開闢以來の遺物の踏襲だのと云ふて居るけれど も之を如何に改良すれば宜いのやら、空想は描いて見ても、偖

實際になると工女が絲を添けんても、繭が獨りて解舒してデ ニールの揃ふた絲の挽ける工夫も付かぬ、吾人の希望を遠慮 なく遠べしれば、桑の葉が直ぐに絲になつて呉れゝば宜 いが、世の中が進んでも、其處迄はマダ手が屆かぬ、火星へ 行つた知らぬとと、學士とか博士とか世の中の尊敬を 一身に集めて居る人も、器械の一部分の改良は金及び手傷 ても、今の處繭を煮て舒して枠にからひ順序以外絲法 の改良は施し得られぬ樣だ、伊太利でも佛蘭西でも紡績は別 として、生絲に對する繰絲法は矢張り大同小異の有樣であ る。

パイニー氏の……言は

確かに聞いた、聞いたが百斤に對する絲の工賃が倍も係る と云ふのは、繰絲法其者及繰絲器械其者の罪で、全く 繭質其者の差異から來るではあるまいか、絲長が短かくつ て繊度が不整で、瓢簞や節の多い原料てあるからして、工 賃が倍も要るのだらうと思ふ、器械の不完、不備の點も幾分 其實は負ふだらうけれども、十中の八九は繭質の粗惡に在る ではあるまいか、加ふるに大小不同不統一の原料なればこそ工 費の多大も要するのである。

左ればパイニーの言に聞いても、繭質統一が焦眉の急なる ことは明ではないか、先づ同一の原料に依つて若しも成品が 不完、不備、不統一の原因を探究するに由もないてはあるまいか、 研究し得らるゝが原料が統一して居らぬ以ては、其成 品不統一の原因を探究するに由もないてはあるまいか、

現在の製絲業界を見下したならば、器械も不完であらう、 繰絲法も不備であらうが、易きより難きに進み、近きより 遠きに及ぶの所以で、是より他に及ぼす入るに易くして而も成 ものとする所以で、是より他に及ぼす入るに易くして而も成 功が早いと云ふ。

枠を逆に廻はして見ても、繭を莫ずに枠に掛んて見ても、枠 を外づして順の心棒に絲を掛んて見ても、原料の揃はぬ繭 は、同じ程度の注意では矢張り揃はぬ、人を馬鹿にした議論 の樣だが全く之が眞理であると自分は信じて居る。

反對者も……原料が

統一すれば……エキストラは挽けるものなりとは確信 して居る……何故なれば、反對理由の第七項は原料が雜 服でも現に遠廻して エキストラを挽て居ると云ふて居る 廻して……繭質の差異を陶汰することである。此の大差異なるものを集め大異 なるものを陶汰することである。此の大差異なるものを集め大異 て繭形、節、皺其他相似のものを集めれば、例令多種の種類を集 めたものでも、氣候の異る處のものを集めても、土質の異る 處の桑を食つた蠶の繭でも……エキストラを挽き得ると 云ふことは、自ら確信して居られることは疑いない、外山博 士も、パイニヤ、博士に喫つてかゝる樣だが、若しかはれてある 樣に自分は讀んだ……シテ見れば生物の適應性とか變移 性とか云ふ繭係から異る土質氣候の平地、乙なる處へ甲の地の 種を持つて行けば、變異を來すから甲地に於て得たる知き繭 質のものは得られぬとしても、丸て異つたものになる樣のこ

とはない、例へば北海道の南瓜を九州へ持つて行けば茄子になると云ふのではなく、或は九州の角叉を東北へ移せば小石丸に變ずると云ふのではなく、九州に於て得た角叉の樣なものは得られないから、統一しても駄目だと云ふのだけれども多少量は減れるにしてもだ、角叉は角叉の性質を帶びて居る事に相違ない、統一せぬよりは原料費は決して相違ない、不統一の原料費の額はぬるものでさへも、運輸すればエキストラは獲ると自信して居るが、大部分の性質が等しくなつて原料が統一すれば生絲が獲はぬとはいかに逃げても逃げきれまいではないか。

詮じ來れば……反對者も

全くは國費統一問題には贊成であるのだ、只眞理を把捉し得られぬ樣に言ひ廻して、一寸クスグッテ見たい位いが相場だらうとは思ふ、何故なれば全く反對であるならば自殺する樣な言論はせぬ筈である、只運輸の費用と國費を整理する費用と何れか大なるかと云ふに至つては、兩者其方法を對比するに由ないから其體的に說明し得られぬが、國費が統一すれば、絕體的に運輸を行はぬと云ふ譯には行かぬが、國費一じやからと云ふて、行ふ力に依つてランナに無識極の金か要るとしても忍ばねばなるまい、何故なれば運輸は消極的で、國費統一は積極的であるではないか、のみならず之に依つて國家の利益する處は實に莫大のものである、民の富は即ち國の富である、國費を投じた處で其金は船に乘つて大平洋や印度洋は渡らぬ國內に留つて居るのだ、此の投じた金が直ちに無形のものを有形にする計算に至つては、恐らく何十倍となるに相違ないのでなく、手柄の付かぬ處の誤魔化し的種屋は自然に消滅して、到底取締りの付かぬ處の誤魔化し的種屋は自然に消滅する此の結果として、書通養蠶家の收獲を增するのみならず、國民の品性を陶冶して動勉、自强の向上、自强の向上に至つては、恐らく金錢を以て計算しし能はぬ價値がある、ふ段に至つては、恐らく金錢を以て計算しし能はぬ價値がある

ては無いか、論者よ眞摯に眞面目に其問題に接し來る結果を、沈思默考して賞いたい、此の事に就ては前回其一端を練述したから、重ねて茲に繰返すの愚を敢てせぬが、現在及將來の實業界に向つて、緊要缺くべからざるものは、或は金力は權力なりと、黃金萬能主義を說く人もあらうけれども、實業家の品性が斯かる方面にのみ發達したならば、第二に來るべき吾人幸に國家を知何にするだらう、國家の前途を憂ふる人よ、今柳はんとする金を憂せんとするが、憂國の士か

投じた金の効果を期せん

とするが憂國の士か、吾人は第二に與せんとするものである、若し夫れ投じた金が効果がないのならイザ知らず、國費は統一し得られるへてはないか、國費を統一すれば益々發展せんとする蠶絲業を、抑壓する點は少しもないではないか、島根や鳥取に就て見ても明である、而も其結果として成品は統一し得られ（反對者も認むる處）農家副業の繁榮を來し、間接には國民をして勤勉、向上、自覺の民たらしむる導火となるてはないか。

假りに一歩を讓つて

運輸の費用より國費統一に要する費用大なりとするも、些少の金圓を惜しむして、運輸するとした處が、運輸に依つて得る間接的の利益が何處に見出し得らるゝだらう、徒らに國民性を自惰落に導き、不謹慎、不正の邊に深入するを傍觀するに堪ぶる處がないではないか、敢て茲に吾輩が道義論を振廻さうと云ふのではないけれども、政策に對する直接間接の兩面を見て、眞面目に其可否を示教して賞いたい、余が原々種官營論を唱び國費統一に關する政策に雙手を擧げ滿腔の熱誠を以て賛成するのは、如上の意味効果を認むるからである、或は之に件ふて不正仲買の氣制や、運輸の費買上に於る悪弊も矯正せねばならぬとの議論も見えるが此の國費統一政策を實行せらるゝならば、之等は矯正の爲に一投手一投足の勞を取らざるも自ら矯正し得らるゝてはないか。

何故なれば

蠶種の共同購入ても、共同催青ても、種の共同飼育ても、生繭の共同販賣ても、共同乾繭ても、容易く行はるゝ樣になるではないか從來之等の集合的、經濟的經營に向つては當局者も識者も一方ならず苦心をしたものだ、苦心はしたが、其結果が投じた苦心程に擧らぬのは、種類の雜駁なる戶々男つた蠶種を勝人して各自が其向き／所に依つて經營したから、調、源泉の清を蹂らずし來流の淨を汲んとした結果であるが國費統一問題が實行せらるゝ樣になれば云はずして集意は茲に集つて來るのは、利に向つて走り害に背いて去るのは、蟻の甘に就と異る處はない

此の集合を利用すれば、蠶業以外他に美しい結果も得られること茲になるが、問題は省くとして、國費統一政策の不可なるは其詳說に五るから……以上余は蠶費統一政策の不可なる所以及其効果の概略は盡し

たると信ず、敢て學者實業家に訪ひ、尚不可なる點あらば御示教を仰がんとす、但し余の信念に映じた、國家が將に採らんとしつゝある論議は一政策はドコマ叩いて見ても、善果を結ぶべき農家福音の種であるとより外に思はれぬ

最後に……政府者に

望みがあるゝ、ソハ外ともなく、既に生産調査會は其組織成り、國家産業の前途發展策に就き講究せらるゝ處あらむと蓋し國家廟堂事國民の至福之より大なるはなかるべし、サリナガラ其會議に於る決議は國家が必ずしも取りて以て實施するや否やは疑問なりといへども、其多くは取りて以て施政の項目に加へらるゝなるべし、果して然らば其決議の如何は生産業の興廢存亡に與る處多大なりと云はざるべからず。順を換ゆれば該會の決議は生産業の生命を安配するに足る力を有するなるべし敢て余輩が杞憂を抱かずとも、慣重に慣重を重ねらるゝは勿論なりと雖も、事業者よりも、私義感情が其六七分を占むるの嫌なきに非ず、吾人は生産調査會に列せる委員諸君の人格を信ずと雖、夫れ万人の目を逃れ易く、臭氣紛へども去らざるを常とす、政府者は今期議會に於て國家重要輸出品の根本たる蠶質に關し、一問題を、來議會に提出せんとす、體の熟議を煩すの條件となして、諸員の熟議を願ずるの速かならむことを致に謹而希望を具し他に及ばず請ふ私情ならざるを諒せよ

（完）

波斯の蠶業

農學士　廣瀬次郎

波斯に行はるゝ蠶種

今より二十年前に土耳其の「バグダ」種が輸入せられてから以來、國内に蠶種を製造する者なく、悉く其の輸入に仰ぎ、年々之を同一する有るのであるが、伊太利、佛蘭西及び露國、コーカサス地方よりも蠶卵を輸入すれども極めて僅少である。蠶卵輸入高は毎年二十五六萬箱であつて、其八割は希臘地方で販賣せられ、一萬箱内外はアフガニスタン及び露領トルキスタンに再輸出せらるゝのである、一箱に卵量一オンスと稱するけれども、遙かに不足することがある、此小箱は厠淵諸國の小箱と同じく寒冷紗で張つたものであ、二三百個を更に細孔ある木箱に納めて運送せらるゝのである。波斯の農民は未だ微管子の何物であるかを知らなかつたから、土耳其蠶種製造者は之に乘じて粗製濫造を極め、バラ種であるけれども母蛾檢査を行はないから輸入蠶卵を檢査するに病毒百分の十に及ぶものがある、且つ白蟻及び夜行蟻を混入すること多く

土耳其ブルース地方に於ける原價は一箱僅かに三十二三錢であつて、實に歐洲本場種の十分の一に過ぎない、波斯では蠶卵一箱に十錢の輸入稅を徴收するから、運賃諸費を計算しても五十錢を過ぎないであらう、實際其の賣價は三倍乃至五倍に達する者多し、故に輸入過ぎとなり、遂く到着したるもの三萬箱は空しく投棄せられた、同年に於ても輸入の最好季節即ち一月初旬より二月初旬に到着したるものは二圓以上二圓四十錢に賣却し、莫大の利益を獲したブルース種は概ね黄蠶であつて且つ「バグダ」種に比較すれば蠶形は小さいから土民に喜ばれない、けれども若し波斯に移住して「バグダ」種を以て採種したならば、賃錢頗る低廉であるから、母蛾檢査を行ふとも一箱一卵量は我が半開一枚に同じい、の原價四十錢位であるから、四五年の後には必らず多數の顧客を得て土耳其製の粗悪種を排斥することが出來やう。

波斯に行はるゝ育蠶法

農民の多數は世に寒暖計あるを知らない、僅に海するやうになつて、即ち孵化三四日前より始めて住宅中の一室に蓄又は庇を設して暖を取り、蠶兒の發生促がすものであつて、概ね四月二十日頃に孵化し、泥土と牛糞とを練り合はせて作つた丸盆に載せて飼育する、此盆はカレヅと稱し、闊徑一尺六七寸あつて、燒き締めたものではなく、唯夕日に乾したものであるから湿氣を吸收したときには容易に乾燥せないから、蠶兒の衛生に宜しくない、夜間は之を積み重ね且つ鼠其他害物の侵食を防ぐ爲め布を以て包むから、蠶兒の呼吸を害し、蠶沙の乾燥宜しくない、蠶座の面積は伊佛に比較すれば頗る狭く蠶卵一箱分に對し、一畳中は二十一尺坪の面積即ち十枚のカレヅを用ゐ、二畳に此倍數に擴ず、給桑は一畳に付き一日二回、二畳には三回長大なる短冊形掃桑を與へ、除沙は毎日の前後に行はるのである。

二眠後は蠶兒を桑園内に特設してある蠶室に移すのである之れはチランバルと稱し、蠶室の場り建て小屋であつて、通例六坪乃至上一丈六尺乃至二丈あつて、左右に蠶下ろし地の高きは地上一丈六尺乃至二丈あつて、棟の上五尺の所に床張を渡して之れより上方一尺六寸ずつの所に床板を張り、其全面に蓆を敷いて蠶座となし、給桑は輕業師のやうに床蓆の上に立つて之を行ふみのである、周囲には壁を作らない、屋根より四方に蓆を吊り下げ置くのみである、養蠶期中は風少なく、且微弱であるから、風を防ぐには趣て光分であるけれども、窓は二個に過ぎない、且つ桑枝を以て其の窓口を塞ぐから、換氣が不充分であつて、又扇ゑ蛇、鼠及び種々の害蟲が侵入することがある、九坪のチランバルの建築費は四十圓であつて之れで三箱分の蠶卵を上蔟迄飼育するから、五圓は甚だしい厚利となるのである。

チランバルに移轉した後は枝桑育であるから、人手を要することは甚だ僅少であつて、刈取りたる桑は同一の桑畑内に在るチランバルに然めて其儘給與するから、一人の男子は三箱分を容るゝチランバル二室を擔當し得らるゝ、三齡四齡の給桑は一日二回であるけれども、五齡に至り三回

とするから婦女又は男兒一人の手傳を要するのである、此場合でも給桑時間内に蔟栄の手入れを爲す餘暇がある、チリンバルには貯桑所がないから、雨天の日には雨桑を給與することも多く、蠶兒を病を發生し易い原因を除沙をもやろといふときには、蠶兒を戒めた床板を少しづゝ順次取外して最初其上に敷きたる稻藁と共に堆積したる桑枝の一部分を少しづゝ静かに取出すから蠶兒を脱出せしむるやうなこともなく、蠶兒は黄熟の枝を刈り數日間日乾したものを蠶床の上に多量に載せ、熟蠶を自由に上蔟せしむるのである、けれども熟蠶は其下に堆積せる桑枝又は屋根裏の藁に結繭するものが少なく、飼育日數は二眠まで十五日を費し、以後蠶室内の小屋に移りてより二十七日合計四十二日を以て通例とする。（未完）

關西製絲場と高岡製絲場

主　加藤知正

予輩は三重支會第九回總會に際藤吉池兩印事と共に臨席したる、その序でを以て關西製絲場と高岡製絲場とを參觀したのである。

關西製絲場は藤堂氏の舊城下であつて三重縣第一の繁華地たる津の市内に在るから、中央よりの觀察者は必ず此製絲場を參觀するが、高岡製絲場は津市を距る三里餘の郡部に在るから、津より久居を經て輕便鐵道の便はあれど、久居から高岡迄一里餘の間を腕車にのらねばならぬ不便があるので、立寄る人が稀少であることである。

予輩は先づ第一に關西製絲場へ行つたから、兩者を比較對照して書いたならば隨分面白いことも書けやうと思ひど、殘念乍餘白がなくなりにして、一寸簡單に兩製絲場に就て感じた一節を記るすとせう。

ホク〳〵顔で居るとは不思議

子輩が兩製絲場に就て感じた事とは何んであるか、全國多くの製絲場中には這ヶ兩三年生絲の貿易不振の影響をうけて又も損をした、又も儲からねと小言泣言に日を送り、憐れその經營も六ヶ敷からんなどと、驚き立てる者の多い中に關西製絲場は、毎年儲からぬといふことなく、昨四十二年の如きは株主に配當をたさうである、四面狼煙の聲ある中に、關西製絲場の株主のみが何故に獨り斯くは利益の配當を得てホク〳〵顔で居るであらう、如何にも不思議のやうにも思はるゝが、詮じ來れば何の不思議は更に無い、所謂この經營宜しきを得たに外ならんのである、茲に於てか、予輩は問い立子切りやうで四角、製絲の損益は一にその經營の適力如何によるとと深く感じた。

數萬圓の借財を返して二萬圓の積立

三重縣で伊藤製絲場……といへば、本は愚か歐米に迄その名は響いたものであるが、三重で關西製絲……といつても未だソー廣く世に知られては居らぬ、けれども明治三十六年以後の關西製絲場は慥に全國各製絲場の摸範として大に稱揚するの價値がある。

この一體此製絲場は津市に於ける土地繁榮の一策として有志相謀り夫れ明治二十一年に創立したのである、爾來年々損失のみで利益の利の字は藥にしたくも見られぬ有樣、爲に積つて借財が數萬圓を算するに至り、花咲く春にも木枯しの秋風と徒に吹き荒みてあはや瓦解の外なき悲境に陷つたが、中山武兵衛氏が社長となるに及んで、新に二萬圓の類勢を蓋に一變して、流石に秋風の吹き荒ぶに任せた關西製絲も、春風徐々吹き初めて花咲き鳥笑ふ陽氣となり、忽ち數萬圓の借財を償還した上に二萬圓以上の積立金迄が出來たとは何んと秋心の極みではあるまいか、中山社長の手腕亦敬服の至りである。

三重縣關西製絲場所在地

勤續永年に亘つて他へは轉ぜぬ

關西製絲場は現在五十人の株主を有し、參數は百四十であるが、此中に養成蚕が二十ある、原料は大抵相近の繭であるが、尾張島縣からも幾分仕入る、とのことである、序でに書き添へて置くが中山社長の談に依ると、尾島縣の繭も年々分仕入る、同縣の繭と比較すると雲泥の差とは行くまいが大分の相違があるとのことである、トコロで關西製絲場では是等の原料繭でドシ生絲を製造してをるかといへば、米國向き一本立であつて強伸力のあることは他に多く其比を見ないので普通エキストラ絲よりも三十圓方高く賣るとのことである、而して予輩の最も感心したのは同場の工女は皆家族的の生活を爲し、勤續永きに亘つて敢て他へ轉ずるやの者はないといふ一條である、浮薄工女の多い今日に於て斯かる美風の存在せんとは……

買入繭の品評會

尾關西製絲場がその美を飾るに於て逸することの出來ない事柄がある、夫れはナニか買入繭品評會の事である、勿論此種の品評會は決獨り關西製絲場のみならずやるのであるから殊に大驚を揚げ特筆するほどのことはないと云ふ人があるも知らぬが、併し乍ら中山社長はじめその他の株主等が、如

何に原料繭の改善に努めつゝあるかといふことが之に依て知らるゝと共に、世間失敗する者の多い中に、關西製絲場が着着成功しつゝある所以が能く解し得らるゝと思ふので特に之を記るさずには居られぬ。

ソモ〳〵關西製絲場はこの買入繭品評會なるものをイツ頃から始めたであらう、今を距ること三年前即ち明治四十年から始めたのである、素より買入繭品評會であるから、特に品評會の爲めといつて出品さした品物に就て審査するのではない、關西製絲場が直接養蠶家から買入れた繭に就て、色澤、形狀、緊縮縮皺、乾燥部合、選別精粗、解除、絲量、品位、類節、絲長、纎度、產額等の各項目に分ち審査するのである、その審査の材料に供する繭は買入れた繭の中からドコでも構はず一升丈け拔き取るのであるが、その審査成績に依て夫々等級を附し賞品を與ふるのである、之を以て養蠶家は繭も相當の價格で賣つた上に又思はず受賞の名譽を得ることもあるので夫れを樂みに大に飼育に熱心し繭質の改善に努むるさうてある。

繭質統一問題は今やわが蠶界の大問題となつて而かも未だ之が適當の解決を見ぬのであるが、予輩はこの種の品評會が全國の各製絲家間に行はれたならば、繭質の統一は或程度迄達することが出來やうと思ふのである、關西製絲場の當局者益々之を勵行して以てより以上の摸範を示されんことを敢て切望する。（未完）

農業經濟上より見たる養蠶業奬勵の方針

農學士 櫻田丑雄

農村の繁榮を圖り農民の位置を向上せしめ、農村の趣味を增加せしむるには是非とも農家の收入を增加せしめねばならぬ、農家の收入より大きくするには普通の耕種方法を改良し、土地の利用を集約にし、勞力を節減し副業の發達を圖るに在るとは萬人が等しく之が緊要なるを認めて種々の方向に奬勵して居る次第である、現時猶未だ農民の位置は一般から云へば極めて低位にあることを免れない、或る地方の僻陬では農民は人間並に扱はれて居らぬところがある、是亦勢已むを得ざる次第で如何にも農民自身が自覺しないのと、又自覺するだけの智識と資力を持たないためである、農民の風俗習慣は成る程敦朴質實であるとは云ひ、小作民の如きは其服裝と云ひ擧作と謂ひ如何にも憐むべき見すぼらしき數世紀を後れた狀態である、畢竟資力の乏しき敎育の足らざる結果であつて文明の餘澤は僻陬の地を餘所にして通り過ぎつゝあるを認めねばならぬ、今日猶堂々たる官吏たるものですら斯る點に同情を表して之が救濟の策を講ずるにもあらずして、徒らに一言にして百姓々々として輕蔑の態度を改めないものが往々ある、之實に慨嘆の至りである。

今日農村問題に就て一般の注意を喚起するに至りしは確に時勢の反響である、而も猶以上の如き狀態では農民の前途も遼遠なりと謂はねばならぬ、心あるものゝ痛嘆啻く能はざるところである。

故に苟も農業に關係あるものゝ注意すべきは農家の經濟狀態を良好ならしめ、自然增收を圖るにありだ、又苟も經世的眼識を有する者若は地方に牧民の衝に當る者は一日も農民と云ふこの觀念を失つてはならぬ。

工業も必要だし商業も必要だ、農業は無論故に農業、工業何れも併立して發達せねば到底完全なる富國の途を開くことは出來ぬ、而して之等の事業が隆になつたなら商業も自然隆盛になる、而も國家の基礎を强固にする點よりして農業農民は最も其重きに居るものであることは忘れてはならぬ。

故にどうにかして農民の經濟狀態を良好にし其位置を向上せしめねばならぬ、即ち農家の收入を增加せしめねばならぬ之に對しては種々の方策があるが、併し養蠶業は近頃各地方にて頗る奬勵されて居る、一の副業である、故に農業經濟眼より見たる養蠶業奬勵の方針に付て研究するも强ち無益では無からうかと思はれる。

福島縣三笠郡蠶絲業組合主催府縣生理法講習會紀念撮影

然らば如何なる方針を以て奬勵されつゝあるかと云ふ疑問が起るも無理ではない。

余は公平なる農業者と云ふ側よりして研究して見たいと思ふ、余の述ぶるところは養蠶專門家にとりては或は容れられざるところあるかも知れぬ併し公平なる一般農業經濟の基礎的方針より割出して考究したならば强ち不條理でなからうと思はれる。

夫れ人各々立場あり、故に自己の立場よりして其指導奬勵の任に當るものは偏重の傾きあるは誠に勢の免れざるところである、往々にして自己の職務に忠實なるが爲極言すれば自己の成績を顯著ならしむるの功名心に驅られ、自己の專務以外の事を考へざるが爲に只管に一方にのみ偏することがある是大に愼重なる考慮を要すべき事柄である、今日畜產家は單に畜產の利益を說き園藝家は徒らに園藝のみの利益を說き養蠶家は專ら養蠶のみの利益を主張する傾がある、故に農家は其歸着するところを失ふのである、何れに就くべきか其方針に迷ふのである。

故に如何に專門家と雖も少しく綜合的頭腦を以て其時と場所とによつて如何なる方針を採るべきかを考ふるが必要ではあるまいか。其說く處園藝さへやれば米作は不必要たるかの如く、養蠶さへやれば耕種農業は不必要たるかの如く、又畜產家は全く他を無

視するが如き少くとも然か思はしむるが如き態度がある、故に專門家は自己の主張を爲すと同時に一般農業の基礎を失ひ、若くは過らざるだけの注意を常に拂ふことが肝要ではあるまいか。

斯の如くして極端に奨導勵行したる結果は他日不測の厄介を惹起すことが多い、必ず其反響に惱かされる機會が到來することは明かである。

然らば本問題たる養蠶業は普通耕種農業と如何なる關係を有し、如何なる位置にあるものたるかを先づ考ふる必要がある。管て聞く、或る養蠶專門家は養蠶業は決して副業たるべきものでない、獨立專門の業である、故に專業として經營すべしと云ふことを盛に主張して或る農學校あたりて大に鼓吹したことがあると聞く成程自己の立場より又奨勵の方針よりして一應無理はないやうに聞へるが、併し吾人は之を聞て一般農業者に就て考ふれば實に危險の極みである。

成程一歩讓つて養蠶業自身は獨立の事業たる性質を有すとするも果して一般農家に取つて專業的經營を奨勵したものであろうか、即ち凡ての農家が養蠶を專業として水田畑地も悉く桑園として土地利用の方法まで變へて行ふべきものであらうか、即ち養蠶を專門に行ふが爲に他の耕種農法を廢してまでも行ふべきものであろうか其否なることは問はずして明かである、即ち斯る説をなすものは自己の功名心のために一般農業經濟の基礎を危くするものである。

若し果して論者の如く極端なる奨導勵行の結果全國の農民悉く養蠶專業者となれりと假想せば其結果國家は如何なる現象を惹起すであらうか、水田麥畑悉く桑園に變じたりと假定せんか、是由々しき國家の大問題である、如何に之が危論極説たるかを知るに憚らずである、一般農家は斯る説に惑はされ、自家經濟の根底を危くせざるやうにせねばならぬ。

日本の農業は何うしても耕種本位てなければならぬ、穀物の需要が無極なると、從て土地の利用の永久的なると、勞力の分配上宜しきを得ると比較的粗笨にして純收を多からしめ得ると特殊の技術を要せざること等土地の利用としては米麥作に勝るものはない。

然りと雖も社會の進歩に伴ひ、現時の農家は決して耕種業の收入のみに依賴し若くは滿足することを許さない、故に茲に副業奨勵の必要が生ずる、即ち本業を妨げざる範圍内に於て餘分の勞力時間を利用して餘分の收入を得る途を講ぜねばならぬ、又水田や畑地として利用して收利少き土地は之を他の適當なる果樹桑樹等に利用する方法を立てねばならぬのである、故に養蠶業が或る點に於て專業的性質を有するとするも、一般農家にとつては副業として本業たる耕種を妨げざる範圍内に於て勵行せねばならぬ、然らざれば頗る危險である而して養蠶は年中絶へず行はれるものでなく極めて短期に極めて勞力に集約なることを要するものである、假に春夏秋蠶を續行するも或る時は非常に忙しく或る時は極めて暇であるを免れない、而して特に養蠶は農繁の時期に際會して居るので、養蠶を專業的に營めば耕種業は勢放棄せねばならぬことになる、是前述の如き危險を來すことになるから、一方から云へば普通農家が養蠶を兼業する場合には少壯強健の男子は野に出て耕種の業に從ひ婦女老幼は内にあつて養蠶を行ふが如き組織を採らねばならぬ、是今日農業經濟眼より見たる養蠶奨勵の方針でなければならぬ。

然りと雖も余は如何なる人と雖も決して專業として行ふ可らずとは云はぬ、或特種の人にして特種の地方にあり又特種の位置にある人にして資本其他の經濟上の事情よりして專營するものあるとは決して妨げない、併し普通農家は決して專業者たらしむるとは出來ない、若し果して之が專業たる性質を完備せんには現に業に養蠶株式會社等の如きも起らねばならぬ、今日製絲會社や織物會社はあるけれども、養蠶株式會社のあるを聞かない、實に是養蠶は年中平均せる連續的の勞力資本を供して續行し得ざるが爲である、又天然の事情に支配せらるゝとも少くないから製絲業等に比して危險の度も頗る多い、即ち規模が大なれば大なる程危險の度も多いのである。

管て聞く養蠶を大規模に行ふも蠶種製造を行はざれば利益を舉ぐると困難なりと又以て普通農家をして專業的大規模に營ましむべからざるを知るに足る、現に福島縣地方の有名なる養蠶地方では一村の農家にして借財を有せざるものゝ稀なりと云ふ有様て少くも一人にて二百圓位の借財を有し、農村は頗る疲弊しつゝありと云ふてはないか之實に極端なる奨導勵行の反響たらずんばあらずだ而して養蠶期後は臨時の收入比較的大なる爲金錢を浪費し生活其他のとに贅澤を極むと云ふ。而して一方には借金を餘儀なくされて居る、斯くして知らず識らず投機的氣風を馴致し遂に山師的となり一朝不景氣や天然の事情や管理の事情によつて失敗するとあらんか、祖先傳來の田畑は抵當流れとなつて恢復し難きに至り、遂に地方を去らねばならぬ破目となることが無いとも限らぬ。

思ふて茲に至れば國の西南地方たると東北地方たるとを問はず、養蠶業は一般農家に普及せしむる爲には、何處までも餘れる勞力と時間を利用する所の副業として奨勵せねばならぬ

更に余をして極言せしめば假りに極端なる奨勵の結果養蠶專業者を多く輩出して非常なる隆運に向へりとせんか、茲に一時の好景氣を來すべきも冷靜な經濟上より考ふるときは如何なる結果を生ずべきか、是が爲に前述の如く耕種を粗外するため田地は荒れ米麥の收穫は年を逐ふて減少するや必せりだ、然らば養蠶によつて得たる利益は是を衣食の料に當てねばならぬ、從て產米產麥では是が需用に應ずることが出來ぬ、勢他管より輸入せねばならぬ、即ち折角儲けたる金は矢張り貯蓄どころか管外に流出せしめねばならぬ道理となるてはないか、自家用の食物は出來るだけ自ら生產して餘剰を輸出すべきは農業經濟の根基である、小作人が米を買食する様では乗ても農家の經濟はもてるものではない。

實價の得らるべき蠶業政策

重富三男三

蠶飼ひと碁客程、天狗の多いものは恐らく、他に類があるまい、而して蠶飼は古い土地程而も下手の先生と來ては一ト

入の天狗て、碁打ちの方では御箸にかゝらぬ組即ちザルになる程、鮫馬山が多い、蓋し日本中蠶を飼ふ土地、ザルの住居する處、處として天……狗ならざるは以て斷言して御尾が我家の處迄飛でも來まい、處でザルの方では金持舟に乘らずの大平樂も云ふて居られるが、蠶を飼ふ人の下手で天狗なるに至っては、金持舟に乗らずも極め込んでは居られぬ、左らばと て非客は別として、之を見遁かし聞き流しにして居る譯にも行かぬ。

如何なる政策を……採れば

此の天狗や鮫馬式より、一足飛に明治式又は二十世紀式に改良し得らるゝか疑問であるが、蓋し本會宮城支會で昨年來取りつゝある政策は、實價の直ちに得らるべき政策であると思ふ、蠶業政策と云ふたならば、其方法は決して一二にして其まらざるべきは勿論であるが、其一法として確かに强固なものであらう、何故なれば天狗程改良し悪いものはなく、古くより行ひ來つた地方の人程改良し悪いものはない、蓋に生産法大怪俄の基と云ふが何も紋も生嚙りて、既法してもソンナことは間かぬ昔しに知て居ると云ふ樣な顏をするか、左もなくば三ツ子の時から實際やって居ると云ふ樣な氣合を示して、なか〳〵講話やなどは容易に効果が擧らぬものだ、左らばとてドン底迄知つて居るかと迫窮して見れば、ソンナトはせなくとも、論は取れるとか、諦さんの時代にはどーだったなどと云つて逃げて仕舞ふが例であるが、宮城支會では此の弊風を打破せむが爲に

高等蠶業講習會

の名を以て、此の天狗連を集めた、天狗連を集めたと云ては語弊があるかも知れぬが、有力者を集めた其講習生資格としては

一、蠶業講習會にて習得證書を得たるもの

一、農蠶學校を卒業せるもの

一、町村長を經て郡市長の選拔を經たるもの

其他實地に經營せる經歷や、本會會員たるものたるべきとやなぞは、擧げ來れば多々あるが、以上の三要件は重なるものである、此の内から郡長が選拔して入會の許否を決することに成つて居る、其處で開催地の郡長は此の中から指導の任に適當せしりと認むるものゝ人に入會を許すか否かを撰つて居るから集まるものに、郡會議員あり、小學校長あり、郡視學あり、と云ふ樣な譯で、三十から六十位迄の働き盛り、行ひ盛りと云ふ有力な連中許りである。

是等の人達は實際の經驗には充分富むで居る、中には年々失敗つゞけて稀には上結果を得て自藥にした連中も居るだらうし又豐作つゞけの人もあるら、是等の人に向つて、蠶業上の原理原則と云ふ講習するのが同會の主眼である、講習生の多くは分別盛り、若しくは少し盛りを越した位の連中で、實驗的例へば同じ三年兩隣りへも、極秘密にせねばならぬ樣な苦い〳〵經驗を有して居る人達であるから話すも好くの有る、又其經驗を推察して原則と對照し、原理と比較するからして、ハテ、目藥にした時の豐作は知らなかつたが、アレ

に當て箔つて居るのだなと腹を叩き、アー云ふ原理があるのに横道に入つてばつかり居つたから失敗を續けたのだなと孤憤的御念々からは改良實行しやうと云ふ氣に、話して居る内からなるのである、

一犬其實を吠し萬犬之に倣ふ

一犬虚に吠て萬犬其實をならざるを告ぐるに非ずして、宮城支會の採れる此の政策は、先づ實驗家に進歩せる學理を注入し、之を實地に應用せしめ、以て範を四隣に垂れ、順次近隣を感化せしめ樣と云ふ企畫であるが、確かに當つて居る、吾家も鮫馬式から明治式に一足飛びに改良し得たのだなと云ふのて普通の講話や講習會で、技術上の話しやなどをして、御茶を濁すとは効果の上に於て雲泥の相違があるのみならず名が講習生を誘ひ易くして而も講習生は時間に對するより、より以上の實を得て歸り著々と著るしい實果を奏るから、回を重ぬる毎に講習生は增加して、大規模の設備ある地にあらざれば開催し難ざる盛況を宮城では呈した、今年春季に開催したのは刈田郡の白石町と玉造郡の岩手山町であつたが、前者は百十四名後者は百三十名の多きに達したが、昨年から數へて岩手山は第六回目であるが尙秋季にも基を開設し年々各郡に亙つて實行するとの事である

何故に講習生を得易いか

云ふ迄もなく名實相伴ふからと一方には奏効著しい實績を示しつゝあるからで、赤裸々に昔白すれば講話會では、何遍

其政策も嬉しいが……更に

嬉しいのは寺田宮城支會長が熱心に蠶業を奬勵せらるるからして、其實績が近く此の高等蠶業講習會を通して宮城縣に横溢せんとする氣合が見ゆる一事で、實に斯業界の爲に慶賀すべき事である、あるまい、好し他て場合、蠶業をするとしても、精神誠意上長が事業其者に魂を入れてなければ實果は出ぬ所謂佛造つて魂入れずの例へに漏ぬが、寺田知事は必ず其終了に際み充分に問戒督勵して、後日の保證を無言の内に納む樣に講習會を尊重して居られるから、講習生も自然之に感化を受けて、永遠に不言實行を誓ふことになる、之即ち政策とし

開いて見ると同小異だ（特殊の場合を除ては）とて重鎮は出掛けぬが多く、講習會には此の柔けや眉では柳になり、餘り小供喚いとイヤな處へ無理に喚みを付けて六七分は行つて見たくもあるが、三四分の面はゆいと云ふのがイヤに索嚼して、グズ〳〵になり易い、處が資格がなければ推選せぬ、實驗がなければならぬと云ふ條件が、高等と云ふ文字と相對して手伝ねすはるのである

果して宮城支會が此の推理の基に金割し初めしや否やは與り知らぬけれども人情はツオーしたもので、宮城の蠶業隨分古いものである、古いからとて改良し難いのて、後進の蠶業地では比較的新進の法則に隨つて經營して居るのに、先進地程經營は舊式で改良されて居らぬとは、各地を視察した人の異口同音に唱ふる處で矢張り、宮城縣の當局者も大に意心考慮せられた結果だらうと思はれるが、實に

其政策も嬉しいが……更に

嬉しいのは寺田宮城支會長が熱心に蠶業を奬勵せらるるからして、其實績が近く此の高等蠶業講習會を通して宮城縣に横溢せんとする氣合が見ゆる一事で、實に斯業界の爲に慶賀すべき事である、あるまい、好し他て場合、蠶業をするとしても、精神誠意上長が事業其者に魂を入れてなければ實果は出ぬ所謂佛造つて魂入れずの例へに漏ぬが、寺田知事は必ず其終了に際み充分に問戒督勵して、後日の保證を無言の内に納む樣に講習會を尊重して居られるから、講習生も自然之に感化を受けて、永遠に不言實行を誓ふことになる、之即ち政策とし

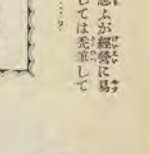
て高等講習會が宮城に成功した所以であると思ふが經費に易くして効果の確實に而も早い蠶業改良政策としては差支して照會の値があると思ふ當時有司夫れ如何……？

宮城縣岩手山町の蠶業開拓者

岩手山町と云へば水豆腐の名産の土地で高野豆腐とりけ豆が被密で味い、既に山形に接する玉造郡の中央で、鬼首と云ふ湯村も此の郡内に在り、間歇泉で有名な温泉もあるから旅行家は御在にだろうが、此の地に蠶飼の初めたのは、今から百九十年許り以前、宮城の國、岩手山城主伊達村忠卿が養蠶の國益であると云ふことを聞されて、蠶種を伊豆地方から取寄せ、家臣に飼しめたのが、抑もの初め、此の頃用ひたのは野生の柔でありつて蠶は二代ないと云ふ樹の皮を用ひ、主義の時は疲り乾燥したりの仕業なれども、今日に於ては、蠶種の改良は、本邦の明に驚くべきなりぬ、しかりの道の開け行く世に八ちまに遊ばれたと云ひするみちより外に歩む道なし」

ナント御解の明に驚くべきないか、其後延享三年に長崎出公の例に倣つて、館中に養蠶、強中に普及を勧めて今日に至つた

其當時悲鳴が口傳に三本つゝ桑を植えしめたのが今は殖火の樹になつて或へては殆ども其昔しか御月樹類であるが、邦直樹の數萬本を購入して本邦の地に植えしめたが、悲鳴に成つたのは松平幸寿の賜物で知事たり、時に藩力奮勵と強力と云ふ位の業勵して、ちち以後の事である、岩手山は慣本期造と云ふ位の熱心と、鋭も奇特の蠶種製造家があり、講習會の講話會の教話や其他蠶飼業に關する公共の事業に盡も外ずに奔走して居る、同家には開國が其ほ行に負へし遺書が家宝として傳つて居る歴史家の參考になるだろう、或は其米沢市に非ざるか……？（ペリ提出品）



調査

印度に於ける養蠶（前篇）

農學士 須田金之助

桑葉の準備

印度に在ては桑葉と蠶種との準備ある限りは一年中何時でも育蠶に從事することが出來る、故に桑葉の準備整はゞ先づ以て掃立つべき蠶種の分量を定め、且つ之に要する凡ての器具類をも整備するのである、桑樹の生産する葉量は、桑樹の大さや年齢に由て一定し難きも熟練せば略認定することが出來る、桑樹を栽植してより四五年經過して始めて育蠶に供するものは半「モーンド」の葉量をも收獲し得ずとのことである、桑の種類に由ても異なるが「ルラター」種は最大なる種類にして十年後には四「モーンド」位の收葉量あるとのことである。

「ベンガル」式即ち列桑に仕立てたる桑園にして僅に九吋位の高さに達したるものとせば一「ビガー」に付き二「モーンド」の桑葉を得るのみである、若し又三尺位の高さに生長したるのであれば、其三倍の收獲を得らるるのである、之が五六尺のである、ベンガルの南方にては氣候に變化ありて來然交々來ることあるも敢て蠶に害を及ぼさず一齊に孵化せしむるのである、然し年に由ては四五月の温度は除り、高く此種の蠶卵は死して全部孵化せざることもある、或は一部分丈孵化することもあり、若し蠶卵を直接に光に曝露するか、或は熱するときは漸次赤色となり完全に孵化しないのである、寒氣の強き場合も同樣孵化するものがない。

歐洲種及び「パラリュー」種を一齊に孵化しむるには室内の温度を昼夜平均に保たなければならない、然らずんば其孵化は長時日に亘るものである、然るに平均温度を保つと云ふことは困難あるから、此南種の蠶卵を孵化せしむる爲めには小袋の内に蠶種を入れて衣服の下に着け、體温に由て孵化せしむると云ふ古風の方法を行ふて居る。

掃立をなす前給桑をなすも「チョータパリュー」及び「ニスタリュー」種の孵化せる際は網を使用せず直接蠶兒の上に細切せる桑葉を散布するのである、而して二三時間の後桑と共に蠶兒を移し蠶箔内にて飼育するのである、猶新に刻切せる桑葉を散布し又夜の九時に更に給桑するのである、此際蠶兒の密集せるものあれば網若くは羽を以て攪ぐる、桑葉は新鮮にして柔軟なるものが宜しい、蠶兒の發生は兩三日に亘るのである、故に湿ぐ後生じたるものは棚の上段に載せて高温を受しめ生長を速進し、長ずるに從ひ多くの出來る寄一に注意して居る、而して給桑は毎日早朝並及晩の九時頃の三回である、恰も吾人の食事の如くである、然し三食と限りた

の高さに達し生長旺盛なるものは二十五乃至三十「モーンド」の收葉を得らるゝと云ふことである。

土地の狀態を十分に行び、十二月と五月とに蒔蒔を行ふ十一月の飼育期には二十「モーンド」の桑葉收穫あり一月の飼育期には九「モーンド」三月の飼育期には十六「モーンド」五月に十「モーンド」七月に二十「モーンド」九月に二十五「モーンド」合計一「ビガー」に付き一ヶ年百「モーンド」の收葉ある割合である。

「ベンガル」式桑園に一「ビガー」若くは壱水仕立の桑樹十五株を有するものならば、三十「モーンド」の桑葉を得らるるものであるから其準備を為すことが必要である、斯くして養蠶は一ヶ年六回位は行はるゝのである。

飼育

前に述べたるが如く蠶種は硫酸銅溶液を以て洗滌し其乾燥するを待て蠶箔の上に并置するのである、歐洲蠶種は、散卵であるけれども「パラリュー」種は「キャラコー」に產付せしめ、其孵化に供するのである、普通ベンガル地方にて產卵せしむるには蠶箔若くは紙に產付せしめ、其儘保存し置くのである、而して「キャラコー」や蠶箔や又は紙に產下せしめた蠶卵は硫酸銅液に浸漬して直に取出し附着せる儘になし置くのである。

蠶卵を保護すべき室は寒温に過ぎざる樣するの必要がある然しながら「チョータパリュー」や「ニスタリュー」や「チーナー」及「グリュー」等の種類は或る程度迄は寒温共に能く堪ふる

る即ちてもない四五回給桑するものもある、稚蠶の際に一日四五回宛給桑せは暖季には掃立後十八日若くは二十日にして結繭す、寒冷なる時候には三十日乃至四十日間も食桑するものあるけれども此際火力を藉りて温むるときは十四五日で結繭するものである、蠶兒に給する桑は生長に伴はなければならない、即ち蠶兒の増大するに從て硬葉を與へるものである若し稚蠶の際に硬葉を與へて大せる時に軟葉を與へふるときには蠶に徒さるゝものと稱して居る。

蠶兒に供給する桑葉は朝若くは夕に摘採し、且つ一日の食料前日に摘採し置く必要がある、桑葉に未だ朝露の存して居る内若くは降雨後の葉を摘採することが宜敷ない、萬一降雨三日に亘りて桑葉を乾燥するの時がないときには止を得ず濕れたる儘に採集して室内に攜帶し風を通し、乾燥せしめて給桑するのである、温潤せる桑や、醗酵せるものや、泥土に塗れたるもの、若くは塵埃の附着せる葉は給與すること宜敷くない。

蠶兒に給する桑葉の分量は前に述べたる如く六十「シーア」の繭を得るに始めより終り迄に三十「モーンド」の桑葉が必要である、此三十「モーンド」の桑葉中二十五「モーンド」は五齡中に要し僅かに五「モーンド」丈が四眠前に蠶兒に給與するのである、即ち五齡中には四眠前に要する全桑量の五倍を消費する計算である、今各齡に就て調査せは一眠前は日々半「シーア」より一「シーア」半を消費し、計五「シーア」を要す

二齡中は一「シーア」四分の三より二「シーア」半の桑葉即ち計十五「シーア」を要す。

三齡中は三「シーア」より八「シーア」計凡そ四十五「シーア」を要す。

四齡中は十「シーア」より二十五「シーア」迄計凡そ百三十五「シーア」を消費す。

五齡中は一「モーンド」半より六「モーンド」に至りて熟蠶現はれ之れより漸次給桑量を減じ一日二「モーンド」以下となる。

斯の如く四齡迄は前齡に要する桑葉量の三倍宛を消費して居るのである、蠶兒も同樣増大して居る、然し五齡丈は前齡合計桑量の五倍を要する、大低本邦の給桑量と變りはない樣である。（未完）

風穴種の飼方 全

伊藤武右衛門著

本書は東信濃郡東野村の風穴種屋として知られたる伊藤氏が風穴書に關する二十餘年間の實驗記錄である内容全二十三章に亘り特に蠶種の貯蔵と秋蠶より説き起し蠶種の貯書に見に得る無味乾燥の事柄を最も平易に最も面白く書いてあるので一度之を手にすれば始より終りまで讀了し去るにあらざれば手放し難ゐる思ひがする惟ふに風穴種の飼育法盛なんとして而かも未だ全く其育法に通曉せざる者多く風穴種の特長を知る者稀さ今日に於て本書の公刊を見たのは方向に迷へる飼海者に新らしき指針を與へたやうなのである嘗て本書の當業者に與ふる物語の大なる力如何程偉なるかを共に當業者の幸を多とするのである

定價貳圓　發行所　東京神田區美土代町三ノ一　明文堂

米國絹業談（前承）

農學士　紫藤章

第四　米國に於ける生絲輸入の狀況及各國輸入生絲の消長

米國に於ける生絲消費力の大なることは前既に述べたる通りである、然るに自國に於ける養蠶製絲業の發達は全然豫期の如くならざりしを以て其原料生絲の全部は今や之を他國に仰かざるを得ざる境遇となつた、故に機業の發展すると同時に輸入生絲の數量も亦た年を追ふて增加し、今より約五十八九年前に在りては僅かに十二萬十「ポンド」の生絲を輸入したるもの今は殆ど其二百倍の生絲を輸入して實に世界に於ける第一位の生絲消費國となつたのである、左に掲ぐる千八百五十年以來毎十年の米國生絲輸入量並に其價額統計表は以て其の輸入量が如何に年々增加しつゝあるかを知るに足るのである。

年次	生絲輸入量	生絲輸入價額	十年間に於ける增加量の割合
一八五〇年	一二〇、〇一〇	四〇一、三八五	
一八六〇年	二九七、八七七	一、三四〇、六七六	一四、八
一八七〇年	五八三、五八九	三、〇一七、九五八	九、一
一八八〇年	一、〇一三、三六	一二、〇一四、六九九	三三、八
一八九〇年	一、八四三、三六〇	一三、二五五、〇九九	一一、八
一八九〇年	一、一二五九、三一〇	四四、五四九、六七二	九、二
一九〇〇年	一、三三三、七五〇	七八、八三〇、五六八	一〇、七

右の如き多數の生絲は何處より輸入せらるゝかと云へば主として日本、伊太利、支那、佛蘭西等より來れるものにして其他より來たるものは殆ど數ふるに足らぬ、今此等諸國より既往十餘年間米國へ輸入せし生絲の數量及價額を見るに左の通りである。

米國輸業談

年次	國別	輸入數量	輸入價額
一九〇九年	數量	九、三六六、〇〇〇	三、〇四〇、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
一九〇八年	數量	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

年次	國別	伊太利	支那	日本	其他諸國	計
一九〇九年	數量	九、三六六、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三、〇四〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
一九〇八年	數量	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
	價額	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

輸入總量に對する日本生絲の割合　四、八

右の表に依りて之を見れば米國生絲の需要は年毎に増加し從て各國生絲の輸入も亦共に増加しつゝあるを見るのである。就中日本生絲の如きは著しく其量を増し、殆んど米國全輸入生絲の五割以上を占むるに至り今や米國の絹業は日本生絲の輸入を仰ぐに非ざれば其業を存續する能はざるの實況を呈せるは頗る快心の事である。而かも其増加せる絹量は我が日本生絲のみ独り非ずして近年伊太利の生絲と和西伊太利の次に漸次其數量を増加し且つ品質優良なるを以て機業者は好んで之を需用し米國の絹業界には極めて必要の位置を保つて居るのである、

右の表に依て見るときは此一箇年間支那生絲輸入の増加は實に著しきものである、是れ主として七里絲、廣東絲、柞蠶絲の輸入増加に就ては大に注目せねばならぬ、想ふに斯の如く廣東絲、柞蠶絲の輸入増加したる所以は織物界の流行の變遷並に銀塊相場の變動等に基因せる樣なるも、即ち米國に於ては繊巧人心を打撃し千九百六年より七年頃に亘る經濟界の恐慌は其影響の大なりし丈け、復の期も亦た永き を要し兎角市場は憶神に執り着かれたるが如く何となく警戒警戒を忘らざる爲め目覺まし自界の活動は數年を經たる昨年迄も見るが如く、又た關稅の改正あり共に何れも經濟界には例年の影響なかりしも、之れが決定を見る迄には一般人心に不安の念を抱かしめたるは掩ふべからざるの事實である、四圍の狀況は兎角貴れ行き宜しからず、一般の嗜好は普通なる中等繊物の需用を喚起し、隨つて其の之れに使用する絹糸の如き可成割の安き普通の生絲又は棉絲を用ゆる事大に流行し、又た一方には前年來大流行を來したるブリボン」の貴れ行き大に衰へたるが爲め、其絲の需用亦た大に衰へたのである、故に例へば日本生絲の大部分を占むる信洲物始め上州産絲又は關西物等の綿絲用の種類には大打撃を及ぼしたる樣である、之に反して廣東絲の如き七里絲の如き價の廉なる生絲の需要大に起りて其輸入は

らゐ、然るに近年米國絹業の發展と共に其原料生絲の需要は益々増加し、殊に廣東絲の需要は其價の廉なるを以て、米國の絹業者は日本生絲以外に適當の供給を得んとの念慮甚だ切に殊に支那絲に比すれば勿論劣等であるが價格が如何に低廉なるかを以て、上海蒸汽器械絲並に七里絲も同じく輸入せらるゝの漸次増加したのである、元來支那絲は其六七割は歐洲に輸入したるものなるが、近來米國への輸入割合は年を追ふて増加する樣であるが、又た上海及廣東絲の外近來支那より米國へ輸入する柞蠶絲の數量も亦た著しく増加したのである、左に掲ぐる米國への輸入せる支那絲の數量及び價額絲類計表は以て其大勢を知るに足るのである。

年次	種類	廣東絲	上海絲	柞蠶絲
千九百九年	數量	一、八一二、八七五	二、〇四四、九二一	一、八九一、〇六二
千九百九年	價額	五三七五、七二二	七三三六、六五六	三二〇、八五〇二
千九百一〇年	數量	一、三八〇、八九二	一、三七〇、八五一	一、三九一、六五四
千九百一〇年	價額	四、一二八	二、一五	五、〇六三、一九二
千九百一一年	數量	九二四、八九五	一、六七四、二六一	二四三〇、七二四
千九百一一年	價額	三、三七四、五三〇	七、一〇八、五一一	七八八、八八九
千九百一二年	數量	九八八、八六七	一、二七六、五〇三	一、四七一、三六四
千九百一二年	價額	二、九七九、二七五	四、六九〇、五六五	五九九、五八五
千九百一三年	數量	九〇一、九六三	一、六四八、一二五	一、四六〇、七八九
千九百一三年	價額	二、五四六、四五九	五七一、五、九四五	五九九、五八五
千九百一四年	數量	一、一二九七、八二五	一、九四二、四八六	八二四、七一〇
千九百一四年	價額	三、三五七、二三三	六、五三二、五〇六	五四九、〇五〇

敵して米國市場に於て傷るべからざる勢力を有し居る、又佛蘭西生絲は其輸入量多からざるを以て敢て市場に勢力があると云ふことは出來ないが、品質良なるを以て有名である。往年日本生絲の未だ米國へ多く輸入せられざる際には支那生絲の米國に於ける勢力は頗る強大なるものであつた、即ち千八百七十五年頃は日本生絲の米國に輸入せられたるは僅に百俵内外なりしも其後日本生絲の輸入は著しく増加して千八百七十乃至一萬俵を輸入して今日は其位置全く顚倒するに至つた、是れ畢竟支那生絲の改良並に増殖は着々として行はれ彼地需用者の嗜好に投じたるに因ると言はねばな

著しく増加し、予の視察したる工場にては何れも廣東絲又は昨蠶絲（勿論日本生絲は毎に其逸作を古めたれども）物の盛んなる爲め、其の經絲としては伊太利、佛蘭西、若くは上海器械上等物の如きは其價餘りに高過ぎる故に日本に於ける關西上一番格以上のものの用せらるゝの傾向を來たし、其結果として、「エキストラ」物の需要を大に喚起するに至つた、併しながら一方に減ずれば又た一方に增すといふ事は自然の道理にして彼の信州其他の絲物は昨年は米國への輸出割合に減少して歐洲への輸出は例年よりも增加して居る、是と反して近來日本生絲の歐米に輸出する割合は米國へ六分七厘、歐洲へ三分以上の輸出なりしが昨年は米國へ六分八厘、歐洲へ三分二厘と云ふが如き割合を示して居るのである。（未完）

予は何を製絲家に謀らんとするか

特別會員
宮城縣技師　丹羽敬太郎

わが製絲界の元老男爵太郎氏には常月蠶業技術官會議に臨席すべく上京せられたが現時の本邦製絲界に對し如何なる考へを有せらるゝか聞かばやと思ひ機會の来たるを深かつた時に奪下西ヶ原なる氏の邸を訪ふた此時既に來着の客も有つたが九時頃には人に禮はれたなりの物腰もあること故其之を禮ちやが途すがら聞すことにしやうとて氏の宅より田端迄の間に編者に語られたのが即ち本編である

一昨年來本邦製絲家の受けた打撃は非常なもので倒れかけて居る製絲家も尠くないやうであるが何此儘でズーと繼續して行つたならば如何なる惨狀を顯はすであらうか、考へてみれば寒心に堪へぬことです、此際之に對する善後の策を講ずるのは政府當局者の責任たるは勿論若くは（斯業奬勵の任に當る者の雙肩に掛る大責任であらうと思ひます）の任に當る者の責任であらうと思ひます、此際之に對する善後の策を講ずる者の雙肩に掛る大責任であらうと思ひます、此際之に對する善後の策に就ては熱心苦慮頭の休む暇はない位ですが、サテ

何を製絲家に警告すべきか

の御質問に對しては御話しいたしたいことも澤山ありますが先づ第一に新繭の生るゝ頃には絲相場が今より必らず高くなるから夫れをよく御注意なさいと警告したいのであります申すまでもなく製絲經濟に大關係を有するのは原料繭であるから、何れの製絲家も高い原料は仕入れまいと思つてをるけれども、兎角其時の生絲相場に進られて、思はず高いものを仕入るゝのです、本年も只今の相場は上一番八百二三十圓といふ安直であるけれども、新繭の出る頃には之よりズツと高くなるに相違ない、此高くなるのが動すべからざる基礎の上に頭は相場なら心配することもないが、大抵は有力なる商人の商略に基くのであるから、十月頃の絲の出盛りになると必ず下落する、否下落さするのであります、ですから九百圓以上の相場を當てにして四十五掛や五十掛以上の原料を仕入れてはならない、仕入れたならば生絲を引渡す頃には相場の下落と共に安く賣り放たねばならぬ結果として非常の損失をせねばならぬことになります、之は今日見る例であります、兎角製絲家が其時々の相場に吊られて失敗し易いのであるから幾重にも御注意を願ひたい。果して然らば

何故に絲價は安いか

といふのですが、左樣、絲價の低廉に就ては種々の聽取を聞くことですが、銀地相場の關係もあるでせう、歐米經濟界悲境の影響も關係して居るでせう、其他いろ〳〵あるに違ひないが、併し大概の人が相手方の狀態のみを觀察して彼此批評もし判斷も下してゐますけれど、我手許はドーかと顧みる人が尠い、之では到底勝算は覺束ないことであります、夫れは兎に角として我絲價の振はないのには、先きにいつた外部に於ける關係以外に看過すべからざる重大の原因があらうと思ひます、夫れは何であるかといへば我絲價の廻るくなつたといふことであります、今から三十年以前に於て富岡製絲所あたりで拵いた生絲は頗る立派のもので、彼の有名なる佛國セゲエンヌ絲と同等の價格を保ち、伊國の美麗絲などよりは百圓も高く賣れたものであります、夫れが今日ではドーですかセゲエンヌ絲はさていといつて義陽絲にすら及ばんでもないか、伊國の絲は質は昔も今も變りはないから米國後の機業家は喜んで之を迎へ、高い値ひを拵ひを拵ひを拵ふて居るにも拘らず、日本の生絲には始終苦情が絶えずして其價格は以前のやうな譯にゆかないのです、故に日本の蠶絲業が進歩したなどいひましても、絲質の點からいひますと却て退歩の感があります、一體その

絲質の退歩といふのは何が原因であらう

事務場議會に臨席の爲上京した際御話し申上げた如く、桑葉は上貫目に一圓、繭は一石一九十多繰、四十圓、生絲は百斤九百圓で、我桑家も養蠶家も製絲家も決して割前後で仕入るゝはないから、絲價の高低に頓着せず一石四十圓前後で仕入るゝ樣に算盤を持たれたならば誤りはなからうと考へます、先年御話し申した時分の絲價は上一番百斤千四百圓などといふ実際の相場を顧はしてをつたから、九百圓前後の相場が適當だなどゝいふ事であるかと思つた人もあつたでせうが、不幾して千四百圓の相場は永く持續せずして其後間もなく急轉直下の狀態となり今日では上一九百圓の相場すら保ち得ぬ有樣であります、故に當時私の意見に就て異樣の感じを持たれた人は今日となつては思ひ半に過ぎるであらうと思つてをりますが、併し一體水の潮國は價格の低廉なる生絲をドシ〳〵輸出して以て我生絲貿易の勁敵となつてをることですから、算盤の持てる限りは絲價の高きを希はぬがよろしくありません

手は純今製絲業に譬らんとするか

この原因は決して單純ではありませぬが、大體に於て二つあると思ひます、其一つは繭賞の惡くなつた事です、今から三十年前の繭と今日の繭とを比較してみますると、絲量といひ、絲長といひ、又伸度といひ大變な相違であります、彼の丹治梅吉氏や菅野平右衛門氏等が盛んにやつて居らるゝ頃には、ナカ〳〵涙の繭が出來たものだ、明治十二年に始めて横濱に於て共進會が開かれましたが、當時出品の繭は何れも夫れ百回以上の絲長を示し、一升の絲量は十五六匁あつたものです、御承知の如く川俣で出來る平絹は一本丈で織ります、中途からフツリと切れても赤熱種の生絲ならば之を織合さずに兩方から引き延ばして結べば別に纖絲を用ふるの必要はなかつたのです、以前の生絲はこれほど丈夫に伸力があつたけれども、今日では到底斯かる伸度を有する生絲は無くなつた、絲長は漸く九百回、絲量は漸く九匁が、十匁といふ有様であるから、斯かる原料を用ひて良い絲を製造しやうといふのは夫こそ木に縁つて魚を求むる類とせう、何故に如此品質が悪くなつたかといへば一つは種類の撰擇を誤り、一つは桑園に充分に手入れをせない、今一つは可成粗い給桑量で繭を結ばせやうとする、是等が重大の原因となつてをる様に考へますが兎に角斯ういふ不良の原料では如何に繰絲技術が勝れて居ても滿足の生絲の出來やう筈はないのに技術の勝れた工女が拙上に生絲はドンナにしても出來るといふ考へで絲を粗末に扱ふやうに成つたのが又絲賞の悪くなつた一つの原因であります、昔て上一番千四百圓などといふ突飛な相場を示した事もあつたので、絲とさへあれば賞れるから絲量さへ餘計に出せば品質などはドーでも良いといふ考へを起して所謂粗製濫造を遂つたからたまらない、盛んに賞れた時分はそれでも良かつたが夫れはホンの一時の夢で之が爲にスッカリ日本生絲の信用を害して仕舞いました、其結果伊佛絲は依然として昔日の價格を保つてをるにも拘らず本邦生絲の相場は急轉直下今日の狀態となつたやうな始末であります、てこの横なとては伊佛絲とも競爭は出來ますまい、生絲の品質を良くして安く賣るといふことが敵と戰ふ唯一の秘訣であるとすれば午選繰女那絲とも競抗も出來まい、生絲の相場は急轉直下今日の狀態となつたやうな始末であります、てこの横なとては伊佛絲とも競爭は出來ますまい、生絲の品質を良くして安く賣るといふことが敵と戰ふ唯一の秘訣であるとすれば午選繰女那絲とも競抗も出來まい、生絲の相場は急轉直下今日の狀態となつたやうな始末であります、てこの横なとては伊佛絲とも競爭は出來ますまい、生絲の品質を良くして安く賣るといふことが敵と戰ふ唯一の秘訣であるとすれば午選繰女那絲とも競抗も出來まい、生絲の

宮城縣蠶業試驗場　福島縣蠶業試驗場　石巻蠶業試驗場　福島縣蠶業試驗場　天所蠶業試驗場　郡山蠶業試驗場　福島縣蠶業試驗場　郡山蠶業試驗場

本邦製絲界の現狀を救濟するの一策

工女の貯蓄保險

てあります、混沌たる我蠶業界のことなれば大に改良すべきことは一にして足らずであるけれども、イカぬと思ふことは片端から此際徹然之を改めて更に善良の方法に向つて勇進せられんことを希望するが、併し何よりも第一着に遭つて貰ひたきは工女の貯蓄保險です、我邦には現在二十五萬餘の製絲工女があるけれども、是等の工女をして意を安んじて其業に從事しむるやうな方法は一つも講ぜられてないでせう、如何に國家的事業だからといつても不安の下に仕事をせよといふのは無理な注文である、彼等をして心持ち良く働かしむるには夫れ相當の方法を講じて遣らねばイケない、所謂勞働者保護の道を開いて遣るのは工場主の義務であり、又國家の責任であります、故に伊太利邊では此勞働者保護の一法として貯蓄保險の方法が設けられてあります、其方法は男女工共に十二歳から六十二歳迄の五十ヶ年間一ヶ年に二十フランづゝの貯蓄を爲さしむるのですが、其内四フランは政府が是を補給し八フランは工場主より是を出し、八フランは職工の負擔として中央勉働銀行に預けてあります、若も工男工女が不幸にして中途で不具癈疾となるか、若しくば六十五歳以上になつた場合には一日七十五サンチーヌ即ち三十錢づゝを養育料として死ぬる迄與へ、又或業中不幸にして死んだ場合は其貯蓄した金をソックリ遺族に與ふるやうにしてあります、而して彼等は安心して製絲業に從事することが出來るのです、故に我邦に於ても此方法に習ひ女工は十五歳より二十五歳迄で男工は十五歳より三十歳迄で工場主と職工とが貳圓づゝ政府が壹圓づゝの補助をなし都合一ヶ年に五圓の貯蓄の出來るやうにして遣つて女工は十ヶ年男工は十五ヶ年勤續したものに與ふるやうなことにし、若し中途で自分勝手に他の工場に轉ずるやうなことのあつた際には其貯蓄金を沒收して他の工女に分配して遣るやうにしたならば自然他へ轉ずる者もなくなつて、工女爭奪の弊も改むる事が出來、從て嚴重の監督をし得て技術の練熟を期待すべく、ソーして彼等も亦安心して此業に熱心誠意從事することが出來るから良い絲を挽けることになるのであります、故に私は是非此方法の實徹に努めたいと考へて既に其筋の當局者に向つても此意見を述べて置いたことがあります、尚此他絲賞の改良に就ては御話ししたいこともありますが、時間がありませんから何れ他日を期して御話することにいたしませう。

本邦製絲界の悲境を救濟するの一策

特選會員
三重縣技師　安東潜

本邦製絲界の老練第三重縣技師安東潜氏が老て益壯熱心の齢に達されし人の大に多き事る處である宗本誌に繭商業者に於て開かれた各府縣蠶業主任等會議に臨とられたる際編者が聞き得た講話の一部であり時期柳沒者講ふ所目しそなられる譯めて……

國家的重要問題

今日悲境に沈みつゝある我製絲界を如何にして救濟すべきかは實に國家的重要の問題であります、勿論事に盛衰消長のあるのは當然のことて、今日の悲境必ずしも永遠の悲境といふ譯でもなく、回復の時期も亦絶對にないとは限らぬ、吾々の觀察を以てすれば早晩我生絲市場は一陽來復の春に向ふてあらうと信ずるから、徒に悲觀して事業の經營に惰氣を生ずるが如きは吾人の到底賛成し得ざるところであります、乍併竿頭一歩を進めて熟考すれば我製絲界が今日の悲境に陷りたるは決して單純の原因ではないから、若しも之を此儘に放任して置いたならば或は夫れ一時の疾病が永遠に治すべからざるの重患となりはせぬか、不幸此不吉の言が果して事實となりたらんには我國家經濟を如何にすべきか、世界一等國の伍班に列したる帝國の將來を如何にすべきか、コヽだ吾々が本邦製絲界の現狀を目して國家的重要の問題であると絶叫しつゝあるのは…………

何故に良い生絲が出來ぬか

一體我製絲界はドーして如此き悲境に陷つたであらう、多くの人は絲價の下落即ち之が最大原因なりと答ふるであらうが、吾人も亦大に然りといふのである、然れども其絲價下落の原因に就ては明確に答ふるものはないのである、吾々の意見を以てすれば、其原因は澤山あるが其内の重なる原因はといへば絲質の退歩即ち是であるといふのである、何故に絲質は惡くなつたであらうか、何人も繭質の惡くなつたのが、最大原因であるといふのであるが、吾々も之に對して異論はない、異論はないが吾々は少し見解を異にするのである、抑も日本生絲の批難の聲が漸く高くなつたのは種々の原因より起つたものである、獨り其繭のみに罪を負はしめんとするは大間違ではあるまいか、吾々は繭の辯護をするではないが、繭に若し口あらば必ず法廷に訴ふるであらう、支那產多化性の輸入以來特に蠶種の掛合が流行して自然日本固有の性質が乏しくなつた傾きが無ではないが、養蠶飼育法の如きは僅に進歩してをるではないか、或る地方の如きは既に繭質統一の實行をさへ見たが、さて此地方の生絲はと見れば矢張種々の批難を免がれない、之等は大に研究すべき問題であらう兎に角日本製絲家の現狀は全く生絲製造技術の上に大變化を來してをるのは爭はれぬ事實である。

近年各工業が勃興して職工賃金の向上物價の騰貴科税の增加等蠶業に一層の困難を感じたが爲に、益々生產費を減ずる事ばかりを主眼とするやうに殆ど其極端まで進歩したてはないか、關西地方の優等絲目的の工場でも昔日工女一日の工程六七十匁のものが三口取り四口取りとなり、漸く進んで一日百二十匁乃至百五十匁を繰るやうになつた、之は一面如何にも進歩の姿であるけれども絲の內容は年一年粗雜に流れ退歩の狀を示し宛から傾斜線の形を見るやうてある、競爭の時勢とはいひ、寒暑を問はず十五時間も夜業朝業工女は苦業の間に月日を送るといふ實に他の工業に比較して一種特別の社界であるから、工女に教育を施すべき遑はないが、併し吾々は工女に精神的教育の缺乏をしてをるのが絲質を惡るくする根本的の原因であらうと認むるのであります。

工女が繰絲の業に從ふのは軍人が戰場に臨むと同じことで器械の精良や體格の立派なので以て必ず勝てる者ならば露西亞の軍隊は決して我軍隊に負けはせなかつたのです、夫れが一敗地に塗れて悔を世界に遺らすに至つたのは精神の入れどころが全く我軍隊と違つてをつたからであります、之と同じやうに立派な器械や優良の原繭で良い生絲が必ず出來るものならば完全なる鐵製器械や優美の繭を持つた者は皆良い生絲を製造するであらうが、我製絲界の實況を觀まするに事實は全く之と反對の者も尠くないのです、されば其歸するところは全く工女の技術と精神に依ることであるが如何に技術が優秀でも精神の至らぬ工女は到底良い生絲を挽き得ぬのである否却て內容不正の絲を繰るのである、一日の工程唯是多からんことを期するから外觀は如何に美しくあつても纖度の不揃抱合不良ふしむらほそむら或は撚り喰はずなどは到底免れない、强力や伸度などがイケなくなる位のことは云ふ迄もないことてあります。

トコロで我全國二十五萬の製絲工女に對し精神的教育を行つて居る製絲工場はドノ位あるでせうか、吾人は此點に於て只遺憾といふの外はないのです、御覽なさい實際小數の製絲家を除くの外は皆之を捨てゝ顧みない、故に工女の頭には國益であるとか、主人の爲であるとかといふ高尙な考へは少しもない、只主人に小言さへ言はれねば宜しい、三十錢なり、四十錢なり、賃銀さへ貰ふことが出來れば結構であるといふ低い考へて其多くは器械的に指頭を動かすに過ぎないのであるから、良い絲の出來ないのも怪しむことはないのです。

大に精神的教育を施せ

近年繭質の概して惡くなつたのは爭ふとの出來ない事實であるが、併し其惡るいといふ繭でも綾部の郡是製絲や室山の伊藤製絲場では立派の生絲を製造して居るではないか、其他工場管理と組織の完全なる工場に在りては依然として纖度も均一伸度も豐富なる絲を生產して居るではないか、繭質の惡るくなつた爲に良い絲が出來ぬものなら如何なる製絲場でも一般に出來ない筈ですが、夫れが繭が惡るくなつた／＼といふ中に良い絲を製造する所があつてみると、夫れには何か仔細がなければならぬと考へます、其仔細といふのは外でもない、精神的教育即ち是れてある、彼の郡是製絲は基督教の感化力、伊藤製絲場では佛教の感化力を以て共に工女に臨み、與ふるに家族的待遇を以てし、接するに愛の一字を以てするから工女は家族の子弟同樣に和親しみ、一節の絲も粗末にせず、一尺の間も過ちなからんことを祈りて精神的に働くから優良の生絲が出來るのであります、一體佛、耶の兩教は世界の大宗教で何れも人を感化する上に於て偉大なる力を有し、一度之を信仰するに於ては其精神が動かすことの出來ない堅固なものとなり、隨て其行ひが淸らかになるのでありますから、信仰も何もない者とは素より同一に論することとは出來ませぬ、故に吾々は精神的教育に宗教々育を以てすることも大に宜しからうと思つて居りますが、併し宗教の力に據らざるも精神的教育の出來ぬこともないて、其土地土地の事情に依りて何れの方法なりとも構はぬから是非共、精神的教育を施

されたい、彼の富岡製絲所は官營の時代には各藩の士族から工女を募集したものですが、まつた者は何れも家庭の教育のある者であつたから品行方正なることは勿論精神的に働く働いたで其生絲は歐州の優等絲に比較して決して遜色の立派のものが出來たのです、近年は繰糸工女の不足から如何なるものでも工女となり而かも一般製絲家の間には勞働誘拐の悪弊が行はるゝので多くの工女が其面目を缺き浮浪勞働者のやうな者も段々多くなつて來ました、夫れでも女子のことであるから工場主が多少なりとも精神的教育をするやうであれば是等の悪弊は自然除去せらるゝのであります、前に也述べた通り之を行ふ工場が誠に尠い之では工女の品行が正しくならう筈もなく隨て精神的に繰絲するやうな者も尠ないのであります、されば日本生絲の悪評を蒙むるのは固り編子の罪ではない此に捨ておいたならば今後生絲が六百間臺迄も下落せねとも限らぬから、倒れぬ先きに警戒を加ふるやうに

戊申詔書の御趣意

を宜しく工女に普及せしむ可してあります、畏くも彼の御詔書に宜しく上下心を一に協し、忠實業に服し勤儉産を治め信に惟義とあります、此の御趣意に基き工場を經營する以上は決して不正不良の徒出來る筈はない、私の驛では先ず伊賀の東海道に平田内務大臣が御立寄になつて、業務を御覧被遊の際へになり、戊申詔書の勝本を殿と御下附になりました工場に限り勝本を御下附せらるることになりましたので、此御下附の光榮を負ふ工場では嚴なる本戒式を擧げ、縣東郡長村等列席の上工女工男を打集めて懇々御趣意のあるところを傳へて(をります)、爾來之等の工場は打て變り工女の風紀も直り月々貯金も澤山出來ると云ふやうに著しく美風に傾いてをります、勤儉の及ぶところ實に難有い譯であります、製絲工女は國家の貴めに盡すべき本分であると云ふことを何處迄も鼓吹して益精神的教育の大切なることを天下に普及したいものです。

如何に考へても工女の精神的教育を等閑にして工場主の利益ではないから、現今悪境に沈むる製絲界救濟の一策として大に其聲を大にしたいと思ふのですが、之に就きまして近頃刊行の工女訓の如きは、大に歓迎すべきもので是非之を一般工女に讀ませたいと思ふのであります。

有限責任販賣組合
松代製絲改良組長
大里忠一郎

有限責任販賣組合 松代製絲改良組（承前）

東裝と販賣

わが改良組では組合員から委托をうけました生絲に就て十二分の檢査を施し、其品位の同じ位の繊度の同じ生絲は一つに纏めて東裝を行ひ、一定の商標を附けて販賣致します、現品を見ないで商標に依りて取引を行ふことが出來るのであります、のみならず此合同東裝の利益は

（一）一綱々販賣の時に比べて東裝加工の勞力を省き得ること

（二）信用に堅して好賣を奔せらるゝ忠告ること

（三）商標の習は一綱毎に数以下の端数を切捨て合同東裝の結果結束糸の量を合せて一棚に對し凡百匁内外の絲量を増加するを得べし。

斯ういふ利益があるのです。

尤も此第三の一棚に對して百匁内外の増加絲量は、組合の收益と致しますけれども、剩餘金の一部は各自の賞上配當の金額に應じて特別配當をすることに致してをります。

此製絲の束裝及販賣上種別の變遷はいろ〳〵ありましたが、この組合創立に就て當局者の最も心配したのは販賣の方法であります、といふのは當時松本地方に於ける製絲の産額は一ケ年凡そ五十棚か百棚位に過ぎない、而かも其種別は區々に別れて一定してをらんのです、ソーして組合員多數は中產以下の者であるから、資金の回收を急いで濱賣にしたところで、和當の價格で賣上げて資金の運轉を圓滑にすることは到底困難の業たるを免れない、ソーかといつて內地用となして成行賣をしてみても絲價の劇變に遭ふて販賣の時機を誤つたりには不測の損耗を被らねばならぬといふやうなことで輪出向にしても、內地向にしても、何れも一得一失わが組合の狀況に適合せざる結果、內地用の製絲糸を行ひ之が販賣は新たに期日を定めて競爭入札を決定販賣することに協議を整ひ、當局者は勿論各組合員は其取引先の機業家や仲買商などに入札するやうな場合もないでもないが、段々入札する者の數も増して信用の程度も増し、今では競賣毎に信用も薄く販賣に窮するやうな場合もなくなつた、仲買商は勿論機業家又は仲買商の他の各機業地から、直接電報や書信で入札する者もあり、或は仲買商の手を經て入札する者などがありまして、其數は毎回二十通を降つたことはありませぬ、ですから價格の如きも往々豫定額を超過して演出場よりも高價に賣れることがあります、尤も相場の最も低落した時期に販賣するやうなこともあります、五日若くは十日毎に入札を繼續執行しますから相場は常に平均を保つて、危險に遭遇する心配がない、隨て組合員は販賣上少しも頭を痛むることに及ばんのでいこともあります、

宮城縣蚕業試驗場事務所像　右角所員出田張所

す、而かも旬日の間に賣上金の配當をしますから資金の運轉に何等の支障も認めず、且つ各自が販賣するよりも一棚に對して五十圓乃至百圓の高値に賣却すること出來るのであり、合員は何れも滿足してをります、要するに此方法は内地向の產絲製絲販賣法としては極めて適當であるから近來縣下各地に採用せらるゝやうになりました。

揚返……檢査……賣上金の配當

組合員が其製絲の揚返販賣を委托するか方法でありまして、夫れは一籠の絲量凡そ二十匁を繰つたものを四棚に一籠とし、之に順次番號を附けて、一定の樣式に準じて調製しある製絲番號札及通帳を添へて組合に差出します、ソコで組合では之が委托をうけますと直に製絲受付帳に委托組合員の氏名製絲の番號其他必要なる事項を記載し、通帳に受付日付の契印を捺して籠番號札を添へて委托者に渡しておきますから、組合員とか製絲工女が揚返の請んだ空籠を受け取らうといふときには此籠番號札を差出して請求せねばならぬのであります。

揚返　ソコで組合では小籠を預りますと受付の順序に依て工女に夫々揚返を致させますが、揚返は一籠の中間及終りに於て首尾を見易きやう口留を施し二綹に分ちて各相割して二ヶ所上網のカ絲を施します、ソコで組合では揚返を乾燥したときには、其大籠を乾燥室に入れて正量に達する迄乾燥することに致しておきますが、揚返工女は之等加工の責任を負ひにする爲に製絲の番號札に自己の認印を押捺せしめ、尙其執務に對しては左の賞罰を設けてあります。

賞金或拾錢　十五日間罰の各項に該當することなきもの
罰金或拾錢　絲札の取違
金拾錢　蛹札の取違
金參錢　繭節の長さ一の二本揃
金貳錢　棒揃
金壹錢　口止の不完全
金壹錢　繭絲の不完全
金貳錢乃至金參錢　繭絲傷數　但し事情に依り損害かゝり慣せしむることあり

檢査　製絲の品位檢査は乾燥を施したる大籠に於て之を行ひ、色澤の良否絲質の精粗節の多少等に據り左の等級に區別いたします。

生絲の部

等外一等	等外二等	等外三等	等外四等
玉絲の部			
等外一等	等外二等	等外三等	等外四等
一等	二等	三等	返品
一等	二等	三等	返品
一等	二等	三等	返品

（此返品とは品位の檢査の上總の淺等に達するの製製として組合の受領に關するもの組合員に返却する品いふのです）

繊度試驗は製絲一揚に就て檢尺器で二百廻ぐゝ二本を適宜の場所から採つて乾燥し、檢位衡を以て査定いたします、此査定に供したる二百廻の絲は組合の收益となります、ソコで計算等級は品位等級とテニール繊度試驗とを綜合して結果とを合せて定めますが、絲量の査定は各組合員から委托をうけたる製絲各號に貼き之を衡量いたします、併し一夛未滿の端數は表示いたしません、而して之等の成績は檢査掛が製絲番號札の各欄に明記した上調査掛に於て保管することにいたしてあります。

束裝及商標　生絲の束裝は二綹を以て一束とし一本に結び、同等品凡そ三十本を束ねて、一括とし玉絲は長手造とし、二綹を重ねたるもの十六本を以て一括とし、括每に其正量を表記して包紙で包み計算等級に從ひ、玉絲には風船金標以下七種、玉絲には梅標以下五種の商標を附します。

製絲の販賣　之が販賣の方法は計算等級に依て各種の商標を附し、競爭入札に依て販賣することは前述に之を述べましたが、尙販路の狀況により賣却の種別を變更することもあります、ソーして毎月一日（二日不繰り）、十一日、二十一日の三回を販賣定日としておきますけれども產額の增減に依て販賣日を變更することもあります、此競爭入札執行の場合には各種別の概數を期日の三日前迄に各顧客に通知し或は新聞紙上に廣告いたします、理事者に於て必要と認めたりときは入札者に入札すべき生絲一棚に就て三十圓以内の保證金を納せしむることもあります、て入札したものは來會者の面前で直に開札を行ひ各種別の最高入札に就て理事が其賣否を決しますが、場合に依ては協議員の議を經て決行します、ソコでありますが、之を賣受人は賣買契約の成立と共に組合の手附金を收め契約の日より三日以内に代金を支拂ひ物品を受取ることにしてあります、若しも期日内に之を履行せぬときは解約したものと見做し適宜の處分をいたします。

賣上金配當　製絲賣上金の配當は總て生絲玉絲の二種に分ちて計算しますが、配當の期日は毎月三回と定めておきます、即ち前月二十六日及一日賣却の分は四日より六日、十一日賣却の分は十四日より十六日、二十一日賣却の分は二十五日より抽選をし、ソコで賣上配當金は製絲の賣上金より總會で定めた手數料を差引き加絲量の代金を控除したるものといたしておきますが、此配當率は計算絲量の總計を以て此配當金を除し之を以て計算絲量に對する配當率を定むるのであります

尙此外いろ〳〵御話しすればありますけれども、マー此位にしておきませう。

（完）

新編桑樹栽培法

農學士　辻　賴夫　著

本書は四ヶ原養蚕會の一編として刊版されたものである讀て通名の如く桑樹栽培の方法を説述したのである著者は永年東京蚕業講習所に在りて特に桑樹に關する試驗研究を重ね其學理に通暢ちる蚕園問題解決をとして起り而かも一として苦人に誤る解決を到ふる有効あり下日本蚕園の危機をさ一呼々する者がある秋に際して本書を迎へ出たのは誠に斯業界の一福音である。かも試に本書の内容を解剖すれば第一章桑樹の性質第二章桑樹の栽植第三章接木法第四章桑樹の發育第五章桑樹の管理第六章枝養法第七章蚕園の登熟第八章蚕園の收穫計算法第九章蚕園の病害蟲及其豫防法第十章桑樹の種類等に分類し之に附錄として桑園の收支計算が示されてある讀目録で新新しいふにあらざるも記載の事柄には始に新の事が多く尙試驗研究の賞績が收てゐるから蚕園問題に苦悩する人々の必携書の一つ眼目である。

發行所　東京市日本橋區一丁目　青木嵩山堂

心影

九州蠶界の偉人　湯地恆雄君（上）

編　者

東北に遊んで製絲を學ぶ

君熊本城下に生れて僅に八歳早く父君に訣れて慈母、愛兄の膝下に人となる、令兄を丈雄と呼び剛毅夙に郷閭に鳴る二人武門に生れて共に武を好み暇あれば則ち竹刀を振て相撃ち端座武を談ず、丈雄氏武を好むと雖も時や幕末の風雲轉た急なるものあるを看取し世は遂に武を以て愛國の心を全うすべからざるに至るべきを惟ひ令弟をして實業に就かしめ「國産の隆昌を圖らしめんと欲し「恆產なき者は恆心なし」の古言に則りて名を恆雄と改めしむ而して令兄丈雄氏自らは益々武を研きて維新の際、所々に銃劍を枕とせしこと數年なるも憂ふる處は外患に在るを以て元寇反撃の歴史を講明し十年一日の如く武士道を鼓吹し、北條時宗の事蹟を探り其功を頌し續て謹國幼年會を組織して天下を遊説し、水雷艇幼年號の建造に力めて名あり、君素より武に勵まんと志せども令兄兄る所あり須らく產業の興隆に力むべしとて其家財を賣て其の資となす、君即ち茶業振興を志して社上の人となり、且に曉露を踏んで夕に旅宿の孤燈に對し、幾十の長亭、短亭を過ぎて東京に上り安場氏に刺を通じて其志を遂ぶ時に明治七年君二十二歳の時なりき。

安場氏君の風丰常略にあらざるを察し之を懇に教導して製絲の國家經濟上重要にして且つ改良の急なるを說く、君橫濱に於ける生絲貿易の殷盛を見て心密に動けるの時、以て我意を得たりとなし、之が研究を試みんと決して其意を述べ介せられて福島縣二本松双松館製絲場に赴き、製絲技術は固より經營、販賣の諸項を研究し蠶絲業の病弊を察して私に改良を企つるものあり。

野津將軍の殊遇を捨て、蠶業に荒む

君業を卒へて明治九年郷園に鞋痕を印す、盧懷泉の如く叉極りなし、而して其來れるものは蘊蓄したるところを傾倒して大に縣下の蠶業を開拓せんとするにありき然れども時恰も西南の役起りて天下騷然、熊本城は敵の重圍に陷りて城内の煙影淡く劍戟處々に鳴りて四民離散し叉君の心を為すべき途なし、君決然錦旗に屬し陰に官軍の為めに盡して殊功を立てしこと殆ど幾何なるを知らず野津道貫時に一方の將とし官軍に在り、君の功勞を賞し人と成りを愛で丶殊遇至らざるなし、將軍一日君に謂て曰く「君余と東上の途を共にせずや、武を以て立たば余之を介せん」と懇諭至らざるなし、君固より其意なきにあらずと雖も初志は屈すべからず令兄の訓は徹るべからず、君が決意岩よりも堅く自ら登龍の門を後にして飄然として去る、時に明治十年君廿五才の頃なりき。

尾參の蠶業を開拓す

君郷に歸へりて兵火の巷に殊功を立てたるも遂に其得たるところを用ひて縣下の產業を開拓するの機會を得ずして去る時に安場氏縣令として愛知縣に在り、君を招いて縣下の蠶業を開拓せしむ、君欣然として之に赴き具さに縣下蠶業の大勢を見るに其幼稚なる言語に絕するものあり、即ち桑苗栽培、接木法等の何たるかをも知らず唯舊法を墨守して能事終れりとなせる徒を率ゐて自ら修めたるところを活用しよく新法の敎授指導に任じ縣下蠶業の開拓に努めたり、十四年に至りて疾より福島縣に行はるゝ温度育法の有利なるを認め自ら之を試みて從來の養蠶法を改め叉蠶具の改良を企て氣候風土に鑑みて新に竹製丸座を案出し之を當業者に勸誘して廣く世に流布せしめたり、是今日の丸籠にして愛知縣の蠶業是より漸く盛ならんとせり。

良種を製し生徒を養成す

優良なる絲を製せんとせば原繭を可良ならしめざるべからず、原繭を可良ならしむるには良種と飼育技術の熟達を期せざるべからずとは君が斯業に携れる初めの方案なりき、赴任三年機漸く至れるを察し、自宅に於て蠶種の製造を行ひ之を地方有志者に分譲して從來の粗製蠶種を驅逐し十八年農商務省養蠶傳習所に於て微粒子病驅除法の傳習を開始するや率先東上し其奥儀に達し歸來直に是を實地に施して大に改良の實績を擧げたり、是れ實に愛知縣下に於て框製蠶種を製造したる濫觴なりとす、君是より先蠶業技術員の養成急なるを感じ私費を投じて十五年傳習生を養ひ自ら誘導啓蒙の任に當りて妙技を授くるに力めたり、明治二十六年迄其業を卒へて縣下の蠶業啓發の爲に盡瘁せるもの百餘名縣下の蠶業爲に殆ど隔世の觀を呈するに至れり、然れども君此の如き小成に安ずるの器にあらず、更に當初の目的を貫徹せんとし二十七年同志を糾合して蠶業精勵社を組織し、傳習所を設立して大に育英の事に努む、三十二年蠶業漸く發達し技術者亦東西に輩出するに至りて之を止めたりと雖も、君が尾參の蠶界に出したる英才は殆ど枚擧に遑なき迄多きに上れり。

菊水の商標　純水館理事長　小山久左衞門君

學藝委員　吉池慶正

製絲業は果して浮沈常なき乎

製絲業は短命なりなど云ふは酷評である、けれども製絲工場の長壽を保つ物は極て多くない、去年迄天に冲する煙突よりパツパツと吐き出したる黑煙も今年は絕てなく、油が斷れて車は廻らず絲繰器械は蜘蛛の巢だらけだが、聞けば借金の型におさいられたそうだ、など云ふ噂は製絲地方に少くない

國家の命脈を繋ぐとか、輸出品の巨擘とか謂はるゝ蠶絲の生産狀態斯の如しとせば慨歎に堪へぬではないか、是れ其原因何の邊にあるであらふ、或は生絲の相場は猫の眼の如く高低極りなく販賣の時機を失する爲めであらふ乎、或は原料を買入るゝに際し幾多の競爭をなすの煩ある爲であらふ乎、或は古人も謂ふ養ひ難き女子を多數に使用するの難ある爲であらふ乎、此等は何れも製絲業者に與ふる打撃であるに相違ないか、凡そ何物を成就するにも其前途に障害物の横たはるは止むを得ない事實で之を經營する人の人格技倆に依りて障害物を排除することは何の造作もないことである、と言つて此人格の備はり技倆を有する人物を得ることは難事中の難事であると云はねばならない。

目出度い二十週年

此浮沈常なき製絲業を經營し雨に浴し風に櫛り、度し難き幾百の女子を諄々として諭し、着々として堅實に規模を擴張し此に創業以來二十週年の星霜を經、本邦製絲業の本場たる長野縣に於て一方の雄を稱せらるゝに至りしは、是れ北佐久郡小諸町の純水館である、此目出度い二十週年を迎へられた社員諸君の感慨は如何であらふ、純水館の今日あるに至りしは言はでも知れる理事長小山久左衞門君の人格高く業に熱心の致す所であることは疑を容れない、又理事以下社員諸君社長の指揮を奉じ忠實に盡されたるとも多きに居るのである。

長野縣小諸町純水館再繰場内伊藤式揚枠の圖

前車の覆轍は人氣を沮喪す

此郡の機械製絲の濫觴は長野縣中でも古い方である、彼の政府は上州富岡に模範製絲場を設けらるゝに當り、當時の素封家高橋平四郎といふ人が、此地方の原料買入御用係を命ぜられた、此關係から高橋氏は屢々富岡製絲所に往來して實況を見器械製絲の有利なるを覺り、一面其筋よりの勸誘もありたるを以て、明治六年富岡製絲所に則り工場を新設した、是れが抑も此地方製絲業の元祖だそうだ、所が明治十四年彼の横濱生絲荷預所の葛藤以來兎角悲運打續き、高橋氏は財產を蕩盡し遂に製絲業も閉鎖するの止むなきに陥り、其後之が再興を企る者もあつたけれども、孰れも半途にして倒れ、人皆製絲業を指して山師なりとし、敢て之を顧る者なきに至つた。

慨然として立ち憤然として起る

製絲は創產の事業なりと唱たはれ、其話を聞くだに厭はれてあつたが、小山久左衞門君思らく蠶業の發達は製絲の進步に待つ製絲にして起らずんば養蠶の盛況到底望む可らず、蠶業を生命とする此地方製絲を興すは焦眉の急務なりと、此に於て慨然として立ち、製絲を興すは須らく器械製絲ならざるべからず、宇内の大勢は精良なる生絲を要求し、精良生絲は坐繰手挽の能くする所にあらずとなし、憤然として器械製絲場を起す、實に是れ明治二十三年帝國議會開設の年である。

心は純水、商標は菊水

創立當初は僅か百人繰の工場であつたが、志操の堅固なる深く期する所があつたことは明だ、紫藤生絲檢査所長の祝辭演述の一節に小山君が館號を純水館と名づけ商標に菊水を用ゐられたは決して偶然でないと謂はれたが、余輩も同感である。

堅實なる發達

其後小山清右衞門、平井音次郎、掛川織藏、清水清重、小山丈助氏等の同志を得て規模も固まり明治三十二年には工場五箇所、釜數三百五十七箇に增置し、明治三十八年には一層其基礎を堅くする爲め產業組合法に據り信用販賣組合に改めた、所が信州生絲の世評が海外より頻々として來り、其聲價を失墜すること甚しく拱手することを許さないと云ふ境遇に陷つた、小山君思らく此改良は熟練なる工女を得ることゝ再繰を完全ならしむるにありと、そこで再繰場を改築擴張すると同時に工女養成場を設けた、是より斯業に堪能なる技師を招聘して其所說を聞き、或は有名の製絲場を遍歷して其長所を採り改善したる結果生絲の品位も上進し從て價格も數等昂騰を告ぐることゝなつた、今や繰絲の釜數は八百三十七、場數十一箇所、產額は千五百梱に達した、故に釜數は創立當時に比すれば正に八倍半である。

筒袖に前掛

純水館の今日あるに至れるは何に因る乎は此に列記した事實に依りて知るを得べきも、更に余輩は夫れ以上小山君の人格に歸するのである、小山家は小諸町の素封家であるから泰然として奥座敷に旦那様を氣取り多數の僕婢を頤使して事足るべきに、筒袖に前掛、職工と伍し汽笛に依りて起き汽笛に依りて眠る、其勤勉社員一同をして皆之に倣はしむ、純水館の今日ある所以ではあるまいか。

愛憐と慰藉

彼も亦人の子なり終日釜と鍋との間に挾まり營々たる工女も何ぞ我子女と異ならんや、是れあるが爲に日本は一億五千萬圓の輸出生絲を出すではないか、之を薄遇酷待して如何で良好の生絲を望むことが出來やう、所が製絲家にして心を此に用ゐるもの少きは本邦生絲の改良の出來ない所以ではあるまいか、寔に遺憾の極である、純水館は工女の待遇に注意すること厚く五年以上勤續のものには換歩賃金の年額に對する割增金を賞與して居る、其割合は

五年勤續　五分
六年同　六歩
七年同　七歩
八年勤續　八歩
九年同　九歩
十年同　十歩

工男に對して一般に磨鏡の爲に興行物を観覧せしむる、と云ふ樣な譯に成り、我子の如く之を愛憐し磨鏡するから、彼れも亦の子なり、純献身的に良好の生絲を製造することを勵むは當然である、純水館の發展決して偶然でない。

天候尚險惡なり

蠶絲業に起れる三年前の低氣壓尚未だ全く消散せず、天候尚險惡である、製絲船に乗りて航海するキャプタンたる者の實に任重し決して容易でない、撤頭怒濤船を動搖し、暗礁は牙を鋭して船を噛まんとす、船長の人格技倆此に於て平試むべきである、余輩は純水館の船長たる小山君に從て來の勤勉力行と勞働者愛憐との主義を發揮し益べき三十週年の記念には更に著大の發展をせられんことを願り前途を觀覧するものである。

武州蠶界の先覺

故大畠喜三治君

編者

桑園を開きて蠶種を惠む

君は武州小金久保の城主大畠長門守十五世の後裔にして父君は[illegible]平と呼び、母は其第[illegible]子なり、五[illegible]の[illegible]内臓故あり現住地[illegible]に生れて[illegible]村治に力め農桑を興し文武を勵む、君嘉永六年十二月其地に生れて漸く長ずるや資性敦厚にして溯達其命に服せずといふことなく、明治十九年父の没後も尚其遺訓を奉戴して敢て振はず、又風に農業に意を致して其改良に精勵せり。明治四年家督を繼ぐや當時繰糸の戰廠未だ全く治まらず、衆人其途に迷へる際に從容として養蠶法の研究に志し、五年先づ居村に座繰練習所を設け教師を聘して子女に教ふる其功頗る著大なる概し、村民を指導して其間繁を金畫し、卒先鋤鍬を肩に耕作に從事し、君又居村の地平坦なるも林地多く農桑に適せざるを慨し、村内の里道約八千間の延長を拡張して桑苗を植え、又各種の蠶種を飼育して良種を選抜し、之を有志に無償配布を行ひて自ら養蠶の法を教へ大蠶業の振興を促す、一村の農家桑葉に於てか始めて興れり、君の之が爲に出せるもの蠶種のみを算するも四百六十五枚其額数百圓に上れりといふ、憂國の士にあらずんば安でよく之を爲さんや。

兒玉製絲會社を危きに救ふ

君の農業製絲擴張の爲め組繰せる會社の組合其数凡て十五を算す、地方の福利を増進する蓋し無少ならずといふべし、其待に誌すべきは兒玉製絲會社を危きに救へると之なり、該は明治十二年創立の器械製絲場にして兒玉製絲の聲價内外に高めたるの功大なるもの、然るに十四年に至り國内同業者

と謀り内外直輸出の目的を以て生絲改正會社を入間郡川越町に設け、兒玉郡に其分社を設き、畫策大に爲すところあらんを期して遂に意の如くなる能はず、損失を以て遂に解散し、社員亦破産せざるべからざる悲境に沈淪し、從て會社は[illegible]間六萬餘圓の負債を生ずるの危急に遭遇す、而かも策の施すべきなし、當時者乃ち縣下の大事業に大願擔を來すを恐れ、君を社長に推し、君亦社長に推しを辭ずして、茲に於て前後の策を講ずしも、遂に[illegible]を丹庄[illegible]に移し、剣苦經營數年にして其負債を償還し、社員の破産を免れ社運を挽回して之を危きに救へり、君の之が爲に私財を投ずるもの實に萬餘、而かも敢て恬として極色なく、只管社運の發展に努力するあるのみ、誠るものの者敬服せり。

故大畠喜三次君

道路を修め、農蠶教育を振興す

君又管て地方文化の發達、農村の振興は道路を修ひるに在りとなし、木組、鬼石街道の沿線組合を組織し、又村民を誘ひて村内の里道約八千間の延長を改修する等私財を擲ちて公益を進ひること挙げて數ふべからず、特に十七年には農蠶教育振興の爲め共進社を設立し、農

賞記

三賞性質ハ風ニ恭フ農産ニ勵ミ率先指導地ヲ圖キ桑苗ヲ擇ビ殺ハ躬ヲ研究シ蠶種ヲ精製シ教ヲ聘シ子女ヲ集メ有法ヲ練習シ業ニ頗ル志ヲ蠶ニ謀リ共進ヲ起シ推レテ社長トナリ廣ク生徒ヲ各府縣ニ募リ資ヲ揮ヲ之ヲ養成シ業ヲ卒ヘタル者八百餘名ノ多キニ至ル又美作讃岐ノ農

天君を賞す

意ニ善行を積む者ハ之を賞セラルヘシ、君官ニ公私の團體其他より受領せし賞狀、賞牌、賞金等を悉く數ふるに遑なからんとす、特に明治二十三年十月官より勅定の「褒賞」を賜へるものの是れ天君を賞せるの、揭げて君が德を頌せん哉。

產物協會、養蠶練習所ヲ開キ且各種ノ會社組合ヲ組織シ屢々顚踣スルモ屈撓セズ斯業ノ改善普及ヲ圖リ其他修路植樹等ニ力ヲ竭シ前後費ス所尠カラズ而ニ公衆ノ利益ヲ起シ成績著明ナリトス、依テ明治十六年十二月七日勅定ノ藍綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

君遂に逝く

人の命數は豫じめ定るものありて亦如何ともすべからざるか武州蠶界の先覺者として斯界に偉績を樹て衆人の渴仰淺からざる君も二豎の犯す處となりて舊臘初旬より遂に起たず大醫佐藤博士匙を投じて悵然たるの時、君は眠れるが如にして他界の人となりぬ、時に二月十三日枯林に宿れる寒鴉漸く眠りを破りて將に東西に飛去らんとするの頃なりき、斯て君の遺骸は君が居村長慶寺に葬れたるが會葬者無慮五千餘名涙を拂つて弔詞を捧げたる者數十名以て君が生前の知己如何に多くして又如何に多くの人に敬慕せらしかを知るに足らん、玆に君が亡き遺骸は空しく荼毘一片の烟となりたりと雖も君が偉績は永へに傳へられて冥々裡に後進を感化するの甚大なるは今敢て茲に贅ずるの要なし編者謹んて君が事蹟の梗概を叙して以て其靈に捧ぐと爾云ふ。

蠶兒膿病の病原 全　理學博士 佐々木忠次郎著
蠶病に關する諸問題は昨今から解決せらるゝ様だが獨り未解決の中にありて學者間の大問題となつて居るのは膿病である或は傳染性なりといひ或は傳染性ならずとも云ひ同じ傳染性と云ふ中にも其病原に就て諸説紛々治まらぬの有様であるが本書は斯界の大學者たる佐々木博士が多年之に從事せられたる事蹟の一端を公表せられたものであるから蠶病研究者は是非一讀を要す
定價五拾錢　發行所　東京市日本橋區箔屋町十四番地　丸山舍

佛國に於ける本邦產羽二重と新關税（外務省報告）

在佛國實業練習生　三田長太郎

佛國政府は一八九八年以來、亞細亞產絹織物に對し、一基に付九法の關税を課し來りしが、獨り本邦產羽二重に之を原料品と見做して全然課税することは無かつた、而して同品が年々其輸入數量を增加して一勢力を存するに及び、同政府は一九〇六年以後日本產羽二重（生のものを除く）をも他と同様に見做し、內地消費品に限り、一基九法の輸入税を徵することにした、其結果として佛國內地用羽二重は專ら無税なる生羽二重の儘にて入國し、着荷後適宜加工せらるゝこととなつたが、政府は豫期の收入を得ることが出來ないので、遂に生羽二重にも相當課税せねばならぬとの議が當局者間に起つて、本年に至り亞細亞產絹織物關税案なるものが下院に提出せられ、討議の末四十五に對する四百九十一の大多數を以て可決せらるゝに至つた、其內容概ね左の如くである。

○本邦產羽二重

練らざるもの百基に付　一般税率六〇〇法　最低税率三七五法

練りたるもの百基に付　一般税率九〇〇法　最低税率六〇〇法

○山東絹紬「ナーホン」（湖南絹紬）「アッサレ」（印度絹）其他

練らざるもの若くは單に練りたるもの百基に付　一般税率六〇〇法　最低税率三七五法

而して右は尙上院を通過し、大統領の裁可を得ることを要するけれども、輿論の向ふ處已に明てあるから、之とて單に形式に止まるものと見る可く、從て同案は一九一〇年四月一日より實施せらるゝものと見て差支ないやうだ、抑說此税法實施の曉、本邦產羽二重は如何なる影響を被る可きやに付ては、我當業者の將に研究を要する處である、由來本邦より佛國內地用として供給する生羽二重は年額約六百萬法に上つたやうだ、此多額なる需要は到底一朝にして變ずるものではない、如何なる方面よりか之れが供給をせねばならぬ、即ち同新關税率實施の結果として、（一）或佛人の信ずる如く其課税の以て我羽二重を始め、全亞細亞產絹織物の佛國輸入を杜絕し、其年額一千五百萬法の絹織物は全然內地製造家の手に移り、其支拂はる可き二百萬乃至三百萬法の賃銀は以て里昂地方の職工に奉ずるに到るべきか（二）從來の輸入生羽二重が尙ほ其適者として存し新税を擔ひつゝ當地に輸入さるべきか（三）又は價格の關係より練羽二重之に代るに到るべきかであつて、先づ第一の場合を考ふるに我羽二重に對する新税率は從價の一割（一基六法とせば約一割）であつて、禁止税と云ふ程のものではない、而して其價は一割方高められたから、佛國內地產羽二重類が一擧にして其地位を覗ふは到底不可能のことで其主たる理由は同品が全く半製品であつて、其價の如き原料生絲と勞銀との總計なりと云はねばならぬ、從て其原料不廉にして賃銀に三乃至四倍を要する當地に在ては、其製品價格我に比して二割或は其以上の增加を見るは明である、況んや我羽二重は商品として一種獨特の趣味を有し佛國機業家の一朝にして學び得ざるもののあるに於てをやだ、然らば第二の如く我生羽二重は此儘繼續して佛國に入るべきや否や、元來我生羽二重の佛國に現はれたのは、前述の如く練羽二量課税の結果であるから、若し兩者課税の場合少なくとも、後者に依るを有利と認むるもののあるときには、又以前の如く練りを以て輸入せらるゝであらう、今之を研めんが爲め、左に同一羽二重の生練兩者に付て見るに、練羽二重百八十目（六七五グラム）のものは、同上生羽二重二百四十目（九〇〇グラム）とする時は、之に一基六法の税率を乘ずれば四法〇五である、同上三法七五の税率を乘じ、三法三七五尙其練賃一基に付一法を加ふれば四法二七五である、又其原價より見るときは生と練との差殆どなく、寧ろ檢査の手數等に關し、後者の場合即ち練羽二重が其價格の關係上、從來の生羽二重の位

殺を奉ずに到るは、一點の疑無き處にして、其新說實施前後に於てこそ多少の變動は免れざるも、一般に於て我輩入羽二重が此新稅案により一大打擊を被るものとは見ること出來ない、反て羽二重精業の如きは其發展の上に一動機を捉へ得たるものと見ることが出來やう、之を以て當里昂羽二重取引商人等は極めて冷靜なる態度を以て同業の經過を注視し、向後同稅の實施に付ても何等運動を爲さざるに決した。（編者記

後の報道に依れば實施のことは院を通過し（本年四月一日より實施のことに決定した）

通俗養蠶學講義全

農學士　大森　順　述著

本書は養蠶に關係ある凡ての事項蠶糞及出蛾卷反映蠶飼育法を極めて通俗的に述べたものである

且蠶體解剖生理蠶糞及出蛾卷反映蠶飼育法を極めて通俗的に述べたものである

家庭に於て主婦子の一大愛玩たるべく又任者教師諸君の良好なる教科講義たる乞信ずつて居るから一讀すべき良書である

乃至養蠶主は其序言に言

實務　養蠶年中行事

一愛媛縣立西宇和郡農會　池田榮太郎
　　馬場由

五月（立夏）

遠近の桑園を見渡せば目の達する限り綠滴らんとするばかりに繁りあひて自ら養蠶家の意氣を壯ならしむるの概がある、又雲間に雲雀の鳴く聲輕く宛ら吾人の飼育する蠶兒に注意を從すものゝ如くにも聞ゆる、ツモ〳〵吾等は此月に於て何を爲すべきか。

夏蠶元種掃立

夏蠶元種とは法定の二化性第一化であつて、即ち普通夏蠶の親を云ふのである、此元種の掃立も地方の氣候によつて一樣に云ひ難いけれども、大抵上旬頃に掃立つるものが最も多い、家蠶製種家の多忙なのは此時から始まる。

貯桑

桑種が善良であつても貯桑其宜しきを得なければ忽ち變じて不良のものとなる、殊に摘桑其儘相重なるに於ては蒸熱を釀して黑褐色となり或は枯凋して蠶兒に給することが出來ぬやうになる、故に養蠶家は掃立蟻量に對し相當の貯桑所を設くるは最も緊要である、其方法には種々あるけれども左の目的に叶ひまれば何の法にても差支はない。

一、採桑百匁のものは八十匁前後に水分發散せしものを給桑すること。

一、桑葉を萎凋せしめること。

一、蒸熱を醗酵を變化せしめること。

一、貯桑室は適宜の空氣を流通して陽燈せしめること。

一、日光を透射せしめず又風氣に直接觸れしめぬこと。

剝桑法

剝桑の巧拙は偏り桑の經濟に關するばかりでなく、蠶兒の發育上重大な關係を有するものである、若し剝一大不一同であつたならば忽ち蠶兒發育の不齊を來し、或は冷濕蒸熱を釀し、直接間接に疾病の媒介となる、故に蠶兒の發育及氣候によつて剝酌をせねばならぬワコて、剝桑法には長方形（短冊形）方形、四角（鏢形）三角切等の法があるけれども、其何れを問はず總て均しく剝へるといふのは飼桑の要件である、今四角切の標準を示せば左の如くである。

掃立	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡	蠶兒	一寸	蠶台	枝条
次に	一分	飼食	二分	飼食	五分	飼料	五寸		
次に	五厘	次に	二分二厘	次に	三分	次に	七分	次に	切放

蠶台	二分	蠶台	三分	蠶台	五分
眠前	五厘	眠前	二分	眠前	四分
蠶台	一寸	蠶台	枝条		
眠前	七分	熟前	切放		

給桑

給桑分量の多きに過ぐるは唯桑葉を浪費するのみならず絲沙次第に堆積するから不時に寒冷の氣候に遭遇せば蠶座の冷濕を來して蠶兒の發育を害し、又溫暖なる時には蒸熱を釀して軟化病及膿病等を生じ易く、之に反して不足なる時は蠶兒飢餓に迫り身體の營養に不足を來し、爲に疲勞して虛弱に陷り易くして甚だしきは斃死するから、給桑は宜しく左の事項に注意せねばならぬ。

一、桑葉水分の多少及濕味の異なる種軟厚薄等の桑葉を混與せざること。

一、給桑は厚薄、過不足なき樣平等に給與すること。

一、蠶座濕潤且湿桑を生じたる時は直に除湿を行ふか若しくは適宜の殺蟻を散布し後給桑すること。

春夏蠶給桑量並に回數

給桑量及回數は春夏秋又は空氣の乾濕により相違がある、又春夏蠶蟻量一匁に對し各節間の標準を示せば概略次の如くである

節	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡	節	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡
毎日回數	四回	五回	六回	七回	八回	夏	四回	五回	六回	七回	八回

給桑量	廿六二	[illegible]	[illegible]	三九	[illegible]

以上の標準は大略に過ぎざれば強ち之に拘泥することなく、寒暖晴雨と蠶兒發育の緩急を察して臨機斟酌せなければならぬ、例令ば氣候が温暖で乾燥の甚だしきときには桑量と共に一回乃至二回の給桑を増さねばならぬ、又之に反して寒冷であるか濕潤なときには、一回乃至二回を減して前記の目的に叶ひ得る樣の手段を取るのである。

除沙分箸

元來蠶兒は清潔を好むのみならず感覺過敏な性質を有するものである、故に若し除沙を怠るときは蠶沙堆積して諸種の病源を誘發し、又蠶兒の成長するに從ひ適當の面積を與ふるは最も肝要である、若し厚飼に過ぐれば健康を害するが爲、發育不充分である、然し又薄飼に失すれば桑葉に非常な不經濟を來すものである、今適當の面積を知らうと思ふならば先づ蠶體の面積を基として、一二齢の蠶兒には五倍、三齢には四倍四齢には三倍、五齢には一倍半の廣さを與ふるの方針を以て分箸を行ふを安全とする、除沙は蠶兒の幼老及春夏秋蠶に依つて各齢間の回數に定めがあるけれども、降雨濕潤にして蠶兒の衞生上有害と認むるときは標準表に拘泥せず蠶拔或は臨除を何時にても何回にても之を行て以て蠶沙の乾燥と清潔とを計らねばならぬ。

春夏蠶々座面積

蠶座の面積も春夏蠶により差異がある、今左に蟻量一匁に對する各齢間の面積並に除沙分箸回數を示さう。

	春蠶之部					夏蠶之部				
	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢
除沙分箸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
蠶座面積	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
蠶座箸數	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

但し春蠶五齢三日目より毎日蠶拔を行ひ夏蠶五齢二日目よりは毎日二回の除沙を行ひ、夜間尚蒸熱盛なるときは、一回の蠶拔を爲す

停食

蠶體皮膚に緊張して滑澤を帶び俗に云ふ飴色となつて頭部即ち第一二三環節は膨大して尾部細くなりたる時は將に眠りに就かんとするの徴候であるから稍温度を高むると同時に暫時給桑量を節減する、眠前糠入れ後二回乃至三回給桑して眠除を行ひ、後三四回にして停食する、眠除後桑回數は多くも五回を越へぬを良しとする、但し一箸中二三頭の起蠶を認め、尚就眠せないものの多くあるときは網若くは箸で拾ひ取り別箸に移し、上架段に於て飼育し、眠蠶は其下段に挿置くときは發育も稍齊一となるのである。

眠中の取扱

眠中取扱の精粗巧拙は直接蠶兒の生理上に重大な關係を有して居る、從て其結果豐凶にも影響を及ぼすとが大きい、此際若し乾燥に失する時は蒸發が盛であるから舊新兩度を困着して甚だしく脱皮を困難ならしめ、又之に反し濕潤に失する時は蠶座寒冷となつて眠中に長時間を費し、蠶兒をして困難の増過を長からしめ此際不時の高温蒸熱に遭遇するときは蠶兒愈々虚弱となりて種々の疾病を誘發し救ふべからざるの損害を蒙るに至るのである故に眠中、補温、補濕其宜しきを得て可成長時間に渡らざる樣取扱はねばならぬ、今左に其要項を示して參考に供せよう。

一、室内は靜穩にして空氣の流通日光の透射を避くること。

一、低温多濕にして火力を要する時は氣拔及び内側の障子を開放して補温すること。

一、温度は食桑中より一二度低温にすること。

一、過乾なるときは適宜に濕氣を室内に補ふこと。

餉食の注意

餉食とは脱皮終りて第一回に給桑するのを云ふのである、其時期の適否は蠶兒發育の齊否及飼育の難易に密接の關係を有する、飼令は中桑振桑と稱して未だ起き揃はない前に給桑するのは即ち蠶兒發育の不齊を來す原因となる、又之に反し遲きに失すれば勢ひ絶食長時間であるから蠶兒疲勞の度を多からしむるようになる、而して餉食の好時期は平常の氣候であれば停食後十二時乃至二十四時間目にするが良い、但夏秋蠶及高温過乾なる時には之より稍早く行ふ方がよろしいのである。

蠶病の處理

蠶の疾病には種々あるけれども、之を大別して軟化病、硬化病、微粒子病、膿病、蛆害の五種とする。

之等の蠶病中假令傳染性を有せないものでも斃死するときは、是に黴菌蕃殖して諸種の病害を誘發せしむる者であるから、養蠶中病蠶を發見したならば猶豫なく之を淘汰して「フォルマリン」稀溶液若くは石灰水中に投じ、他に傳染するを防がねばならぬ、又病毒は蠶兒の體内に止らず其排

濕物等に混在蕃殖する者であるから、病蠶を出した時は特に除沙を頻繁にし、其糞沙は直ちに燒却若くは埋沒することが肝要である、倘消毒法に關しては消毒を參照し詳細を知らんと欲せば日本蠶病法及最新實驗蠶病消毒法を一讀せられたい、又蠶種製造家及び製絲家に對しては特に蠶病豫防法を以て規定せられたい。

秋蠶元種出穴

本月上旬より順次掃立の都合によつて出穴する、之より以後は所謂究理即ち「カエリ止め」とて原種催靑の注意が肝要である、該種製造者は寸時も油斷が出來ない、此究理は出穴より發生まで凡そ二十日乃至四十日間の仕事である。

豳風圖詠

夏半蠶已老。蕃腹吐絲綸。簇山禁錦爛。繭然似金瑩。擇之盈筐笭。聚觀來四隣。養蠶切至此。足補終年貧。先擇來歲種。化蛾足稱神。遠懸通風處。愛護保如珍。

屑物整理

眞綿の製造法

眞綿は如何にして製造するか　眞綿の原料は玉繭屑繭出殼繭、穴明繭等で下等の品には揚繭やビショ繭鼠切繭や蟲切繭などありますが、先に申した通り玉繭や屑繭は出來得る丈絲に製し、どうしても絲にならぬものを眞綿に製するのであります、併し最も極上の眞綿を製するには生の玉繭で形狀の良好なものを撰びますが、何を致しますにも利益との相談でありますから、眞綿、玉糸の代價及び工費其他能く計算をして利益の多い方にするのであります、玉繭で製した極上等の眞綿には百匁三圓以上三圓五十錢にもなるものがあります、汚繭や鑄繭のものは色澤が充分でないのと品質が玉程に出來ないので玉の上等品よりは五十錢乃至一圓の價格の低いものが出來ます、出殼繭も同樣で揚繭其他の者は百匁で拾八圓より二拾圓位の品しか出來ません殊に之等は製造困難ですから紬にした方が利益と思はれます、眞綿は上達しますと一人一日に袋直綿で一斗角眞綿は二斗も三斗も剝く樣になりますから練釜は直徑一尺五寸に深さ一尺三寸位の大釜で一度に三斗位宛も練る方が練れ加減も上等で、又經濟上にも宜しいと思ひます、又一升や二升練るには家で御飯を焚く釜で宜しい鍋で練る事は疵練勝ちで面白くありません、袋は麻布の極く目のあらひもので五升か一斗も入る樣に造ります、揚ぎ笊子は丸い小竹か割竹なれば能く磨き數十本を麻絲で三四ヶ所編み長さ二尺五寸巾一尺五寸もあるものを造り、盥は足なして口徑一尺七八寸深さ八九寸もあれば宜しいが、若しわざ〳〵掛盥を造るとすれば手前兩手のあたる部分のふち丈一寸二三分にして、少しく圓形に造らせたならば極く宜しいと思ひます、眞綿掛け框を持たせる向ふの竹は口徑一寸三分程のものを能く磨き、盥の眞中のふちに打付、向て右の方に一尺五寸程長く出して置きますと、出來上つた眞綿を之れに掛け置く

のであります、手前の竹は口徑七八分のもので框足を強くきめて置くのです、掛框は大判で眞綿を掛ける部分が長さ一尺二寸五分巾が一尺二寸小判は長さ一尺巾九寸五分であります眞綿掛框を造らせる時に注意すべき事は最も堅き木を以てする事と、削り方を出來る丈叮嚀にする事、又切込を深くせぬ事で若し削り方が粗末であると眞綿が引掛り又木が軟であれば、角が次第につぶれ、又さけて使用が出來なくなります切込みが深ければ眞綿の耳が厚く成つて宜しくありません。

眞綿延べ板は八分位の堅い板で一尺三寸四方のもの二枚を能く磨き、眞綿の掛からぬ樣に造らせるのであります、眞綿仕上げ豪は掛框よりも長さも幅も五分宛つめて造ります、此盤も削方には充分注意せぬと、眞綿が引掛て毛羽立ちます、其造方は堅き厚き板の四方に四角の孔を穿ち、留針を挿すのですが、一度〳〵眞綿を嵌めたり除けたりする爲め、孔が大きくなりますから、同じ孔を有する鐵板を嵌め置くが宜しい盤の四方に直立せる留針は下の孔に挿す處は四角で上の方は圓く造り、成るべく良く磨き置かねば眞綿を嵌めたり除けたりする事が容易でありません、それから眞綿を括ります時用ゆる針は鐵製で疊針の如きもので、少々身細なものが宜しくあります。

眞綿繭の練法　眞綿繭の練方は紬と別に變りはありませんが始め袋に入れる前に毛羽を綺麗に扱つて置かないと、眞綿にぶつぶつしたきずか出來上等の原料でも品質の惡いものが出來ますから、少しも毛羽のない樣に又塵埃のない樣注意し、重量を改め、袋に入れ、一夜水に浸し置き、翌日取り出して搾り一度水を替へ搾りて練釜の湯の沸騰したる時、定めの藥量を入れ、能く混ぜて袋のまゝに、釜に入れます、又出殼繭なれば三分目位の日籠に入れ、能く混ぜて蟲粉も取り、然る後袋に入れ、一度清水に浸し置き翌日取り出して拇指大の圓竹を編みし臺の上に置き、軟かに足にて踏み赤き色の出ないまで清水をそゝぎ掛け、然る後搾りて釜に入れます。

それから生繭の時分は三四時間も清水に浸せば宜しい、又藥品の量は乾繭より少々多くして練る時間は十分か二十分少なく煮く方が宜しい、兎に角繭を釜に入れて後ち沸騰して來たならば時計を見て三十分間立ちますと、一度上下に引繰反し、又蓋をして、二十分乃至三十分間煮きますが、取り出して洗ふ前には必ず袋の繭の中程のものを四五粒取り出して洗ひ、手掛をなし、其練加減を試みませんと時々藥品量のまちがひないとも限りませんし、又火の焚へ加減でもちがひますから、充分注意せねばなりません、繭の練れ加減は眞綿の品質、作業上に大きに關係があります、若も若煮であつた時は繭の層が硬くつて塊りが出來展延する、時分に斑なく延べられぬのみか、力ばかり入つて骨折つた丈良い品は出來ず、且つ色澤惡しく手觸りが粗硬であります、然ればとて練過ぎては引きが弱ひ爲め思ふ樣に引延ばす事が出來ぬので、之れ赤斑が出來ます上に張が弱ひので耳に光澤なく價格を落しますから、能く〳〵注意して練れ加減を過たない樣にせねばなりません、釜の中に繭を入てから注意する事は袋の口の括りゆるんで繭が袋の中で動きますと互にもつれ合ひ製造か困難となります、又餘りに堅く押込み括りましては斑煮となりま

すので、程好く括りしものがゆるんだり又解けたりせぬ樣注意する事と、湯が沸きすぎるとて袋をしきりとつゝきこねまわしては之れ亦繭がもつれますから、湯が沸きますのは始め少時間ですから、少しの間蓋を取り火を強く焚かない樣にして沸きが靜づまつてから火力を增すのでありまず、又中蓋を用ゆるならば一層斑なしに繰れますが、中蓋は重量のある色の出ぬ木で造らねばなりません、それから釜の中央にある袋と端にある袋とは引繰反す時分取替へねばなりません。

（未完）

農作物醫談（第一編）

理學士 農學士 顯 正太郎著

本書は明治三十九年から四十一年迄の間に農業世界大日本農會報大日本蠶絲會報を始めとして其他幾多の新聞雜誌に掲載した作物の病害に關する談話に更に訂正餘補を加へ判り易い爲に被害作物の寫眞圖畫を添へて一卷としたので各主屬の病害は孰も其當時發病地からの豫防方法の問合せを受けたり或は大發生の報知に接したりしたもの許りであるから本書は作物病害の質問應答錄で又當時の病害史てあるとは著者の例言に見ゆる處であるが其目次は思草の話聽用人蔘の腰折病、黑穗抜きの注意等三十七ほど並べてある試に桑赤澁病大發生に就てと題する記事を讀んで見ると四十一年には如何なる地方の桑園に發生したるか、赤澁病は如何にして蔓延するか、赤澁病は如何にして發生するか赤澁病は如何にして豫防し得べきか等の各項に分ちとはて凡そ十三頁計りも懇切に書てある痒い處へ手が屆くやうな書き方蓋し本書の如きをいふであらう（定價一圓二十錢發行所東京市日本橋區通三丁目十番地成美堂）

絲況

横濱市場

四月中の横濱生絲市場 今月に入つてから春挽絲の出廻りが漸く減少の氣味となつて、適品缺乏の折柄歐洲向きの新規注文が到達したので、細筋及上一番細目物が盛に取引きせらるゝことゝなり、米國向きも亦三井物產や生絲合名會社などが當用口へ買進んだ爲に市場は端境期に似合はぬ好況を呈した、隨つて細筋十中は九百二十圓弱みに引締り信州上一番八百五十五圓の相場を現し、倘內地向きの賣行好況なると銀塊相場の騰貴せる關係とに依て前途好望に見受られたが、中旬頃に至りては信州物の賣行良好なるに反して其他は捗々しき入電なく補充談すら手薄の狀況であつたから、市場は誠に閑散であつたが、下旬に至りては今度歐米向共に不振の狀態に陷ゐつたので各館の氣乘り薄は勿論のこと染みたる商談もなく誠に面白からざる風情で越月した。

價格の差 四月中の最高價は伊豆城南社細の九百三十五圓で、其低直は岩代共同二馬折返の八百二十圓であるから、之を昨四十二年四月の最高直駿河久保田製絲太の千二十圓に比すれば八十五圓の相違である、又低直岩代共同三馬折返の七百七十圓に比すれば三十圓方高かつた譯けである。

倘ほ本年度の生絲相場を見るに昨年六月末の新絲以來一時漸く恢復の色が見えて七八兩月は稍好況を現はさんとしたが、爾來常に寸進尺退の商狀で頗る不滿足なる結果を呈したのであるか今神榮會社の調査に依り昨年度六月より去四月末迄の絲況を表示すれば次の如くてある。

月次	信州上一番 最高	信州上一番 最低	信州上一番 月末	關四上一番 最高	關四上一番 最低	關四上一番 月末
六月	九五五	八〇〇	九二五	九六〇	—	九八〇
七月	九一〇	八六五	九〇〇	1,000	九六〇	九八〇
八月	九〇〇	八四〇	八四〇	1,000	九四〇	九四〇
九月	八四〇	八五五	八五五	九四五	九一〇	九一〇
十月	八六五	八四五	八四五	九一〇	九〇五	九二五
十一月	八四五	八一〇	八一〇	八八〇	八八〇	八六五
十二月	八八〇	八一〇	八三〇	九三〇	八八〇	九〇五
一月	八三〇	八四五	八四五	九一五	八七五	八八〇
二月	八二五	八二五	八三五	八四五	八五五	八六五
三月	八一五	八三五	八三五	八六五	八八〇	八八〇
四月	八八〇	八一五	八一五	八八〇	八四〇	八四〇
平均	—	—	八八六		—	九〇六

次に太飛切上及び細十中上物の同期間に於ける高低は左の如くてある。

月次	太飛切上 最高	太飛切上 最低	太飛切上 月末	細十中上物 最高	細十中上物 最低	細十中上物 月末
六月	1,100	—	1,100	1,100	—	1,080
七月	1,105	1,060	1,060	1,080	1,025	1,050
八月	1,100	1,040	1,040	1,025	1,010	1,010
九月	1,080	1,080	1,080	1,010	九八〇	九四〇
十月	1,080	1,010	1,010	九八〇	九一〇	九八〇
十一月	1,010	九八〇	九八〇	九八〇	九〇〇	九〇〇
十二月	八八〇	九三〇	八八〇	八八〇	九二〇	九三〇
一月	九一〇	八九五	九四〇	九五五	九三〇	九三〇
二月	九六五	九三〇	九一〇	九三〇	八八〇	八八〇
三月	九三〇	九二〇	九三五	九三〇	八八五	九一〇
四月	九三〇	九一〇	九二五	九二〇	九二五	九三〇
平均	—	—	1,008	—	—	九八〇

次に座繰及び折返は前年度に比し非常に好く賣退きたるも成行は矢張同樣てある。

月次	座操一番物 最高	座操一番物 最低	座操一番物 月末	折返一頭馬 最高	折返一頭馬 最低	折返一頭馬 月末
六月	九三〇	—	九三〇	八八〇		八六〇
七月	九二〇	九三〇	九〇〇	八八〇	八六三半	八六三半
八月	九四五	九一〇	九一〇	八四五	八三〇	八三〇
九月	九〇〇	八六五	八三〇	八三〇	八一〇	八五五
十月	八四五	八七〇	八七〇	八二〇	八二〇	八〇〇
十一月	八六〇	八八〇	八六〇	八二〇	七八〇	七八〇
十二月	八六五	八三〇	八六五	八二五	七八〇	八四五
一月	九〇〇	八〇〇	八〇〇	八二五	七八〇	七八〇
二月	八〇〇	八二〇	八三〇	七八〇	七八〇	七八〇
三月	八六五	八六五	八二〇	八二〇	八一〇	八二〇
四月	八〇〇	八六五	八六五	八三〇	八〇〇	—
平均	—	—	八八〇	—	—	八〇

平均は月末絲價十一ケ月間の平均にして黑線は見當相場なき者也

生絲の集散 四月中に横濱生絲市場に集散したる數量は左表の如くてある。

明治四十三年四月自一日至三十日生絲集散表

	持越	入荷	賣了	地方積戻	繰越
器械	二三、八九三	一六、二五一	一六、二六〇半	一、九〇九半	二一、九七四
座繰	五〇三	二三九半	一八九半	一三四半	四一九半
折返し	六九	六六	二六九	二〇四	六二
雜絲	五三	八三	—	八五	五一
合計	二四、五一八	一六、六三九半	一六、七一八半	二、二三二半	二二、五〇六半

備考
一、表中單位個は九貫目を指す
二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る
三、前月分の繰越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る
四、賣了中米國に輸出せるもの五千九百三十八俵歐洲に輸出せるものは三千五百五俵にして外に玉絲二十五俵なりとす

之を昨年の同月に比すれば入荷に於て五百十四個半積戻に於て三十五個半を增加したが、手合に於て一千六百六十五個半賣了に於て三百三十一個半を減じた、而して持越と入荷とを合すれば四萬千五百五十七個半となり、之より賣了と積戻とを合した一萬九千〇五十一個半を引き去るときは市場の在荷は貳萬二千五百〇六個半となるのである。

尙參考の爲に四月中に於ける生絲日別表を示せば左表の如くである。

明治四十三年四月自一日至三十日生絲集散日別表

器械太□　同中△　同細○　座繰×　折返し＋

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名	社名	種別	最高價	最低價	摘要
一日	六五〇	四二二	七一三	—	—	一八三	信濃 同	林組 國光館	□○	八八〇	八五五	手合薄にて商談靜なかりしが相場は總て變りなし
二日	二一七	四三九	五六九	—	一、〇七四 玉絲一五	一一五	信濃 同	小口組 進眞社	□□	八三〇	八二五	依然歐洲向主にて必要口は稍々買進み信州上一番五圓高を示したり
三日	—	—	—	—	五二二	—						大祭日　日曜日
四日	一、一三六	五一九	七五二	—	—	一〇九	伊豆 信濃	城南社 大和組	□○	九一〇	八三五	歐洲向には續て商談を爲し信州もの五圓高に賣行けり
五日	五六一	一六九	一、一一四	一	—	九三	武藏 信濃	南武社 ㊀組	□○	八八五	八三五	折返し絲相手は品擇底の爲め相場幾らか高かりしも其他品は別に變りなく氣配保合の姿なりき

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名	社名	種別	最高價	最低價	摘要
六日	七〇二	一九	六七五半	—	一、一五三	一〇八	美濃 信濃	石原館 信光館	□○	九〇五	八三〇	補充商談漸く手薄となりて敢て變らざれど靜かなりし
七日	六八二	三〇二	一、一八〇半	—	—	一二四	武藏 信濃	澁澤製絲 入〇製絲	□○	九〇〇	八三五	當用口へ弗々商內出來せしも相場變りなき成行なりし
八日	五三〇	一二九	八八〇	—	—	五〇	三河 信濃	國寶社 小口組	□○	九〇五	八四五	前報同事
九日	五〇〇	五九〇	六一〇半	—	八一四 玉絲一〇	五九	相模 岩代	撲風社 共同二馬	＋○	九〇五	八二〇	此の際幾分つゝ新に入電を得て當用口の商談あり信州上一番五圓高に出來せり
十日	—	—	—	—	—	—						日曜日
十一日	一、〇七五	一六七	七一七半	一九	—	八一	美濃 信濃	大同館 日本社鋼	□○	九二〇	八四五	引續き適品は商談を試み手合敢て多からず相場は又々五七圓高の氣組なりし
十二日	五四八	二六三	一、〇二二半	五四	—	一一四	伊豆 信濃	城南社 小口組	□○	九三五	八四五	中には顧客中の匠電達したる向ありて大筋品により五圓高の成行なりし
十三日	六〇六半	二四二	四四四半	二三	一、七九二	六八	飛驒 信濃	双進社 開清館	□○	九一〇	八五〇	兩三館續いて買氣ありて弗々出來するものは相場異狀あらざりき
十四日	七三二	四一一半	九一六	三六	—	二〇六	信濃 同	丸山製絲 濱製絲	□□	八八五	八五〇	弗々變りなく出來せり折返し絲は特殊の事情ある商內にて別派格高なりき
十五日	三一五	五六	九三七	—	—	一一二半	武藏 信濃	上水社 飯明社	□○	九一五	八五五	補充口の商ひのみありて氣配相場とも別に變りなかりし
十六日	八八四	七九	五四三	九一	一、一二〇	八一	信濃 同	雄工社 入〇製絲	□△	九〇〇	八四五	新規は更になく補充談も手薄の狀況となりし
十七日	—	—	—	—	—	—						日曜日
十八日	一、〇〇八	三二	五五三半	一九	—	一一一	信濃 同	林組 信英社	□△	九一〇	八四五	入電捗々しからざる容子にて碌々商談なく出來直は變りなかりし
十九日	四七〇	—	六一六	一八	—	八八半	越後 岩代	船水館 共同二馬	＋○	九一〇	八三〇	全く靜の狀況となり碌々商談なし
二十日	五〇〇	三七七	六四四	—	一、〇〇二	一〇五	信濃 同	清澤製絲 進眞社東	□△	八六五	八四五	依て賣人の出てざる爲め甲九十番の補充口へ五圓安にて手合出來せり
廿一日	六五三	四八七	三二六	六六	一五六	一七	信濃 同	信產館 小口組	□□	八六〇	八五〇	相場變りなく續いて信州物は良く賣行けり
廿二日	三五〇半	九三	五一八	一八	—	三六	信濃 同	宮國館 片倉平野	□□	八六〇	八五〇	歐洲向へ少々の手合出來せしのみにて氣配は稍と靜かなりし

廿三日	六五九	三〇	二一三	一九	二二一	四〇	武藏 林組 / 信濃 丸茂製糸	□□	八六〇 / 八五〇	商談至て鈔なく新規手合皆無の姿なりし
廿四日	—	—	—	—	—	—				日曜日
廿五日	一,三四八	—	四一一	—	—	二七二	上野 碓氷社二八組 / 信濃 小口組	×□	八六〇 / 八四〇	各館とも氣乘り薄にて捗々しき商談なく一般に頗る重く成行けり
廿六日	二七三	一六四	五六七(半)	二八	—	六八(半)	信濃 松明館 / 同 光進社	□□	八六〇 / 八四〇	必用補充口へ信州物手合出來したれど概して氣乘り薄の商狀なり
廿七日	五〇七	一一八	四一六	九	一,二八四	四一	信濃 岡谷日の丸 / 同 金山社	□□	八五〇 / 八四〇	依然不振にして稀々商談なし
廿八日	五四五(半)	一八	五四五	一八	—	三	甲斐 龍盛社 / 信濃 信龍館	□□	八九〇 / 八五〇	相變らず倦みて商談なく至て靜かなりし
廿九日	六四一	—	四四〇	九	—	二二	信濃 矢島社 / 同 進貢車	□□	八五〇 / 八四〇	概して閑寧ながら兎角不振の人氣なり
三十日	五四六	—	三七九(半)	一九	三一五	二五	信濃 俊明社 / 同 日本白	□□	八五五 / 八五〇	前擬同様新規手合皆無にて面白からざる風情なりし
合計	一六,六三九(半)	四,九四六(半)	一六,七一八(半)	四四六(半)	九,四四三 玉絲二五(半)	二,三三二(半)				

倘本年四月中の生絲集散の狀況を示し、且つ四月末に於ける統計と前年の夫れとを對照すれば左の如くである。

▲は減じた印×印は增した印

年次	持越	入荷	賣了	積戻	繰越	輸出數量	輸出價格
四十三年一月	四二,八〇六	一四,〇四五	一八,〇四五	一,六四九	三五,二三九	一〇,九四〇	九,五三二,四〇九
同 年二月	三五,二三八	一七,七九〇	二三,一八〇(半)	一,八五八	二八,八九〇(半)	七,三五七	六,九四四,八二八
同 年三月	二八,八九〇(半)	一四,八四五(半)	一五,三〇九	[illegible]	二五,二四七(半)	七,二五〇	七,四四六,七四五
同 年四月	二四,九二八	一六,六九八	一六,七二八	三,四四四	二三,四〇六(半)	九,四四〇	
計		四三,四五〇(半)	六七,二六八(半)	九,〇〇一(半)		四七,七四七(半)	
四十二年四月		三二,二三三	六五,〇九五(半)	七,一〇一		四五,二三六	
比較		×一〇,四二四	▲一,八三〇(半)	×一,八九九(半)		×[illegible]	

紐育市場

紐育市に於ける生絲市況に就き同地駐在水野總領事よりの電報左の如し。

生絲市況「リボン」製造家及機屋側の需要多かりしため相場上値「エキストラ」三六七乃至三、七〇信州「エキストラ」三、六五(四月十二日發電)

生絲市況引續き需要多く強氣關西「エキストラ」三・六七、三・七〇信州「エキストラ」三・六五(四月十九日發電)

生絲市況靜關西「エキストラ」三・六〇、三六五信州「エキストラ」三六〇(四月二十六日發電)

生絲市況靜、相場保合(五月三日發電)

里昂市場

里昂生絲市況に就き同地駐在木島副領事よりの電報左の如し。

生絲相應に小口商ひあり強含み一番半器械絲九乃至十一アニール相場四十三位見當同同十三乃至十五アニール相場三十九法七五見當毀半絲五法乃至八法半生皮苧二法乃至六法半羽二重沈靜相場堅し越前物尺五六寸相場四十法半見當(四月六日發電)

生絲活氣を呈し來れり一番半器械絲九乃至十一アニール相場四十三法半見當同同十三乃至十五アニール相場四十法見當(四月十三日發電)

生絲氣配は思しからざるも昇天祭前か活氣少し一番半機械絲九乃至十一「アニール」相場四十三法見當一番半機械絲十三乃至十五「アニール」相場三十九法二五見當

廣東市場 (自三月五日 至同月十八日)

(四十三年三月二十一日附在廣東帝國總領事館報告)

本年三月五日より同十八日に至る二週間内に於ける當地生絲市況は前週に引續き歐洲に向き新注文に接せるを以て取引多く二週間内に約五千梱の商談行はれ價額も春作期により多少の不同はあれども平均一擔につき十五弗乃至二十五弗方引除れり米國向は之れが反對に稍〻下た押し氣味あり

米國向きは本國相場甚だ不定にして在荷は三四圓作製品多く爲めに六圓作製品に比し約二十弗の下値あり本期末に際しては市況稍〻沈靜の傾あれども製絲家側は尙ほ手堅く持合へり

爲替相場は倫敦宛六ヶ月拂一志九片八分の三巴里宛四ヶ月拂二法二十三參を以て本期末日を結べり

紫藤理事の渡淸

生絲檢査所長紫藤章氏には昨秋渡米實業團の一行と共に歐米に於ける實業を視察し殊に紐育に於ける絹業に就ては詳細なる調査を遂げられ本誌は絡續之を掲載し讀者に紹介しつゝあることとなるが今回又淸國の蠶業視察を命ぜられ去八日横濱解纜の博愛丸にて渡淸せられたり吾人は氏が長途の旅行に於て恙なく其任務を果し歸朝せられんことを切に祈る者なり

全國蠶種貯藏風穴調査概要

農商務省調査

現今に於ける蠶種貯藏風穴(雪圍、冷藏庫を含む)は東京府外三十二府縣に亘り其數二百四十四ヶ所に上り此處に貯藏し得る蠶種は無慮千餘萬枚に達す

之を明治三十九年の調査に比較するに風穴數に於て百二十七ヶ所を增し其各年の蠶種貯藏高は

明治三十九年 一,〇九二,四九八枚
同 四十年 二,〇〇五,六四四
同 四十一年 三,〇九三,五一八
同 四十二年 三,六九四,八二三

にして明治四十二年の貯藏高は同三十九年の貯藏高に比し實に二倍三割八分の增加なり、又風穴一ヶ所當り平均貯藏高を見るに明治三十九年は九千三百三十八枚なるに明治四十二年は一萬五千六十五枚に上り其差五千七百二十七枚(即ち三十九年の六割餘に當る)なり亦以て風穴蠶種の趨勢をトするを得べし

風穴數に於て貯藏高に於て最も多きは長野縣にして長崎、山梨、岐阜、山形は各〻十個以上の風穴數を有し此他の府縣は皆十個以下とす而して兵庫及石川に於ては目下工事中の風穴各〻一ヶ所を有す

各風穴に關する詳細は別表の如し

風穴調査

	風穴數		蠶種貯藏高			
	明治三十九年調査	同四十二年調査	明治三十九年	明治四十年	明治四十一年	明治四十二年
北海道	—	—	—	—	—	—
東京	—	一	—	—	[illegible]	[illegible]
京都	—	一	—	[illegible]	[illegible]	未詳
大阪	—	—	—	—	—	—
神奈川	—	—	—	—	—	—
兵庫	一	—	八〇〇	—	—	—
長崎	九	二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
新潟	—	五	—	—	—	[illegible]
埼玉	—	五	—	[illegible]	一六	一、四九〇
群馬	五	七	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
千葉	—	—	—	—	—	—
茨城	—	—	—	—	—	—
栃木	—	—	—	—	—	—
奈良	一	五	六、〇〇〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]
三重	—	一	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]
愛知	—	一	—	—	—	[illegible]
静岡	五	二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
山梨	四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
滋賀	—	一	—	—	[illegible]	[illegible]
岐阜	二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長野	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
宮城	五	五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
福島	三	九	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
岩手	—	一	—	一、一〇〇	[illegible]	[illegible]
青森	—	—	—	—	—	—
山形	六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
秋田	—	一	—	—	—	[illegible]
福井	—	二	—	一、八〇〇	[illegible]	[illegible]
石川	—	—	—	—	—	—
富山	—	二	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]
鳥取	—	五	—	一、〇〇〇	[illegible]	[illegible]
島根	五	五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
岡山	—	一	—	—	[illegible]	[illegible]
廣島	—	一	—	八〇〇	[illegible]	[illegible]
山口	—	一	—	—	—	—
和歌山	—	五	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]
徳島	—	[illegible]	—	一、〇〇〇	[illegible]	[illegible]
香川	—	—	—	—	—	—
愛媛	五	四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
高知	四	五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
福岡	—	—	—	—	—	—
大分	四	一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
佐賀	—	—	—	—	—	—
熊本	—	—	—	—	—	—
宮崎	一	一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
鹿兒島	—	—	—	—	—	—
沖繩	—	—	—	—	—	—
計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

秋蠶整理論　全　高橋信貞著

秋蠶奨勵は既に過渡の時代に屬して今や大に之が整理を要するの秋なりとの議論あるに當り横濱原商店の顧問たる高橋氏が秋蠶整理論を時事新報紙上に公表して一大警告を與へられたことは世人の普く知る處であるが本書は之に修正増補を加へたものである著者の卓見は全文に溢れて眞に敬服に堪へぬ况て夏秋蠶に熱心する者は是非一讀せねばならぬと思ふ(定價十五錢發行所東京市神田區美土代町三の一明文堂)

消毒器及其他の件に就き質問

茨城縣特別會員　小室孫左衛門

(一)フォルマリン瓦斯蒸發器の代りに普通のコンロに鍍鍋又は瀬戸引鍋を使用しては如何でせうか。

(二)横八尺竪拾尺高六尺の土藏がある、蠶箔蠶網等を棚に差して此土藏中に入れフォルマリン液體消毒を行ふにはフォルマリン水二倍を加へたるもの何合位あつたら宜いでしやうか。

答　學藝委員　土屋泰

一、フォルマリン蒸發消毒を行ふに鍍鍋又は瀬戸引鍋を用ふるも消毒の効力に差異はないけれども消毒執行上困難であるから普通の蒸發器を用ゐ消毒室外より「フォルマリン」蒸氣を送入する裝置に依るが可い。

一、フォルマリンの分量は消毒室の容積と收容する蠶具類の數量とに依り定むべきものである質問の消毒室は其容積四百八十立方尺であるやうだから是に架を構へ十段を設け一段に籠二枚蠶箔網各四枚つゝを挿入するとせば籠は約百二十枚蠶網は各二百四十枚を收容し得らるゝて是に對するフォルマリンは三五%なれば原液約二合二勺に水三合位を加へ蒸發したならば適當であらう。

催青器及蠶病の件に就き質問

埼玉縣通常會員　小山伴七

[illegible]青器の發明があつて之が販賣の廣告を見るに其構造各々多少の差異があるし又價格も甚だ貴いものがあるやうですが要するに價廉であつて其構造が比較的堅牢で而も蠶卵の生理を害せず適宜の温濕度を調節するに便であつて能く催青孵化せしめ得る卽ち合理的の其器は何人の發明であつて何處の商店に販賣し居るでせうか。

二、蠶室蠶具の簡便消毒法を伺度い但し噴霧器の良好なるものは何式でせうか伺度い。

三、此所二三年劇甚なる空頭病蠶が發生して年々蹉蠶を來りますが一體此蠶病には細菌的と生理的との二種ある様に學者の著書に見ゆるが其根本的驅除豫防法を伺度い。

答　學藝委員　土屋泰

一、蠶種催青器には種々様式の異つたものもあるけれども、未だ完全にして實用に適するものゝあるを知らない元來小規模なる催青器は温度の昇降が急劇であるから使用中細心注意せなければ危險を招くことがある要するに學校試驗場等に於て小數なる試驗蠶種の催青には便利であるが一般養蠶家の使用に適せないから寧ろ共同して普通蠶室に於て行ふが安全である。

二、蠶室を消毒するにはフォルマリン撒布法を便とする噴霧器は河村式百木式等適當であらう蠶具消毒は蒸汽消毒法又はフォルマリン撒布に依るが輕便である。

三、多くの蠶病は蠶兒が生理上の障碍に因りて衰弱せる場合に乘じ病原體の侵害を蒙り發病するものである而して病原體は野外より來ることがあるから單に蠶室蠶具類の消毒法を嚴密に行つても是を以て蠶病を防ぐことは難い要は常に蠶の生理衛生を完全に保護し蠶兒をして健全に發育せしめ病原體に對する抵抗力を旺盛ならしむるのが必要である。

春蠶種人工越冬法に就き質問

千葉縣通常會員　小川豊吉

春蠶種を春期製造の後冷藏庫に貯藏し發生させんとするには春期製造後何日頃を經て貯藏し三十七八度の冷藏庫へ何日位貯藏して發生するでせうか。

一化性蠶種の人工孵化法如何。

答　孵化後第五六日を經て略孵化蟻卵が固有の色澤を呈したる後四十度前後の冷所に貯ふこと七十日乃至八十日にて取り出すときは約七八割の蟻卵に孵化するから個々に取り出してより約二週日を經て發生を始むるけれども完全に發生に不齊であつて概ね一週日位に亘るのである。

軟化病に就き質問　新潟縣　通常會員　小針祐藏

蠶兒飼育中五齡蠶實測に當つて前夜活潑潑壯に食桑した蠶兒が翌朝に至り多數蠶筵の内で室内空氣の流通良否の所為か得たず或は一所乃至二所乃至三にして少しも食桑せぬ蠶兒を見受くることがある者に單食飲料に侵されたものであるやうですが之れが豫防の良法及原因等を詳細に示教ありたい尤も之れ軟蠶に最も多く見受るのである。

答　學藝委員　土屋泰

質問の如き被害に往々聞く處であるけれども其原因は詳かでない然れども多くの事實の綜合して考ふる蠶室の大さに對し比較的多數の蠶兒を飼育又は氣通不分なる蠶室若くは給桑量多きに過ぐる場合に於て多く認むる被害である故に氣通の不良なること其主要なる原因であると信ずられる是から見て飼育室には適當なる換氣を施して室内空氣を換氣の行はるゝやうにし且蠶室の間隔を成るべく廣くし又一回に多量の桑を與へず夜間と晴間戸を全く閉ちて氣通を防ぐことのない樣に注意するの外なかろう。

桑器械に就き質問　千葉縣　通常會員　島田榮助

現今蚕器械の最も精巧であつて最も實用に適するものは如何なるものですか製造販賣所を教へ願ひたい。

答　學藝委員　土屋泰

塚玉地方で代價豊拾圓位で順る精巧のものがあるとの事だが右は全く實用に適するのです。

問　學藝委員　土屋泰

刺桑器國は種々あれども實用上恰適のものの少ないのは知らない然乍長野縣上伊那郡下伊那郡市田村八百一四番地木村竹次郎外一名の出品に係る桑葉刺器と稱する物有望と認めた塚玉地方に行はるゝ代價豊拾圓位のものは如何なる樣式であるか又實用上の効果如何を知らない。

催青器に就き質問　新潟縣　通常會員　高津善三

私は本年より養蠶業に從事する者で有りますが最も經費簡單なる蠶種催青器（爭有なれば六七枚程）の構造方を乞て御教示下さい。

答　學藝委員　土屋泰

蠶種を催青するに小規模なる催青器を用ふるは和屋のやうに考ふる者もあるけれども其實は最も危險多い譯も温度の昇降が急劇であるから故に共同して帶造蠶室に於て行ふが最上策とする者と義蠶家最密に少くして共同の組織なる場合に於ては蠶種催青器を利用するに便利であつて比較的保温に都合の宜い室を選み體を設けて催青室に充つるが安全である。

紅色卵に就ての質問　長野縣　通常會員　原湖常松

私は蠶種業家に對し作入れた蠶種樣製品を檢査しましたところが一枚の内に紅色を基したもの計二枚ありましたと之に無帶の證印にありますが實際病毒はないですからまた飼育の成績は如何でせうか。

答　學藝委員　土屋泰

質問の如き卵に往々見受くるものであるが紅色を基する原因は詳かでない然れども微粒子病發生の場合ないことは明かなれども右の如き蠶種を區別して飼育するに成績は常に良くないから之を除去するが良い。

ハーレー彗星に就き質問　兵庫縣　通常會員　西村彌一

頃日新聞紙の報ずる處に依れば來る四月中旬より「ハレー」彗星は太陽に近づき來り五月廿日頃位迄赤道の三四齡頃地球に最も近づき地球は該彗星尾の衝突を受けるとのことであり果して然らば當時の氣候には如何なる變化を及ぼすやそして又此氣候變化の春蠶飼育上に及ぼす影響に如何ですか。

答　農學博士　稲垣乙丙

ハレー彗星のことは後刻の學問の進歩に俟ちて研究したいと思ひます。

會務錄事

福岡支會發會式並九州沖縄大會

蠶絲業者を以て充されたる　鎮西の大都

本會は明治四十年紫綬褒章以下の一行は福岡支會發會式並に九州沖縄大會に臨席の爲三月三十一日三重を發して四月二日福岡に安着し前日來の小雨尚晴霽なりして寒氣を感ず。福岡市は人口八萬一千餘人にして商工業頗る盛んなり、而かも此地や彼の博多港と合して頗る史蹟に富み、神功皇后此地に征韓の大義を發し給ひ、三韓亦此地に朝貢し、後太宰府を設け文政を張り鴻臚館の北館を置き、外交の實を擧げ、文永、弘安の元寇亦鼓に到れるが如き東西を指せば終日にして盡さるべし、而して今や鎮西の名都として九州の殷賑を其一身に收む。時に福岡縣主催九州及沖繩聯合共進會の開かるゝあり、此地に集り來る者皆之れ一意國產の隆昌に盡すもの式に列するとは曾て之れ蠶絲業の爲に刻苦せらるゝの人、福者は安着の夕旅宿の階上に此等の人々の繰るが如きを見て思はず獨語せり鎮西の蠶業前途其た多望なりと。

式場の光景

明くれは四月三日、前日氣道ひし雨霽れて風靜なり、會場たる縣公會堂は内外共に美々しく裝飾せられ、各員部署に就きて來會者を待つ、來り會するもの續々として絶えず部員の繁忙殆ど言語に絶せり、此の如きを以て定刻前既に場内黑子の地を餘さざるの盛況を呈せり。

定刻午前十一時となるや第一振鈴にて會員一同着席、第二振鈴にて來賓着席、折柄文會副會長登壇して支會發會式の擧行を宣し、次で幣帛理事は登壇し、本會總裁伏見宮殿下の本會事業に對し御熱心なるは實に有難きことにして申迄もなきことなるが、殿下には此度御渡英の途次名古屋に於て開きたる總會に台臨遊ばされ、親しく令旨を賜るの榮を得たるは恐多きことにして今次日の發會式に際し、恭き令旨を賜りたり」と述べて左の令旨を捧讀したり。

令旨

夫れ我蠶絲は内農家の經濟を扶け外貿易品中の主脳にして國運の發展に資する所尠からず

と雖も尚改善進歩の餘地綽々たるものありて存せり諸子茲に見る所あり大日本蠶絲會福岡支會を創立し本日發會式を擧げ併せて大日本蠶絲會九州沖縄大會を催し大に斯業の爲に畫策せんとす是れ洵に機宜に適したるの措置にして眞愛の深く喜ぶ所なり惟ふに近年蠶絲の價格低廉に失し當業者の苦痛尠少ならざるものありと雖も今や經濟界の暗雲漸く消散して將に順境に向はんとするものあり諸子暫く忍耐自重して更に其技を練り其術を鍛へ以て益々本邦蠶絲の聲價を發揚し國家經濟に裨補せんことを期せよ

大日本蠶絲會總裁大勳位功二級　**貞愛親王**

寒斧文

右令旨に對し折原支會副會長は寺原支會長に代りて左の奉答文を朗讀したり。

本日茲に大日本蠶絲會福岡支會發會式幷に九州沖縄大會を擧ぐるに際し特に優渥なる令旨を賜ふ會員の光榮何物か之に如かん

由來九州沖縄の地たる氣候土質共に自然の天惠に富み斯業の發展に於て存立すべき其産額未だ能多ならざるは遺憾とする所なり殊に我福岡縣は幾多工業の隆盛なるありて其産額僅かに八千石内外なり雖も近年該般奬勵の施設をなし品質の改善收穫の豐饒に於て著しき進歩をなし今や支會發會式幷に九州沖縄大會を擧げ之より大に飛躍を試みんとするに際し　殿下特に令諭を下して督勵あらせらるゝ向に感激措く能はざるなり長輝不敏と雖も會員と共に益々奮勵斯業の改善を圖り以て台慮に副はんことを誓ふ謹て答辭を奉る

明治四十三年四月三日

大日本蠶絲會福岡支會長從三位勲二等　寺原長輝

夫より片田幹事長は會務の報告をなしたるが、右終て吉池理事は蠶業上の功勞者に對し有功賞授與の稟請をなし、紫藤理事は殿下より賜りたる有功章を左の十一氏に渡されたり。

二等有功者　寺原長輝　三等同　折原己一郎　加納隆

四等同　片田豐太郎　同　廣辻信次郎

五等同　高瀬重太郎　同　古川芳介

同　新納久　同　滝磯之助

同　矢野一郎　同　納富輝太郎

同　水見徳五郎　同　納富輝太郎

右終りて吉池理事は松平會頭の告辭を代讀したり。

告辭

大日本蠶絲會福岡支會は其組織完了を告げ茲に本日の佳辰を卜し發會の式を挙げ併せて九州沖縄大會を開かる斯業の爲め慶賀の至りに禁へざるなり夫れ我蠶絲は近年經濟界不振の餘波を受け其價格低廉に失し爲に蠶絲の販路閉塞せるものなきかを疑はしむると雖も昨四十二年の輸出總額は

一億二千萬圓を算し生絲貿易開始出來未曾有の巨額に達したり是れ蹤に我蠶絲需要增加の一證と爲すを得べし殊に項日内外の財界漸く順調に向んとするものあり絲價の挽回を見る亦遠きにあらざるべし當業者徒に斯業の前途を悲觀し惡思悪稿すべきにあらざるなり惟ふに本邦の氣候風土は善く蠶絲の業に適し九州の地亦之が生産力の餘裕綽々たるものあり有すれば共同經營の方法を講じ製品の改良を促すと共に大に産額の增加を圖るは會員諸君の責任にして又刻下の急務たるを信ずるなり此秋に際し福岡支會の完成と九州大會の開催とを見る是に是れ好個の處置たるなからんや之に依りて斯業が將來一段の發展を爲すべきは敢て疑を容れざる所にして正直の衷心敬意を表する所以亦實に茲に存せり會員諸君宜しく勵精以て斯業の根底を固くし一致團結の實を擧げ斯業の改良發達に資し益々九州蠶絲業の名聲を發揚せられんことを望む

次で大日本蠶絲會々頭正三位勲一等男爵松平正直の祝賀蠶絲課長は左の如く小松原臨時農商務大臣の告辭を代讀したり。

告辭

茲に大日本蠶絲會福岡支會發會式幷に九州沖縄大會を擧行するに際し一言以て會員諸子に告げんとす抑も蠶絲は我國重要の物産にして亦實に貿易品中の巨擘たり是を以て益々斯業を奬勵しそれが改良發達を圖る國運の發展に最も緊要のことに屬す由來九州及沖縄の蠶絲業は其起源頗る遠しと雖も發達遅々として尚他の諸産業に比し遜色あるを免れず是れ當業者諸子の苟且偸安を許さざる所なり此狀勢に鑑み大日本蠶絲會は茲に九州沖縄大會を開催し加ふるに當縣有志者相謀り福岡支會を設立して斯業の發展を期せんとす洵に時宜を得たる舉と謂ふべし望むらくは爾今會員諸子協心戮力して以て豫期の目的を貫徹することに努められんことを

明治四十三年四月三日　農商務大臣　小松原英太郎

次に安達縣令は本縣を除は本縣總代として祝辭を朗讀し、古川芳介氏は有功賞受領者總代として答辭を讀み是にて全く式を終り折原支會副會長閉會の辭を陳告して無事閉會したり。

九州沖縄大會並講演

福岡支會發會式閉會と共に引續き開會、西南方の蠶業を開拓して以て國運の隆盛を全うせんとして刈せる憂國の士男女會員無慮一千有餘、大石琢磨氏を座長に推して勇頭左の提案を討議せり。

福岡支會提案

一、繭價の騰一を圖るは目下の急務と認むるに依り直に之れが實行に着手せられんことを其筋に建議すること

一、國費を以て九州蠶絲教育機關を設置せられんことを其筋へ建議すること

大分支會提案

一、九州各縣の蠶絲會支會聯合繭品評會を隔年輪番を以て開催すること

右提案に關しては佐賀、福岡、長崎より多少の質問出て提出

者及吉池理事の説明あり、前二案に就ては原案の如く可決し第三案の費用及方法に就ては福岡支會に於て其體の方法を講じ時機を計りて協定することゝし、議場一致を以て可決し茲に討議を終り、一同に折詰弁當及渡邊沿兵衛氏の寄贈に係る記念品を配布したり、午後一時より蠶業に關する講演を開催し、加納福岡縣技師の紹介により川島京都蠶業講習所技師、柴田生絲檢査所長、芳賀農商務省蠶絲課長相繼て講話し午後五時無事閉會したり。

右終て六時より來賓に洋食の饗應あり、主客陶然として且つ談じ且つ酌り歓を盡くして散會せり。

三重支會第九回總會

春陽三月十九日大日本蠶絲會三重支會第九回總會は三重縣會議事堂に開催せらる、午前九時振鈴會員席定まるや、支會長左の式辞を朗讀せられたり。

式辞

大日本蠶絲會三重支會總會を開くに當り會員諸氏に望む所あらんとす回顧すれば當支會は明治三十二年の創立にて爾来茲ぬる十一歳會を開設すること九回に及べり蠶支會の設立としては各府縣中最も早く開設せり而して各縣に從年蠶絲業の發達に伴ひ我ふて支會を設立し會員數を增加し第今五百有餘名に過ぎず隆て未だ見るべき事業を經營する能はざるは其に遺憾とする所なり果しり會員數の多少以て其會の盛衰を卜するは種當ならずと雖も縣下唯一の蠶絲業團體にして其會員は今會當業者數の千分の三十六に過ぎず之も我內の當業者が制藍し一大團體を組織し以て所業の改良發達上時世相當の計畫を爲さゝるべからず諸會員諸君此意を體し益々奮勵ちらんことを

明治四十三年三月二十九日　三重支會長　有田義資

次て文部省蠶業の經營に關し多年蠶業の結果施設しきを得其基礎鞏固にして收益上見るべきものあるを以て功績を表彰す

明治四十三年三月二十九日

大日本蠶絲會三重支會長知事正四位勳三等　有田義資

次て高島同村農會長川島勝次郎あり、立野幹事長開會を告ぐ午前十時引續き同縣蠶絲業會員開催知事の諮告左の如し。

諮告

本日三重縣蠶絲業會の開催し風夜蠶絲業の發に資獻しつゝある諸子と相會し益に觀る數無の將來に顧し收良後後の策を講ずるの機會を得たるは本官の深く喜ぶ所なり

抑々本縣の蠶絲業は既往著しく發展の跡を顧にし產額品質共に見るべきものなきにあらずと雖も顧みて此來各國團業の思惟に照みるときは尚未だ改善を要するの點尠しとせず宜しく生產額の增加に勉むると同時に生產費を節減して精品を隆盛に供給するの必須為すべきより是一に諸子の研究力に待ただるべからず驚くは今回協議の事項に就き熱心議論を遂げ農業副業として適應の施設を爲し專ら蚕繭の經營と蠶室の統一とを完成し精巧の生絲を製成して益々國益の擴張を計り以て國家の進歩に資せんことを望む

三重縣知事正四位勳三等　有田義資

次て左の問題を討議したり。

一、自今三ヶ年以內を期し蚕種改良繭換及整理の方法

二、明治五十年を期し各員家なして平均三石以上の蠶繭を生產せしむる方法

三、繭質統一を完成する方法

四、製絲業の振興を計る方法

以上討論の末右相托となり委員は左の若中からなり

第一、第二、第三、第四項しては

一、町村毎に蚕種組合を設け每年蚕種の實績を調査すること

一、組合は蚕種改良の調査し整理順序及年限を定むること

一、組合は蚕業者の自個を設け實績有を答すること

一、組合員の飼育する蠶種は本縣蠶種系統のものに限ること

一、組合員は適宜地區を定め種蠶共同飼育を答すること

一、組合は各員家なして明治五十年から到し每戶平均二石以上の蠶繭を生產せしむべき計畫を立てしむること

一、蠶業に要する肥料器具は共同購入なし其生產品は共同販賣なすこと

右の目的を達せしむる爲縣は相當補助金を交付し模範規約を制定し郡市長を此四項に對しては

一、共同飼育場、共同繭乾燥場等を設置し且て生產品の整頓と生產費の節減を圖ること

一、殺蛹乾燥の方法を改善すること

一、製絲工女の養成を圖ること

以上は縣組織の外に組合に勧奨されたること

午前十一時三十分閉會畫祭後午後零時三十分講話會を開く

講師及演題左の如し。

一千年前の伊勢國の蠶絲業　林東京蠶業講習所技師

蠶業の統一に就て　紫藤生絲檢査所長

所感　石渡京都蠶業講習所長

當日は降雨甚しく、來會者百六十餘名に過ぎざりしも、屆出の當業者の外に講師の熱心は深く當業者を感動せしめ、神妙起聽なからざりき、終て立野幹事長閉會を告ぐ時に午後五時なりき。

吉池本會理事

支會職員の囑託

本會靜岡、福島、常山の三支會幹事長無任所なりたるに付德島支會副會長幹事長と共に其支會長の推薦に依り

靜岡支會幹事長　鈴木源八

福島支會幹事長　井口幹夫

常山支會幹事長　土居伊太郎

德島支會副會長　堀內勝太郎　幹事長　川入典次郎

埼玉支會副會長　萩父　戸田五郎彦　北嶋鈴　武田熊藏

信濃支會委員長　南牧久　岩井市三郎　北佐久　本山純信　上高井　中田慶次郎

德島支會委員　平尾義平　宇山久太郎　須見千次郎　後藤田德三郎　割石清

勅　小崎芳雲　小口泰太　福田清平　大平佐次郎　小笠原勝太郎　福永文夫

郡　森重信　岩城伊平　河井英代吉　掛澤作太郎　小田耕介　梅本正衛　山

內敬行　鈴木敏夫

地方委員部職員の囑託

今回徳島縣地方委員部委員長中島勝の辭任に付地方委員長の推薦に依り本會々頭より左の通囑託せられたり

廣島地方委員部支部長　山縣　坂本忠親　佐伯　山根　勝　深安　吉田弘藏

甲賀　田原藏　西島　小林正藏　比良　荒木　善　安藤　古玉寿太郎　豐

田　島田勇一　廣島　洪逸　又三郎

特別會員の撰擧

左記は本會々務に盡賞せられたるの功勞顯著なるを以て今回特別會員に推撰せられたり。

福島　橋　正德

日白常設博覽會へ本邦製絲の出品

本會は嚴に日英博覽會開設に對し本邦蠶生絲の出品勧誘に從事方を委囑せられ日已に發送せしが今又白耳義國先皇帝陛下の思召に依り日白兩國間の貿易品たる

べき農工及美術生產物の常設博覽會を同國首府ブラッセル近傍ライケン御苑內日本塔に設置する趣を以て過般我が農商務省に其出陳方を交涉致し來りたる由にて同省は本會に對し蠶絲の出品勸誘並に取纏め方を委囑せられたるが右は日白の交誼を厚ふし且つ貿易發展上に資する處大なるものあるのみならず同國は歐州諸大國の間に介在し來往の衝に當るを以て本邦品を歐州人に紹介するは洵に好適の地位を有し殊に此計畫たる同國皇帝陛下の思召に出で既に勅令を以て發表せられ御苑內に於ける日本式の日本塔を其陳列館に充つるものなれば衆人の注目を牽くこと特に深かるべく加之本年五月より同國首府ブラッセル市に於て萬國博覽會の開設あり恰かも之と其開期を同ふせしむるの趣なるを以て本邦品紹介上實に得難きの好時期なりと信じ本會にては左記二十五ヶ所を撰定して其製品を取り纏め荷造の上今回同國に向け輸送を了せり

日白常設博覽會生絲出品者氏名

京都 郡是製絲株式會社 埼玉 埼玉製絲株式會社
群馬 碓氷社 甘樂社 交水社 三重 伊藤小左衛門
愛知 三龍社 山嘉 矢島榮助
長野 片倉組 尾澤組 六工社 俊明合資會社 東行合資會社 依田社 純水館 岡谷製絲合資會社 福島 雙松館 宮城 白石製絲機業株式會社
山形 長谷川製絲所 多勢龜五郎 鳥取 山陰製絲株式會社
愛媛 河野合名會社 熊本 肥後製絲株式會社 熊本製絲株式會社(以上生絲)
愛知 三遠玉絲製造同業組合(以上玉絲)

本會職員の出張

本會主事には長野縣純水館二十年記念會及同製絲同業組合總會に臨席の爲四月二十二日出張同二十六日歸京せり

本會紫藤理事には清國に於ける蠶絲業の視察を命ぜられ本月八日出發上海揚子江沿岸に於ける斯業の狀況を視南京博覽會を見物の上約三ヶ月を經て歸朝の筈なり

屑繭整理講習會

大日本蠶絲會高知支會の主催を以て高岡町に於て三月十日より開會中なりし屑繭整理講習會は開講以來受講者日々一百五六十名の多きに上り頗る盛況を呈したるが去三月二十三日を以て全く終了となりたるにより二十四日同町尋常小學校內に於て之が修得證書授與式を擧行せり當日參觀者等亦頗る多く午後三時開式大塚縣技師は支會長代理として式辭を朗讀し次に支會幹事長より講習成績の報告あり之れより講習生に對し修得證書の授與をなし次に講師吉永信子は起つて告別の辭に併せて講習生今後の心得につき最も懇到なる諭示を述べ次に來賓翠月縣技師、芙木縣蠶絲同業組合副組長、正岡縣農會幹事、市原高岡町長、佐野縣會議員市原土佐蠶絲業同志會理事等の祝詞演說あり之れにて式を終り校外に於て記念のため一同撮影をなし散會せるは午後五時過ぎなりし

蠶桑雜觀

●**東宮御所の御養蠶** 青山なる東宮御所に於ては年々 妃殿下親しく御養蠶遊ばされて下民に其模範を示めさせ給ふあるよしなるが、本春も亦有泉善三氏主任の下に本月一日より八日までの間に蟻量十七匁を御掃立遊ばされたりといふ

●**生絲同業組合聯合會** 長野縣生絲同業組合聯合會は去月二十四日縣會議事堂に於て總會を開き本年の生繭運搬に付鐵道院に向て生繭專用貨車を例年より多く配置せられ專用貨車は信越線以外中央支線にて配置し尙之が檢査を行ひ腐敗其他の損害を與へざる樣注意せられんことを建議することに決したりと云ふ

●**輸出生絲の化學試驗** 生絲檢査所に於ける輸出生絲の檢査は從來機械上の檢査のみに止まりたるも更に化學的試驗を行ふの必要を認め、總同所內に之を設くることゝなり目下其準備中なりと

●**原富岡製絲所の新計畫** 群馬縣北甘樂郡富岡町なる原富岡製絲所にては、蠶界の大問題たる繭質統一の遂行に就き、春來幾多の積極的施設を爲しつゝありたるが、養蠶製種製絲の三者互に其步調を一にするにあらざれば到底大問題の解決を爲すこと能はずとし角田縣合組合長町田高山社長遠藤競進社長初め其他の有力者と熟議する處あり、其方法の一端として本年春蠶期より養蠶監督員を選定し先づ以て群馬埼玉兩縣下を巡廻せしめ 親しく養蠶家を歷訪して蠶況を視察し更に飼育上の意見を互に交換せしむといふ而して今春監督巡回員に撰任せられたるは町田龜吉小泉信太郎折茂純一成川信平加茂下小六鈴木春信の六氏にして之が總監督は高山武十郎木村九藏の二氏なりといふ

●**桑赤澁病の發生** 三重縣知事より農商務省への報告に依れば同縣飯南郡の漕西郡村牧殿淺見の四ヶ所の桑園七十五町步桑赤澁病及金紋蟖の害蟲發生し、其被害一割餘に及びたりといふ

●**純水館二十週年記念祝典** 去四月二十三日長野縣小諸町純水館は創立二十週年の記念祝典を擧行したり、當日の來賓は下岡農務局長長野縣知事代理力石事務官、隈部陸軍少將、紫藤生絲檢査所長吉池本會々頭代理、本山北佐久郡長其他百五十餘名にして、午前七時理事長小山久左衛門同理事小山清右衛門同平村晉次郎の三氏へ感謝狀及金銀盃贈與式を執行し、同十時同館模範場樓上に於て記念祝典式を擧げ工男七十六人及工女千七人へ記念品を贈與し式後同運槽に於て夜會の催し及煙火角力芝居落語等の餘興ありたり一般の工男女には二十三二十四日の兩日に渡りて交代に高砂座の觀劇を爲さしめたりといふ而して小山理事長の式辭及松平會頭の祝辭は左の如し。

式辭

純水館二十周年記念の典を擧ぐるに當り茲に顯官紳縉各位の臨場を辱ふす本館の光榮何ものか之れに若かんや

回顧すれば明治四年實業界の元勳速水堅曹男爵閣下瑞西留學中本邦製絲の有望なるを認められ歸來上州富岡に模範工場を起し以て斯業を獎勵せらるゝに當り彈郡小縣は蠶種、本郡は產繭の適地と認められ即ち當時の素封家高橋平四郎氏に富岡製絲原料買入御用係を托せられたり爾來地方の蠶業は著しく發達し產額累歲增加するを得たり茲に於て同氏は斯業保係の急を悟り明治六年富岡式に則り自から製絲工場を起す之れを當地方製絲業の創始とす明治九年は財界顯潮春風の趣を呈し地方の商業又大に起らんとせるも明治十四年横濱貿易上生絲取引習慣の弊害多きを憂ひ全國同業者の決議に據り商權恢復の途を講じ一方同伸會社を起し政府保護の許に直輸出の議を畫す亡父久左衛門又社員の一人たり然るに搭禍其效を奏せず遂に內商の屈する處となり爲めに商機を逸し高橋氏の事業は徒に利權爭奪の犧牲となり遂に閉業の悲運に陷る之れ單に高橋氏の不幸に止まらず地方の產業は閉塞の運に拘はれ會々再興を企つるものあるも何れも中途にして倒るゝに至る然るに宇內の大勢は駸々乎として進步し文物日に新たなると同時に地方の形勢に非常なる變化を與へ寸時も惰眠を許さず明治二十三年信越線開通以來當町の如きは往時に比し却て不利の地となり安閑として舊慣を墨守するの秋にあらざるを認め即ち時世の進運と地方の狀況に鑑み製絲業有望なるを信じ明治二十二年頃ら其準據を爲し同二十三年開業せり

以上は余が本業經營の動機にして爾後各位の同情と社員の一致協力に依り幾多の困難を排し茲に無事二十周年を迎ふるを得たるは余の衷心より感謝する處なり終りに臨み本館が今日あるは直接現業に從事せられたる勤續事務員諸子の勞又多大なり本日記念式に臨場せられたる顯官縉紳各位の前に於て諸子を表彰するは蓋し得難き好機會たるを信ず諸氏又之れを榮とし爾後一層精勵せられんことを望む 以上

明治四十三年四月二十三日 純水館長 小山久左衛門

祝辭

惟ふに本邦の蠶絲業は幾從著大の發達を爲し其年額一億數千萬圓に上り國家經濟上稗益するところ尠小にあらずと雖も退て製絲業の狀態を顧みれば其經營組織未だ幼稚の域を脫せざるものありて常に違利の大なるものあるのみならず製絲場の興廢常なく終始一貫能く成功の彼岸に達するもの寥々晨星の如きは識者の竊歎措く能はざるところなり

此秋に際し純水館は創業以來二十周年祝賀の式典を擧行せらる斯界の慶事何物か之れに如かん抑も本館の創立は明治二十二年にして當時釜數百個に過ぎざりしも星霜茲に二十年を閲して其釜數八倍半の增加を爲し一年の生產額一千五百個餘を算へ價格又常に優位に座す孰れか夫れ此異數の發展を祝せざるものあらんや

實に是れ本館の經營組織其宜しきを得たるものあるに職由するは爭ふべからざるの事實なり又以て他の模範と爲すに足らん然れども館員諸氏今や本邦の蠶絲業は外伊佛清の勁敵を控へ內生產費の年一年に增加するありて之が經營容易ならざるものあり庶幾は今日の成功に安んぜず更に一層の奮鬪努力を以て他日の大成を期せられんことを正直本日の式典を聞知し欣躍の情に堪へず一言を叙して祝辭とす

明治四十三年四月三日

大日本蠶絲會々頭 男爵 松平正直

本年度の春蠶狀況

本會各地通信委員の報告を綜合すれば近年繭價不振に加ふるに昨年來米價下落の結果一般農家の經濟狀態は例年に比し圓滑ならざるを以て意氣消沈の姿なりしも近時漸く回復し本年度の春蠶には多大の注意を拂ひ之れに依て以て豫期の收入を得んと期待するものゝ如し、故に經濟不如意の中にありても施肥に怠らずと雖も例年に比すれば不充分の感あるを免れざるが如し而して本年度の春蠶は今日迄の經過に依れば三月以來の氣候寒冷なりしを以て桑葉の發芽は全國を通じて約四五日遲延せるも先月末日より本月初旬に至り氣溫急に上昇し來りしを以て頓に回復し地方に依りては例年と大差なき迄に發育進進せるものありと雖發芽當時より三四葉開くに至る迄の間發育遲々たりしを以て蠶兒の掃立も一般に之に遲れ二三日後れたりと雖も其發生は概して齊一に掃立數量は何れも多少の增加を示したるが如く掃立後の狀況も亦良好なる經過を示しつゝあるを以て今後甚だしき氣候の激變に遭遇することなくんば良好の結果を得るに庶幾からん今各府縣の報告を摘錄すれば左の如し

區	府縣名	桑葉發育の模樣	桑葉の價格	蠶兒掃立の狀況	掃立枚數	勞働賃銀
第一區	長崎	佳良	前年と大差なし	前年と大差なし	前年より二割增	男三十五錢 女二十錢
	福岡	其後發育良好	五齡取引一貫目五錢見當	發生齊一なり	前年より一割增	男八十錢 女四十錢以上
	大分	二三日遲れたるも目下の發育は頗る佳良	五齡刈桑一貫目六七錢見當	大多數の掃立は四月二十五六日にして發育良好なり	前年より一割增加	男二十錢より四十五錢 女二十錢より三十錢迄
	佐賀	發育佳良	一斤に付二錢唱ふ前年より一二厘方高	掃立は例年より二三日後れたるも發育良好		男四十錢見當 女三十錢
	熊本	近年に見ざる程發育良好なり	五齡取引一貫目七八錢	氣溫順にして發生齊一なれ共一枚より一匁三分乃至一匁八分の收繭あり	約二割增(二五〇〇)	男三十錢乃至四十錢 女二十錢乃至三十錢
	宮崎					
	鹿兒島					
第二區	德島	發育不良	五齡取引一貫目七錢	前年より二日後れ先月二十四五日掃立	約一割五步增	男四十錢 女三十五錢
	香川	發育遠進し而も良好にして例年と大差なきに至る	一齡一貫目一圓二十六錢二齡六十錢五齡七八錢	例年より二三日後れ先月末迄に掃立了る	昨年より一割增三千七百枚內外	男二十五錢乃至三十錢 女十五錢乃至二十錢
	愛媛	發育良好	五齡の豫約一貫目十一錢內外	例年より四五日後る發生發育共に異狀なし	一割增(二一、八六七)	男四十錢 女二十錢
	高知					
第三區	山口	佳良	多少安見込	早きは先月十五日遲きは本月十日に至る	一割增	男賄付三十錢乃至四十錢 女同十五錢乃至二十錢
	岡山	輕微の霜害を受けたるもさしたることなし				
	廣島	例年より二三日後れたるも發育良好	一齡桑一貫目八十錢	海岸通り掃立最中(五月三日)	前年より二割增	男四十錢 女二十五錢
	島根	發育上異なるなきも二三日後る	一齡用一貫目七十錢	昨年桑の缺乏を告げたると本年の伸長は充分ならざりしに依り掃立手控		男四十五錢 女三十錢
	鳥取	低溫の爲發育後る	五齡用桑十貫目一圓五十錢內外	前年より四五日後れ大多數は本月四五日掃立	大差なし(三萬一千三百餘枚)	男四十錢 女二十五錢
	兵庫	發育良好ならず	一齡一貫目七十八錢二齡四五十錢五齡十二錢	早掃は先月三十日後掃は本月四五日頃終る		男三十二錢 女二十五錢
	大阪					
	京都	發芽後生育後れたるも發育惡しきにあらず	稚蠶用一貫目一圓乃至一圓四五十錢なりしも霜害のため二圓を唱ふ	一兩日例年より後れ大多數は本月一日より三日迄に掃立	昨年と大差なし(五三六一三)	男三十五錢 女十五錢より二十五錢
	奈良	發育は例年と大差なしと雖も四五日後れ居れり	掃立桑は一貫目一圓內外五齡桑十四五錢	例年より四五日遲れ五月四五日頃迄に掃立を終る	增加の見込	男四十錢 女二十錢
	和歌山	發育佳良	蔓枝付一貫目七八錢	例年と大差なし	約一萬一千枚ならん	男四五十錢 女二三錢
第四區	滋賀	發育普通成育遲し	稚蠶桑枝付一貫目一圓四五錢	二化性は四月中に掃立てたるも普通は本月一二日頃	前年より二割增の見當	男四十錢 女三十錢
	三重	冷氣の爲發育を抑止せる傾あり三四日遲る	新梢一貫目十一二錢より十五錢迄	大多數先月中に掃立たり	一割增(四六三八七)	
	岐阜	近年見ざる良好の發育	二齡桑一貫目五十錢內外	五月一日前後大部分は掃立終る發生良好約一割收蟻增加す	一割增にて約十一萬枚掃立	男四十五錢 女三十錢
	愛知	發育良好尾州は一部に多少霜害あり	一圓に付五齡取引枝桑十二三貫	先月二十二三日頃より二十八九日迄に掃立終る	前年と大差なし	男五十錢 女三十五錢
	靜岡	發芽四五日後れたるも爾後速進し良好豐饒の見込	五齡豫約は一圓に付十貫內外なり	大部分四月二十五日頃に掃立を終れり發育良好早きは五齡に入る	前年に比し約五步增(七九五四二)	男四十錢より五十錢 女二十五錢より三十錢
	福井					
	石川					
	富山	晩霜害なく良好	安見込	例年より三四日遲る	二割增加の見込	男三十五錢 女二十五錢
第五區	長野	發育佳良四五日後る	五齡取引一貫目十六錢乃至二十錢	早口を掃立てたるに過ぎず		男四十錢女二十五錢前年に比し兩者共十錢安
	山梨	發芽後生育佳良且速進せり		掃立は四五日後れたれども發育良好なり		男三十錢より四十錢 女二十錢乃至二十五錢
	神奈川	發育良好にして蠶齡より進めり	五齡取引一駄一圓五六十錢	多少發生の不齊を見たるも經過良好		一ヶ月男十五圓より九圓迄 普通十二圓女九圓より六圓
	東京	發育良好なり但し山邊地方は多少晩霜被害あり		前年より二三日遲し本月五六日頃掃立盛なり		普通七圓助なし
	千葉	普通				男二十五錢女二十錢
	茨城		一駄一圓八十錢乃至三圓(五齡取引)	掃立多し		
	群馬	近年稀に見る良好の開綻なれども收葉多からざるべし	五齡取引一駄二圓五十錢乃至三圓の見込	集約的に向ひ多少掃立を手控へ必收を期せり發育良好		養蠶期中男十三圓女八九圓

栃木	結霜を免れたる地方は頗る良好なる發育	一齡用一貫目一圓內外	掃立二三日後るゝ前年と大差なからん	詳細知り難し	男四十錢女二十八錢
埼玉	發育遲々の感あり	種桑一駄三圓より三圓五十錢(五齡取引)	前年より二三日遲し本月三四日掃立		月極め男十一圓女七圓日雇男四十錢女二十五錢

	府縣名	春蠶に對する當業者の意氣込	桑園に對する施肥の模様	發芽の遲速開綻模様	桑葉先賣の有無	桑園の增減及其反別
第六區	新潟	不引立の姿なりしも漸次回復變りなし	施肥量充分ならず	四五日遲る	無し	
	福島	桑價不振の爲當業者の意氣消沈の姿なれども養蠶は農家唯一の產業なれば例年ゟ見て差支なし	金肥の使用は減少せり	例年より一二日遲れたるも一般に良好の開綻	無し	變りなし
	山形	意氣盛にして約一割の掃立を增すならん	例年と大差なし	例年より三四日遲る	壯蠶期の取引一貫目十錢乃至十八錢	約二百五十町歩の增加
	宮城	意氣盛なり	施肥の模様頗る良好なり	例年と大差なし	稚蠶用十貫三圓內外五齡用一圓三十錢	四十一年度に四百九十五町歩を增せり
	岩手	意氣盛にして飼育戸數掃立等增加の見込	施肥充分ならざる感あり	例年より五六日遲る	五齡取引一貫十錢內外山桑七八錢	增殖反別約一千五百町歩
	秋田	意氣消沈の姿なれども養蠶戸數增加せるにより掃立增す	單獨の桑園少きを以て施肥量は變りなし	例年より一週日乃至十日遲る	無し	四十二年五月迄に增殖せるもの約二百九十町歩
	青森					
	北海道					

結霜被害 一、四月三十日東京府下に結霜ありしも輕微にして山間地方に約一割內外の被害を見るに過ぎず

一、五月四日群馬縣下に於る結霜被害程度の激甚なりし地方の調査に依れば群馬郡の六割七分強、佐波郡の五割三分、勢多郡の四割強、碓氷郡の二割弱等にして他は尙調査中に屬すれとも被害區域廣大ならず程度甚しからざりしは幸なり

一、五月三日福島縣下伊達郡掛田町附近及相馬郡中村町附近約十ヶ町村の區域に亘り約一割五分の被害あり翌四日は福島市、信夫、伊達、安達、安積、岩瀬、田村、石川、東白川、西白川、及相馬郡に結霜あり伊達の川俣及信夫郡の南部安達郡の東北部各村は約五割の被害にして早中生桑全部被害せり詳細調査中

一、四月三十日鳥取縣下未曾有の結霜あり東伯郡の如きは其被害激害にして早生の枯死は勿論桑株晩被害せり故に突然掃立を見合せ或は蠶兒を投棄せる向もあり目下調査中

一、島根縣下にも結霜ありしも被害輕微なり

一、去月三十日の朝鳥取縣下に結霜し桑樹は勿論、楠、櫻、橡栗、枇杷、其他の果樹及蔬菜、苗、にも激甚の被害を與へたとは殘念東伯郡は晩生は被害輕く伸長の望みあるも早生は黑變し掃立を見合せたる向あり被害反別二百八十町岩美郡は早生一割晩生等五六分西伯郡は至る處激甚なりしが就中住吉、彦名、崎津、夜見、河崎の五ヶ村にて約一萬圓の被害とは痛嘆の極みにして實に早生桑は三割以上の騰貴を來せり

西ケ原蠶友會の運動會 東京蠶業習所卒業生及同所出身者より成る同會は前月十七日道灌山に春季運動會を開いた、何にしろ下地は數寄なり御意は好しならなくに季節は花なり天氣好く、櫻の季節には又となない好日和殊に日曜のことゝて大盛會、折も折なり主務者に蠶桐蠶紡事務主任者會議の開け！氣最中の日曜とて御客さんもなか〳〵多く、凝つた競技三十餘番、黑袴隊の白襷、時折奕りて目を醒さしめた、相變らず賣店は盛んであつたが、今年は西ヶ原珍報の發行は見合せとなつた樣であつたから、御仕度中の興はなかつたが同窓運動會で一問題起りそうだつたのは職員の提灯競爭であつた、大問題とは外でもないが皆勇ましくメヤンマタタア立ち上つたがアヘアフタメイナ飛んだものは、途中で皆フイとなり戻つて火を點じたものが三四人あつた、中頃ユウ〳〵吾競技に不圖尙然とノタリ〳〵歩行くのは誰あらう、本多所長、遂に行程中程よりは先登第一と目され見る人をしてヤジ〳〵龜ヨ龜さんよと思はず歌はしめたが決勝點に近づく五六歩、あはれや當日の潜在はせを撓ずべかりし大問題も共にゾート煙のみ見えて一齊汗フキ〳〵ヤレ〳〵とは惜しかりしが御蔭で先登第一の拾ひ物をしたのは岩淵技手是空前絶後の珍

▲**生絲檢査所月報** 横濱生絲檢査所に於ける四月の檢査成績は左の如し

檢査年月	原二號	正量	品位	練減	計
本月	六六	三、四三一	五、〇〇二	一	八、五四二
前月	四〇〇	三、〇〇五	四、三四五	六	七、八三〇
昨年當月	五四	三、〇五六	四、三〇五	一	七、三六六
本年累計	三六九	二、七〇三	二八、三〇五	八	四四、六八六
昨年當月迄累計	六六	二、六〇七	二六、五八六	一	三八、四四二

正量檢査

一檢査件數	三、四三一件	
一總全量	二九〇、五〇五斤	
一總風袋量	五、三三四斤	含水量百分比例 平均 一一、二六
一總原量	二八五、一七一斤	最多數 一三、八三
一總無水量	二五三、一一四斤	最少數 八、九一
一正量	二八〇、九五六斤	

品位檢査

絲別	檢査件數	再繰中切斷數	纖度 平均	纖度 細太の差	類節 大類	類節 小類	強力及伸度 纖度	強力及伸度 強力	強力及伸度 伸度
細綠器械	六四七	八	一〇、四三	三、八四	一	三八	一〇、四三	三六、九	三、〇〇
中細器械	六八二	六	一三、八二	四、五九	一	三四三	一三、八〇	四四、八	三、〇三
座繰捻遣	五	六	一三、〇七	五、三九	一	五七六	一三、〇七	四四、一	三、〇七
座繰折返	七	一五	一三、六〇	五、六九	一	一六〇	一三、六〇	四五、三	一、九九
太絲器械	三、四六七	四	一四、六六	四、四八	一	一四八	一四、四二	四八、七	三、〇六
座繰捻遣	五三	一三	一四、五四	四、八〇	三	一五三	一四、五四	四九、九	三、〇七
座繰折返	一二	一六	一三、七九	七、四五	一	一六五	一三、七九	四八、〇	一、七七
特太器械	五四	三	一八、〇五	五、一五	一	一六五	一七、八八	五六、九	三、一五
座繰玉絲	八三	一五	四八、七七	二七、三五	一	一四四	一	一	一

文藝

懸賞

俳句

花の本花翁宗匠選

秀逸

新緑や幾口つゞく乙女の手　信濃 御信
時鳥障子明くゝ間に過昇る音　武藏 小竹峰
早鮎の(?)なる北間けり暁る鳥月設　羽前 秋峰
命さしたる顔ぬらしけり時鳥　豐山

三度來て丁度咲たる牡丹哉　近江 淡嶺
すゝな畑見るも床しき胡蝶哉　越中 黎夢
山の端の月に曙や茶屋の　信濃 牛里
松風の嬉しさ悟り月見る哉　駿河 極山
花の夢覺めるにの世界の蝶や鳥　越後 山詠
新緑に心直夜明け留守　羽前 豐月
ゆるゝにかゝ影ある丹和哉　下總 花山
飛入る世見わりるの蕾や蝶牡丹　遠江 涉汀
新緑や度行好きの夫時哉　京都 翠暉
新緑の洋なず訪の日設　信濃 一陽
又今山客の課重も牡丹鳥　越後 春咲
魚躍るしなし水の音暗し牡丹人　下總 村甫
新緑や水に遣りし時設　近江 松村
鏡學合て本ゆる(?)結い牡丹の末　武藏 花水
鮎の裏試みのる(?)夜牡丹鳥　安房 閣雲
皆の雨りいつかの月の町風玉　羽前 東閣
牡丹さき家や末哉やうの時　岩手 東人
新緑や哉蝶なる僅きゆる牡丹み　下野 細柳
時鳥なく客聞に見る牡丹設　羽後 風丘
餘珠終る來るの　武藏 櫻水
佳く飲來る哉の僅に(?)牡丹鳥　信濃 依刀
鮮鮎や老の胎(?)話の鐘加減　越後 利刀

軒に傘並べ市のりて引一たき夕つゝぬ晴傷鳥　後 美外
新緑や月にの寵が浦なたきつゝ縁丹貫　備 夫外
咲ふ晴茶の座の蕾敷(?)ふかし牡丹　羽 外
雨に菊の夜やはる夜一(?)しき客の草　丹 前
世屋のもくて今て重一し牡丹時　伊 都
待ち築くもて初夜の富り　京 濃
花つさくもや(?)辨重しと牡丹牡　信 後
牡丹一つきしる(?)に除れ盛　武 都
其きくあ下開な待つちの若　越 後
枝一花もゝ丹に見る重　京 前
舞つ花牡(?)も靜ゆる白　羽 都
蝶に蝶の水にもや花　登 後
雨の蝶の庭にも(?)る　下 總
蝶か家の庭に(?)の　信 濃
嫁か家の庭に　近 江
新緑にほつと一息つきにけり　武藏 玉川
智惠の研くは窓の東明けし　越後 鳳月
得もいへず京の夜の蝶　羽後 越春
時ともし語る親の　羽前 吟
時鳥鳴く月夜の蛙　隆 京
手折たる花にも任ふ雨の(?)　京都 天川

新繭や一等得たる品評会　武蔵　秋月
寫生帳の開く手許や飛ぶ胡蝶　下総　行村
夢の世の夢にうかるゝ胡蝶哉　羽前　一星
一雫は老の一命飲む時鳥　近江　梅花
錯覚や朝霧の森を出る時鳥　神奈川　英松
心地よき世となりにけり時の鳥　武蔵　松鳳
松陰の鯔引立つ鯔や朝の波　信濃　貝峰
宮士入鍋鯔つ今時の鯔　甲斐　松鳳
新義や市客に今朝の鯔　常陸　歌鳳
早鮎や客の氣こきに昭る時　武蔵　晴鳳
温泉の煙りうこきぬ時鳥　羽後　鳳柳
時鳥浮世離れて聞く夜哉　越後　茂理

新繭の出來栄や苦勞の跡　下総　梅居
乙女子と花にひかるゝ蝶の心　京都　黄鳥
豐饒や物ばかりの時鳥　長崎　仙鳥
和作やゆく末ぞ見る時鳥　越後　窓翠
落ち蝶や野月名残の時の鳥　信濃　雅葉
明けて鐘のゆくき伏やの鳥　安房　井寒
花に嘗ゆふ聲らく時の鳥　愛知　石古
山に佳絶の鳥やさし時雨　美濃　李岑
新一鐘や耳掛なき相時の鳥　伊豆　顯堂
唯一聲空に影なし時鳥　上毛　蝶信
掃除にも氣を遣く庭の牡丹　武蔵　花仙
蝶一つ來て動かしぬ心　豐後　狂

とちらから見ても奇麗な牡丹哉　越後　花秋
弓張の月や矢のあの時鳥　信濃　山響
待乳山月の色ありの時鳥　安房　有令
風に羽なすや胡蝶の身の輕さ　備後　室花
三日月に障るなし時鳥　越後　天紫
二の聲は山をうしろや時鳥　下総　月窓
去年より好きなかりし今年繭　近江　雲白
月なり産むむら雪もありし牡丹　武蔵　月想
据りよき花に見せけり牡丹　信濃　仁白
丹譲りなし捨むり牡丹　越中　紙桑
竹籠に涼しさ溜りや白牡丹　越後　梅芳
讃岐ので影静なり牡丹　川　一幹

人

蝶舞や庭も狭しと思ふほど　敦賀　雲隣

地

根分せし頃より待ちぬ富貴草　信濃　松琴

天

光澤もよし升目も重し今年繭　美濃　紫峰

追加

聲程に早くも飛ばす時鳥　選者　花翁

懸賞募集 狂句（第二十七回披露）

金坊子選

▲秀逸

當り蠶は降參術より功が見え　羽前　枯葉
風穴の種で去年の穴を埋め　栃木　蠶人
逢蠶して火の苦勞の一つ殖え　三河　牛丸
居候知らぬ蠶も響めたがり　羽前　東雨
亭主の名呼よくなつた蠶時　小松　東雲
又昔祖父から飼ふたと曾孫が云ひ　同　人
蠶飼は女と先生はすましこみ　羽前　一星
蠶病は學者の家な一寸覗き　山梨　二笑
外れ蠶口數かへる居候　備後　花堂
居候蠶時には病氣勝　三河　竹田
上簇祝婦な亭主上座にし　三河　鳳荷
膿病が虫の額に傳染し　栃木　輕風
蠶時伊勢屋儀に嫁をとり　愛知　松堂
病蠶が出かけて教師疎遠なり　美濃　天島
蠶室を建てゝ天狗の鼻が折れ　京都　雅水
桑食うた罪で白繭身を賣られ　信濃　竹涯
蠶譚話一荷や二荷は繋で飼ひ　丹波　凸坊
惚蠶が覗いて教師罪に入り　埼玉　晴風

▲人賞

お蠶も出る嫁自慢も出る時節　岐阜　甲藤嶺月

▲地賞

お蠶當り教師首硬くなり　信濃　本山其峰

▲天賞

罪のなきお蠶に配所の月を見せ　備後　池田天外

▲選者吟

逢蠶して世を宇治山の獨り住み　金坊子

懸賞募集 俚謠（第二十七回披露）

高橋鬼川選

▲秀逸

お蠶を御覧よ背筋立つゝ、腹は立てずに辛棒する　西ケ原　鴻業鐙
蜂の出茶屋草餅買へば、姥は一々間に蠶飼ふ　京都　素華
障子隔てゝひそ〳〵話す、覗きや蠶飼ひの夫婦連　愛知　閑水
蝶の舞ふやうな飛行機御覧、羽は蠶の絲のあや　同　人
お蠶の山入りつれない空よ、今日も晴れ間は小糠雨　愛知　合有
上蔟親の大蚕を、親子孫立孫順送り　秋田　鳳柳
嫁ばしやんすな夜桑が摘みに、出るも蠶が大事から　備後　天外
跣足で駈出し濃桑摘めば、憎くやしばしの通り雨　同　人
粋な工女の端唄の調に、乗つて繰になる絲　豐橋　蓮鳳
浮なつうても情ばあるよ、切れりや優手で接いでやる　京都　黄鳥
好いた同志で合ふ二つ繭、泣いて割るゝ鍋の中　福島　凱水
好きな酒だてお止じやないが、蠶思へば愚痴も出る　信濃　牧言
海の杼端の絲繰り鍋に、落花散り込む月宿る　羽前　枯葉
櫻散らした惧ばあれど、繭ゆる桑葉に思の雨　京都　紫峯

▲五彩

愛らしいぞへ顔振り上げて、物を云ひそな此の蠶　宮城　果露
桑が蠶きたか戀路の愚痴か、淵に浮かんだ島乙女　熊本　平山
宵の桑摘み膿ふ里ば、風も消さない月あかり　信濃　牧言
夜桑摘み〳〵話したことが、思ひ出される朧月　高知　泣涙
表面や奇麗なあの繭でさへ、中にや蛹がひそんでる　愛知　峰東

▲人賞

後家で暮すも今年で三歳　人にや負まい蠶時　三河　彦坂市外

▲地賞

嫁の實意を蠶が證かす　胸て合點をする姑　京都　小雲素華

▲天賞

戀じやなければあの糸口が　切れて泣かせて癪の種　東京　比留間昇旭

▲選者吟

堅い〳〵も當にはならぬ　堅い繭ほど解けやすい　鬼川

懸賞募集 一と口噺（第二十七回披露）

▲秀逸

◎蠶種の統一　京都　曉塵

甲『きう君のやうに雑種の蠶も一所に混ぜて飼へるものか』乙『ナニかうして蠶の種類を統一するのだ』

◎晝洋燈　冷泉

子供『お父さん家の蠶は暗い所で食はしたから外れたと人が云ひますぜ』父『馬鹿云へ晝間でも洋燈をつけて食はしたぢやないか』

◎桑の顔　福岡　水龍

子供『お父さん蠶の鼻や口は何所です』父『蠶に鼻や口があるものか』子供『でも蠶に目があると云ひますから』

◎電氣燈　德島　準翠

田舎者が初めて電氣燈を見て　甲『こら奇麗で明るいものだなア』乙『一つ買つて土産にしべいか』

◎大食　愛知　紫仙

甲『蠶しなに大食しては身體の爲めによくないよ』乙『でも蠶は眠り際に充分食はせねといけないぢやないか』

▲人　賞

◎負惜み　岐阜　甲藤嶺月

女房『貴方今度も蠶が五分作では家の暮しがつかないぞやないか』亭主『でもお隣りは丸外れだと云ふから、それよりはましだ』

▲地　賞

◎晝寐　豐橋　長坂苹風

父『此の蠶で忙しいのに何故晝寐をしてるか』子『蠶が眠つて居るからその眞似をしたので』

▲天　賞

◎飼育法　京都　水野黄鳥

養蠶家『蠶の飼育法は色々あると云ひますが、桑の食はせ方でも違つて居ますか』皮肉教師『イヤどの法でも矢張桑は口から食はせます』

懸賞募集 寫生文

高橋鬼川選

▲秀逸

◎若葉の谷　熊本　平山才太郎

桑葉盛りに立山の絶頂に登ると、細長い谷間は眞青に染つて天女の帶を流したやうである、桑摘乙女は其中に工合よく點綴して、そして繪のやうに動かなく見える、山寺の午の鐘が強く余韻を殘し、緩く谷間を流れて行つた

◎暗流　京都　小雲素華

『お絹、もういゝ加減に起きないと蠶が飢じがつてるよ』と姑の聲に、ハツと驚いて起きやうとした途端に、オギヤアと嬰兒が泣き出した『煩しい兒だ每夜每宵に起きさすがよい』『お母さん私が只今……』恐るべき暗流の小波である

◎洗滌　丹波　泉凸坊

姉さん冠りの可憐な少女が十餘名、由良川の清流で蠶か洗つて居る、洗ふ者、擔ぐ者、干して居る者……是等は女子養蠶傳習所の生徒だ、向ふの堤には大きな牛が伏して居る、暖かい日が金色の桑の波頭を渡つて、何所ともなく吹く風に、甘い匂が運んで來る

▲人　賞

◎暖日　京都　門西亨生

午後は非常に暖かくなつた、催青室の障子を開け放ちて寐轉んだ儘外の景色を眺めた、麥畑の末は若葉の山と共に霞んで、裏の藪から聞ゆる鶯の聲も何となく眠い、一杯に受けた日影の重さに堪へかねてか、庭前の八重櫻は二片三片夢のやうに散つた

評に曰く『如何にも恍惚として眠くなりさうだ』

▲地　賞

◎刹那　福井　永野龍水

道端の桑畑に働いて居た僕は便を催したので、桑を立てた儘小便しながら、不圖尺蠖が居るかと心付き、高い桑の枝ばかり見て居る刹那、『お早う』と云ふ聲、ハッと思つた時には、知人は僕が小便して居る前の道を通り過して居た

評に曰く『飛んだ所を見られたものだ』

▲天　賞

◎夕立　丹波　宮下花外

煤を流したやうな黑雲が、空一面に低く垂れて、〆切つた程蒸し暑い、桑畑に唄が止んだ、蛙が唱き出した、姉さん冠りの乙女は桑籠背負つて彼方へ急ぐ、はや隣村は墨繪のやうな雨景色となつた

評に曰く『筆の先より今にも雨が降りさうだ、巧みな寫生だ』

文藝懸賞募集

俳句

六月分課題五月末日〆切並來沒書全年分の課題は二百十三號に在り

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題　蠶棚。花菖蒲。氷水。初蟬。夏の月

▲懸賞　●天（一人）會報一ヶ年分◎地（一人）會報半ヶ年◎人（一人）會報三ヶ月分

▲規則　一題一句つゝ一人に付五句限り。用紙端書に限る。便宜上東京新宿北裏一二三松林花翁宛送らるべし遅期のものは沒書す應募者は本會々員若くは會員外と記し住所の國郡町村番地姓名俳號共明記せらるべし。之れなき者は縱令其選に入るも贈賞せず

▲此他狂句俚謠一口噺五行文等の規則は前々號を見らるべし

蠶海涓滴

△迪宮淳宮　兩皇孫殿下去九日丸尾敎育主任を從へ東京蠶業講習所へ台臨あらせらる皇室の斯業に御心を注がせ給へる今に始めぬこと皆ら感泣の外なし。

△大英國エ　ドワード七世皇帝陛下去六日薨去あらせられ御葬儀は今二十日フロゲモーア宮に於て行はせらる我國民哀悼の至誠を表せずして可ならんや。

△上州南三　社從來の組織を變更して法律保障の下に立つ事とし役員の改選を行ひ其筋に認可の申請を爲す基礎を磐石の上に置き更に大なる發展を爲せ。

△客月三十　日朝各地に多少の降霜ありたるが栃木縣下都賀郡の降霜殊に甚しく大谷水代間々田の各村被害激甚を極め桑園殆んど全滅に歸せりとは悲慘。

△韓國農商　工部の奬勵に基き各貴族大官等盛に養蠶し本邦の婦人十三名を雇入る斯くて鷄林八道の養蠶を改良するを得ば國富自から到らん大に努めよ。

△日英博を　機としたる外遊の邦人二萬四千人一人の消費額七千圓として壹億六千餘萬圓也とは中外子の算盤生絲を賣た金ソックリ飛んでマダ不足若干。

△蠶種統一　問題に對し群馬縣下の某一年に二十萬金を支出し以て專ら政友會議員の買收に努めたりなどと東京每日紙まことしやかに書き立つ是眞赤な噓。

△某蠶種家　曰く蠶種の統一問題は自己の蠶種をより多く賣らんが爲と罵り各地に散在せる七百餘の蠶種を如何にして統一せんかと嘲る愉に是一種の卓見也。

△大阪商船　對同盟聯合汽船會社の生絲運賃競爭問題は烈しき競爭を見るべき模樣なりしも其後日本郵船の斡旋にて妥協整ひ生絲の運賃百斤六弗に復舊。

△淸國第一　回作養蠶は品質作柄共に平年作以上にして今日の見込み七八千梱の輸出品あるべしとは在廣東瀨川總領事の電報なり本邦の蠶作其成績如何。

△岐阜外二　三縣蠶種に對し物品製造業の名義を以て課稅するも蠶病豫防問題解決すれば課稅問題は自然消滅に歸すべしと農務局長語るとは蠶種屋子の報。

△橫濱蠶絲　外四品及米穀株を合併したる橫濱取引所は合併後の成績頗る良好昨今の純收入一日平均千圓を下らざるの盛況を示すも本季の出直し如何か。

人事彙報

人事彙報

蠶絲業に關係ある諸氏にして其筋より辭令を受けられたる者左の如し。

東京蠶業講習所講習部長ヲ命ス　蠶業講習所技師　辻　楠太郎
東京蠶業講習所試驗部長ヲ命ス　蠶業講習所技師　林　驛　作
東京蠶業講習所夏秋蠶部長ヲ命ス　蠶業講習所技師　十時雄次郎
京都蠶業講習所試驗部長ヲ命ス　蠶業講習所技師　川島勝次郎
京都蠶業講習所講習部長ヲ命ス　蠶業講習所技師　石川準太郎
任京都府技師叙高等官七等　福島縣技師嵯七位　山崎榮藏
位靜岡縣技師任高等官六等　富山縣技師正七位　渡邊寅八
任滋賀縣技師叙高等官六等　靜岡縣技師正七位　生方五郎
任福島縣技師叙高等官七等　島根縣技師嵯七位　井口幹夫
任富山縣技師叙高等官六等　滋賀縣技師正七位　土居伊太郎
任島根縣技師叙高等官七等　高知縣技師嵯七位　犬塚盛太郎
任茨城縣蠶業技師　正八位　一色芳藏
任栃木縣蠶業技師　正七位　井上伍郎
任滋賀縣蠶業技師　岐阜縣蠶業技師嵯七位　岩間修三
任宮崎縣蠶業技師　福井縣蠶業技師　岩坪時藏
石川縣蠶事講習所長ヲ命ス　石川縣蠶事講習所技師　岩藤馬太郎
任長野縣蠶業技師　埼玉縣蠶業技手　藤崎卓智
任東京府蠶業技師　四條仁義
任新潟縣蠶業技師　新潟縣蠶業技手　藤間大治郎
陞叙高等官五等　宮城縣技師正七位　河田誇三郎
陞叙高等官五等　宮城縣技師正七位勲六等　丹羽敬太郎

大日本蠶絲會報廣告料

特等		並等	
回數	一頁半頁	四分ノ一頁	一頁半頁	四分ノ一頁
一回乃至六回ニ付	貳拾圓	拾貳圓	七圓	拾五圓	八圓	五圓
七回以上一回ニ付	拾七圓	拾圓	六圓	拾貳圓	七圓	四圓

●會員は右料金の二割引とす●四分の一頁未滿は謝絕す●前金にあらざれば掲載せず●一頁は一行二十七字詰七十二行とす

●本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十三年五月二十日印刷發行

東京市神田區錦町三丁目十八番地
編輯兼發行人　小池市松

東京市神田區錦町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區錦町二丁目一番地
印刷所　三秀舍活版所

東京市神田區錦町三丁目十八番地
發行所　大日本蠶絲會
（電話本局一四七三番）

EMPIRE DU JAPON
CONDITION DES SOIES DE YOKOHAMA.

MOUVEMENT DU 1er AU 30 Avril 1910.

Mois et Années.	Conditionnement des soies grèges. Nombre.	Poids net.	Poids conditionné.	Moyenne de la perte au cond.	Passage des soies grèges. Nombre.	Décrassage des soies grèges. Nombre.	Essais des soies grèges. Nombre d'épreuves.
Avril 1910	3,431	171,102.45 k	168,378.80 k	1.48	98	"	5,063
Mois précédent	3,005	149,591.05	147,490.31	1.35	174	6	4,745
Avril 1909	3,098	152,006.08	149,672.70	1.53	57	"	4,305
Total depuis 1er Janvier. 1910	11,702	568,420.09	558,403.58	1.52	359	8	18,577
" " 1909	11,657	581,053.70	571,010.83	1.65	76	"	16,508
" " 1908	9,772	478,215.78	469,513.78	1.82	"	"	10,944
" " 1907	6,065	369,044.07	363,387.92	1.56	"	"	6,728
" " 1906	10,705	549,314.59	499,590.47	1.83	"	4	7,985
" " 1905	8,307	395,976.83	379,048.56	1.79	"	"	6,572

Le Directeur de la Condition des Soies,

A. SHITO.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrival.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatures.	Prix. Prices.
		Soie. Silk.				Maximum du prix. Highest prices.
	Picals.	*Picals.*	*Picals.*	*Picals.*		*Yen*
1	266	491	103	—	Hayashigumi	880
2	122	320	63	604	Oguchigumi	830
3	—	—	—	294	——	—
4	639	433	61	—	Jyonasha	910
5	316	627	52	—	Nanbissha	885
6	395	380	61	649	Ishiharakan	905
7	384	664	70	—	Takizawaseishi	900
8	298	495	28	—	Kokuhōsha	905
9	281	343	33	458	Kakuhōsha	905
10	—	—	—	—	——	—
11	605	403	46	—	Daidōkan	920
12	308	575	64	—	Jyōounsha	935
13	341	250	38	1002	Sōshinsha	910
14	412	515	116	—	Maruyamaseishi	885
15	177	527	63	—	Jyōshinsha	915
16	497	305	46	630	Yūkōsha	900
17	—	—	—	—	——	—
18	567	311	62	—	Hayashigumi	910
19	233	347	50	—	Hakusuikan	910
20	281	362	60	564	Kiyosawaseishi	865
21	367	183	10	88	Shinsankan	860
22	197	291	20	—	Fukokukan	860
23	371	120	23	124	Hayashigumi	860
24	—	—	—	—	——	—
25	758	231	153	—	Usnisha	860
26	154	319	38	—	Syōmeikan	860
27	285	234	23	722	Okayahinomaru	850
28	301	307	2	—	Kōseisha	890
29	361	248	12	—	Yajimasha	850
30	307	213	14	177	Shummeisha	855
	—	—	—	—	——	—
Total	9,359	9,403	1,312	5,312	——	—

1 yen vaut environ fr. 2.50. 1 Pical = 60 kilg environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(April 1910.)

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(April 1910.)

		Report. Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back.	A reporter. Brought forward.
Filature.	Filature.	*Pical.*	*Pical.*	*Pical.*	*Pical.*	*Pical.*	*Pical.*
Zagori.	Retrol.	283	134	106	—	75	236
Kakeha.	Orihayashi.	264	37	151	—	115	35
Autres.	Other.	30	47	—	—	48	29
Total.		14,017	9,359	9,403	5,312	1,372	12,661
1909.		14,901	9,070	9,592	9,495	1,221	13,021

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois d'Avril dernier.

Comme les demandes nouvelles sont arrivées de l'Europe et de l'Amérique au moment où l'arrivage de la soie du printemps a diminué et où les stocks disponibles font défaut, le marché a présenté une vive activité malgré l'époque du renouvellement de la soie ancienne et nouvelle. Le titre fin 10 est coté à yen 920 et shinshu extra No 1 à yen 855. Mais dès le milieu du mois, les demandes d'outremer ayant quelque peu diminué, le marché plongea dans l'accalmie et les prix baissèrent. Extra No 1 accusèrent le prix de yen 835 à la fin du mois.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

THE RAW SILK MARKET OF YOKOHAMA.

The following is a brief statement of the condition of the Yokohama raw silk market during April.

Owing to the gradual decrease of raw silk of the spring reeling on the market, goods of the required quality became very scanty At this juncture fresh orders for Europe and America having arrived the market presented a very lively scene in spite of the intermediate season. Consequently raw silk of fine size (9/10 deniers) obtained 920 yen, while Shinshu Extra No. 1 attained 855 yen. From the middle of the month, however, foreign orders somewhat diminished, and the market became dull, resulting in a slight fall of prices. At the end of the month Extra No. 1 stood at 835 yen.